

養父市

井垣城跡

— 一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成26(2014)年3月

兵庫県教育委員会



東上空から



東麓から

巻頭写真図版 2 調査区全景

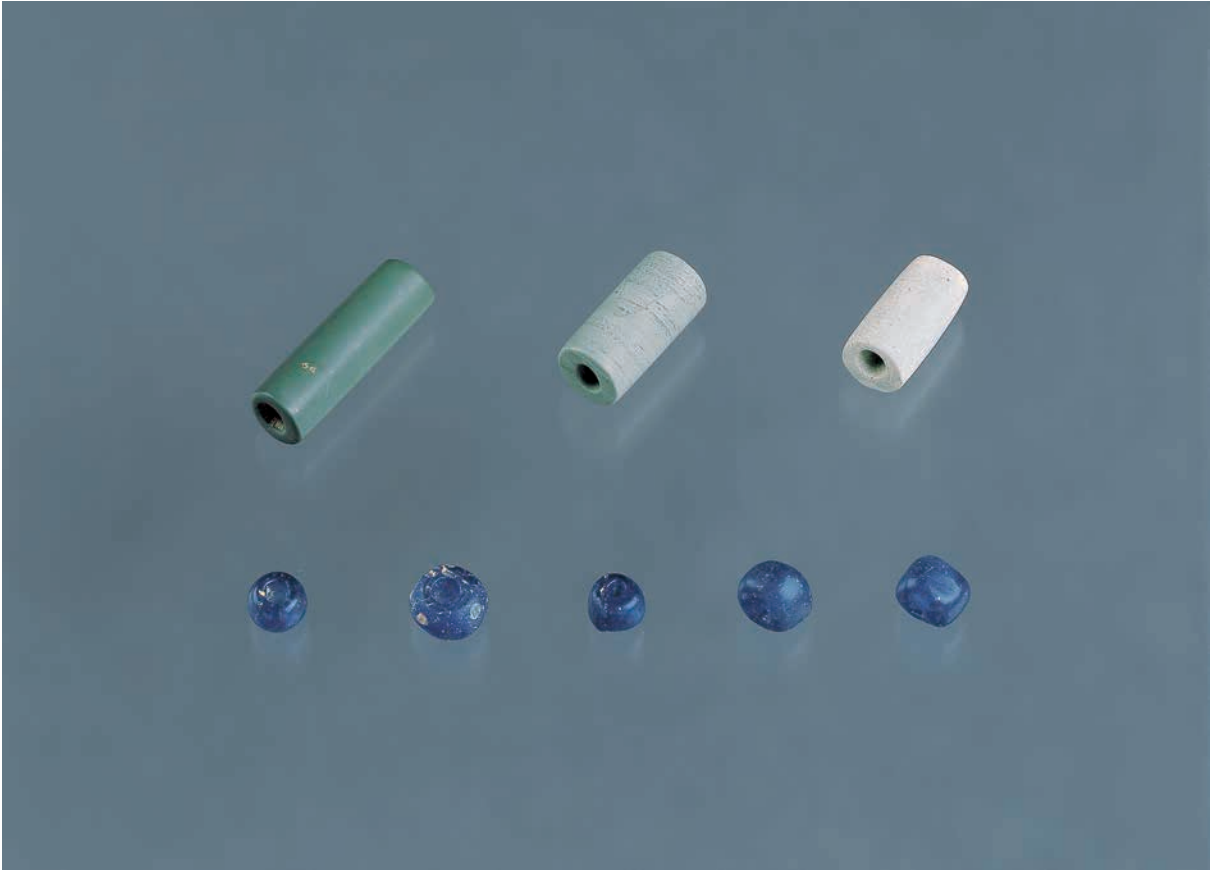


上空から



上空から

卷頭写真図版 4 出土遺物



管玉・丸玉



土師器・鉄器

例 言

- 1 本書は、養父市に所在する井垣城跡・伝大坪八幡神社遺跡・片山古墳の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が調査機関として実施した。
- 3 調査の推移
 - (1) 発掘調査
 - 【確認調査】

平成24年2月16日～平成24年3月1日

実施機関：兵庫県立考古博物館（遺跡調査番号2000380）
 - 【本発掘調査】

井垣城跡

平成20年10月30日～21年3月10日

実施機関：兵庫県立考古博物館（遺跡調査番号2008162）

工事請負：福井建設株式会社

片山古墳

平成20年10月30日～21年3月10日

実施機関：兵庫県立考古博物館（遺跡調査番号2008163）

工事請負：福井建設株式会社

伝大坪八幡神社遺跡

平成20年10月30日～21年3月10日

実施機関：兵庫県立考古博物館（遺跡調査番号2008164）

工事請負：福井建設株式会社
 - (2) 出土品整理作業
 - 平成24年7月21日～平成25年3月26日
 - 平成25年6月20日～平成26年3月26日
 - 実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
- 4 本書の編集・執筆は、同整理嘱託員佐々木誓子の協力を得て、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 山上雅弘が担当した。但し、第3章第4節遺物については兵庫県立考古博物館学芸課篠宮 正が執筆した。
- 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 6 写真測量は、以下のとおり作業委託を行い実施した。

本発掘調査：株式会社オーシスマップ
- 7 遺物写真撮影は、株式会社タニグチフォトに委託して実施した。
- 8 調査成果の測量には、2級基準点S2No31・同32及びこれを既地点として新設した3級基準点を使用した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第Ⅴ系に属する。なお、本書に用いた方位は座標北を示し、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

9 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、関係各機関をはじめ、以下の方々から御協力や御教示をいただいた。

御芳名を記して深謝の意を表する。

黒田龍二（神戸大学建築学科教授）・谷本進（養父市教育委員会）・山根実生子（同左）・岸田明美（同左）・津崎未来（同左）・西尾孝昌（但馬考古学研究会）・瀬戸谷皓（豊岡市教育委員会）・潮崎誠（同左）

以上敬称略・五十音順・括弧内は当時の所属

山城の名称について

本遺跡については『養父の城』（養父町教育委員会 1991）・『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』（兵庫県教育委員会 1985）などでは、「七日めぐり」伝承に登場する「城代井垣大坪甚十郎」の名前から「井垣城」と呼称したため、本書もその名称に従った。また『養父町史・第1巻』（養父町 1990）では、この城が対岸の稲津城を見上げる位置に所在するとして「稲津城館」とする。しかし、これらはいずれも文献的に良質の史料によって裏付けられたものではない。

一方、城跡の大半が養父市大坪に所在することから、養父市教育委員会では同城を所在地の名称から「大坪城」（養父市教育委員会2010『図説養父市城郭事典』）としている。本来はこれに従うべきであるが、本書では調査の事業名称の関係から井垣城で統一している。

本文目次

第1章 遺跡の位置	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 遺跡の歴史的環境	1
第2章 調査の経過	5
第1節 調査に至る経緯	5
1. 調査前の経過	5
2. 調査の工程	5
第2節 現場調査の体制	6
第3節 整理作業	6
1. 整理の経過	6
2. 整理の体制	6
第3章 発掘調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 戦国時代の調査成果	7
第3節 近世以降の調査成果	11
第4節 古墳時代の調査結果	17
1. 遺構	17
2. 遺物	19
第4章 まとめ	28
1. 井垣城跡	28
2. 出土遺物から見た井垣城跡と時期	29
3. 伝承と井垣城跡	29
4. 伝大坪八幡神社遺跡について	30
5. 古墳群について	30

巻頭写真図版

巻頭写真図版1 遺跡遠景
巻頭写真図版2 調査区全景

巻頭写真図版3 伝大坪八幡神社遺跡
巻頭写真図版4 出土遺物

挿図目次

- | | |
|--------------------------|---------------------------------|
| 第1図 遺跡位置図 | 第21図 八幡神社小祠（南から） |
| 第2図 稲津城跡主郭（西から） | 第22図 S B 2 礎石13 |
| 第3図 稲津里城跡の堀切（南から） | 第23図 中世土器 |
| 第4図 朝倉城跡主郭（南から） | 第24図 錢貨1 |
| 第5図 十二所城跡（西から） | 第25図 錢貨2 |
| 第6図 周辺の遺跡 | 第26図 急斜面に立地する木棺墓群（西北から） |
| 第7図 稲津の八幡神社（南から） | 第27図 木棺墓1 出土遺物 |
| 第8図 伝井垣甚十郎墓（南西から） | 第28図 木棺墓2 出土遺物 |
| 第9図 稲津の宝篋印塔（南から） | 第29図 木棺墓3 出土遺物 |
| 第10図 畑の宝篋印塔 | 第30図 木棺墓群東斜面出土遺物 |
| 第11図 現地説明会（浅野公民館にて） | 第31図 土器棺 遺物 |
| 第12図 ケーブルテレビ撮影風景（南から） | 第32図 小平坦地1 出土遺物 |
| 第13図 調査前の井垣城跡（南から） | 第33図 小平坦地2 出土遺物 |
| 第14図 調査前の井垣城跡近景代開後（北東から） | 第34図 小平坦地3 出土遺物 |
| 第15図 調査中の井垣城跡（東から） | 第35図 小平坦地4 出土遺物 |
| 第16図 井垣城跡主郭（北から） | 第36図 井垣城跡から見た稲津城と
稲津里城跡（西から） |
| 第17図 集石（西から） | 第37図 井垣城と周辺地区（1/20,000） |
| 第18図 調査区位置図（S = 1/2500） | 第38図 北参道（北から） |
| 第19図 出土遺物（金属製品） | |
| 第20図 八幡神社小祠平面図 | |

表目次

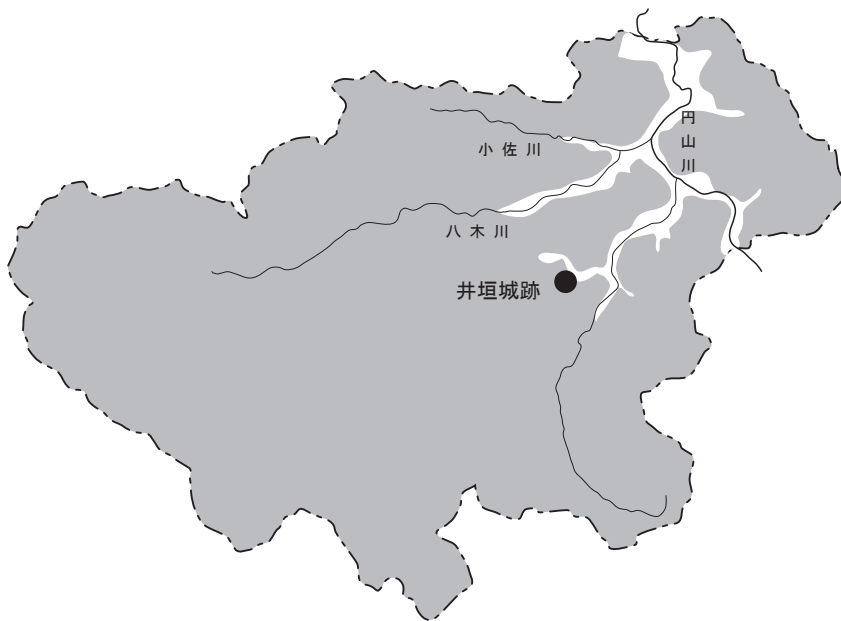
- | | | | |
|------------|----|------------|----|
| 第1表 つぶて一覧表 | 8 | 第3表 遺物観察表2 | 27 |
| 第2表 遺物観察表1 | 26 | | |

図版目次

図版1	井垣城跡と調査区全体図	図版9	S B 2・3 平面図・断面図
図版2	井垣城跡・伝大坪八幡神社遺跡 ・片山古墳調査区位置図	図版10	S B 4 土坑平面図・断面図
図版3	井垣城跡調査区全体図	図版11	古墳時代 遺構図
図版4	土層断面図1	図版12	遺構配置図
図版5	土層断面図2	図版13	井垣古墳 主体部平面図・断面図
図版6	伝大坪八幡神社遺跡調査区全体図	図版14	片山古墳 木棺墓1-1・2 平面図・断面図
図版7	伝大坪八幡神社遺跡断面図	図版15	片山古墳 木棺墓2・3 平面図・断面図
図版8	S B 1 平面図・断面図	図版16	片山古墳 土器棺・土壙墓4 平面図・断面図

写真図版

写真図版1	城跡遠景	写真図版16	井垣城跡 井垣古墳
写真図版2	城跡遠景	写真図版17	片山古墳 木棺墓
写真図版3	井垣城跡 調査前の現況	写真図版18	片山古墳 木棺墓
写真図版4	井垣城跡 調査区全景	写真図版19	片山古墳 木棺墓完掘状況
写真図版5	井垣城跡 調査区全景	写真図版20	出土遺物 中世
写真図版6	井垣城跡 帯郭など	写真図版21	出土遺物 中世
写真図版7	井垣城跡 土層断面	写真図版22	出土遺物 銭貨
写真図版8	伝大坪八幡神社遺跡 全景	写真図版23	出土遺物 銭貨・石製品
写真図版9	伝大坪八幡神社遺跡 近景	写真図版24	出土遺物 鉄製品
写真図版10	伝大坪八幡神社遺跡 建物	写真図版25	片山古墳 木棺墓1 出土遺物
写真図版11	伝大坪八幡神社遺跡 建物	写真図版26	片山古墳 木棺墓2・3ほか出土遺物
写真図版12	伝大坪八幡神社遺跡 建物礎石	写真図版27	片山古墳 土器棺・小平坦地1 出土遺物
写真図版13	伝大坪八幡神社遺跡 柱穴	写真図版28	片山古墳 小平坦地2・3 出土遺物
写真図版14	伝大坪八幡神社遺跡 土坑	写真図版29	片山古墳 小平坦地3・4 出土遺物
写真図版15	伝大坪八幡神社遺跡 土層断面		



第1図 遺跡位置図

第1章 遺跡の位置

第1節 遺跡の位置

井垣城跡が所在する養父市は、但馬中部に位置し、西端は鳥取県との県境に所在する氷ノ山（標高1,703m）に達している。市域の中央を但馬最大の河川である円山川が北流するが、城跡はこの支流である建屋川に面して立地する。建屋川は城跡の北側約500mにある浅野集落の東側で円山川支流の大屋川と合流し、さらに東約5kmで円山川に合流する。同川は旧大屋町の大半を流域に持つので、川を伝って旧養父町から大屋町への交通路が開ける。さらに、城跡の麓には朝来から建屋を通り旧養父町の中心である広谷へと通じる建屋道が南北に通る。また、城跡の東側には畑集落を通して朝来市の枚田に抜ける山越えの道があり、城跡付近で建屋との街道と合流する。このように、城跡の場所は地域交通の結節点に位置しており、重要な役割を担ったことが推測される。

地形的には城跡周辺は標高300～400m前後の山岳で囲まれ、これを縫うように幅200m前後の谷地形が河川に沿って広がる。城跡直下に集落は立地しないが、川の東対岸には稲津、さらに北側約500mに浅野、南側にもやや距離を置いて大坪の3集落があり、城跡はこの3集落の境に位置する。また、地籍上では城跡の東側が大坪、西および北側が浅野となる。そして片山古墳は浅野、伝大坪八幡神社遺跡は大半が大坪、北側が浅野となる。一方、城跡の丘陵裾には稲津が迫る。このように城跡周辺は3集落の中間地点であり、実際の土地境でもある。

第2節 遺跡の歴史的環境

今回の発掘調査で成果が見られたのは戦国時代の山城と古墳時代である。このためここでは2つの時代を中心に周辺の遺跡を紹介し、歴史的な環境について述べることにする。

古墳時代はいくつか古墳の存在が知られている。片山古墳のほかには対岸の稲津に稲津古墳、浅野に浅野古墳が知られるのみで周辺では分布が希薄である。

一方、古墳が多く立地するのは北東の広谷の北側丘陵や東側の上野周辺である。広谷には竜ヶ谷古墳群・人枝坂古墳群・十二所古墳群・宮の上古墳群・大谷古墳群・岡桜古墳・新宮1号墳などがある。このほか、上野には早田古墳群・馬ノ秣古墳群などの古墳が知られる。しかし、周辺地域では発掘調査事例がなくこれらの古墳の埋葬施設の構造や詳細について知ることが出来る材料は少ない。この意味では今回の調査によって木棺直葬墳が検出されたことは大きな成果であった。

戦国時代になると井垣城跡の周辺には山城を中心とする多くの城館が分布する。東の建屋川の対岸には稲津里城跡、山頂には稲津城跡があり、北東側には大屋川に面して十二所城跡、南側の大坪集落には比久尼城跡・松尾館跡・船谷西山城跡、船谷向山城跡などが知られる。ただしこのうち松尾館跡・船谷西山城跡、船谷向山城跡の3城跡については遺構が確認できなかった。また、大屋川の西上流では左近山城跡があり、伊豆背後の南側の山頂には伊豆城跡がある。さらに、東側の広谷には新宮城跡、広野には軽部城跡、上野城跡などがある。

ただし、いずれも中小規模の城跡で、防御施設が発達したものは少ない。むしろ井垣城跡において帯郭の圍繞や塹壕の存在、主郭周囲の土塁と虎口の横矢などが見られる点は、発達した遺構と評価できるものである。

また、稲津城跡は大規模ではないが、主郭の面積が比較的広く、削平のための造成も顕著である。さ

らに立地が谷間地峠を遠望でき、上野地区・広谷地区・稲津周辺などを望むことができるなど広域への見晴らしがきく場所に選地する点が注意される。井垣城跡のように直下の街道を見張り、地区境の防衛に限定される城跡ではなく、稲津城跡は養父町域東半地域の詰城としての機能をになった山城であった可能性が高い。

また、井垣城跡から南の建屋地区でも周辺に多く城郭が分布する。ウスギ城跡・餅河内城跡・野谷城跡・能座城跡・三谷城跡などが狭い谷地形に面して築城される。いずれも郭を連続させる構造のもので、堀切は散見されるものの、防御施設に発達したものは看取されない。規模についてもウスギ城跡がやや広域に郭を構築するが、それ以外はいずれも小規模なものである。

これらの城跡を含めて養父市の東地域では総じて大規模な城郭は見られず、単純な郭構造のもので占められる。このため地域の中核となるような城郭がなく、点在しながらやや高密度に分布することが特徴といえるだろう。

なお、建屋地区ではウスギ城跡の山裾の場市遺跡で13世紀前後の居館に伴うと考えられる園池が発掘調査によって検出されている。この遺跡の上段にはウスギ城跡の居館（殿屋敷）があるが、調査区周辺はこの居館の前史となる遺構とみられる。なお、この建屋地区は竹田城主である太田垣氏の故地とされる。検出された庭園は3段階の変遷が見られ、12世紀後半に築庭され15世紀まで規模を縮小しながら維持されたようである。ただし、いわゆる室町期における将軍邸を規範とする庭ではなく、在地の武士層による独自の庭であるといわれている。状況から考えると寺院に伴う遺構の可能性も考慮する必要があるだろう。また、この遺跡の出土遺物は豊富で広域流通品が多く山間部という立地から考えると特異である。土師器皿は在地産の手づくね製品が多くを占め、ごく僅かに京都系土師器が混じる。その他にはⅢ期段階の備前焼や東播系須恵器、中国産の貿易陶磁、瀬戸焼の製品、青銅製水滴（ウサギ形）などの広域流通品や貴重品が多量に含まれていた。居館主の裕福さを物語るとともに、当地の経済的な流通網が発達していたことを窺わせる成果であった。



第2図 稲津城跡主郭（西から）



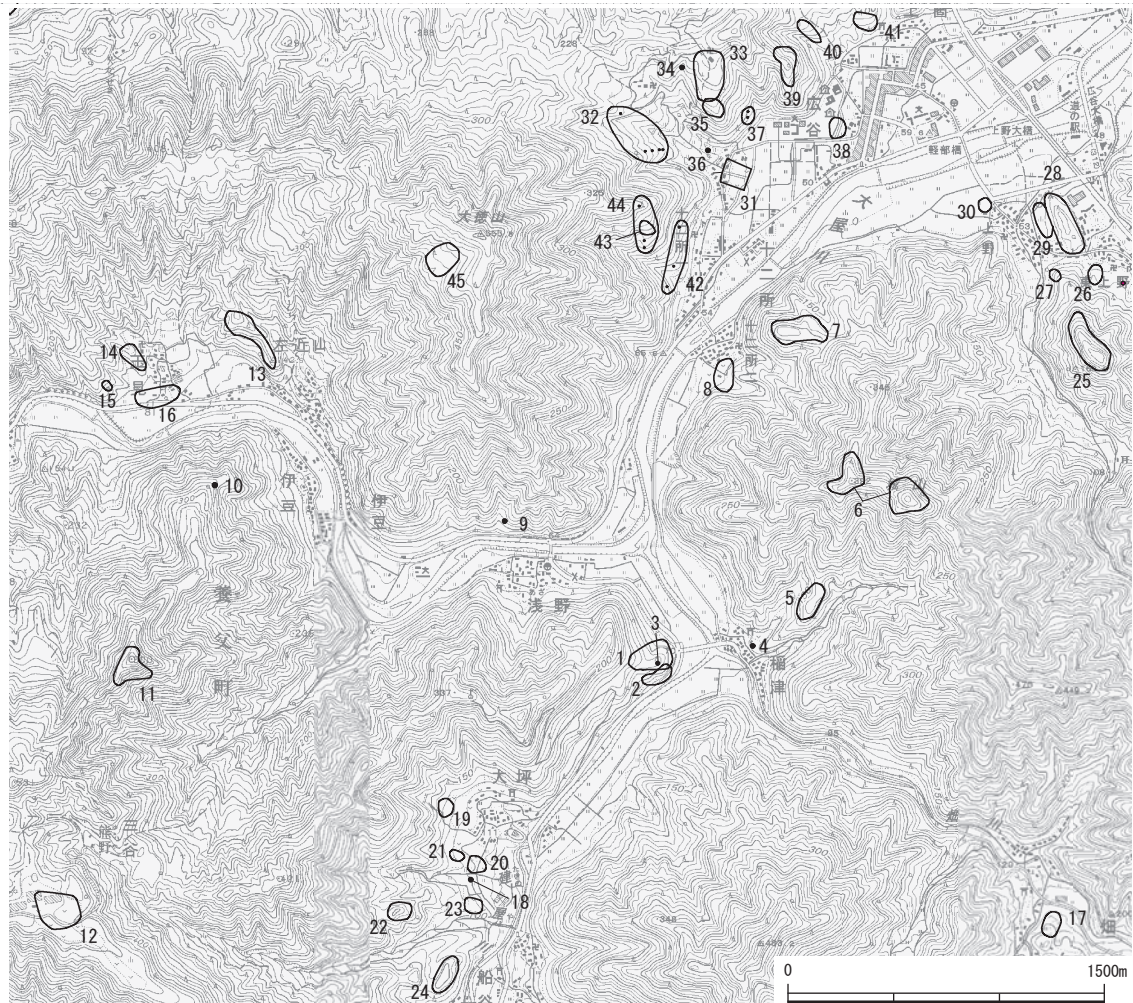
第3図 稲津里城跡の堀切（南から）



第4図 朝倉城跡主郭（南から）



第5図 十二所城跡（西から）



- | | | |
|---------------|-----------------|------------|
| 1. 井垣城跡 | 2. 片山遺跡 | 3. 片山1号墳 |
| 4. 稲津古墳 | 5. 稲津里城跡 | 6. 稲津城跡 |
| 7. 十二所城跡 | 8. 宮留角遺跡 | 9. 浅野古墳 |
| 10. 伊豆家ノ上遺跡 | 11. 伊豆城跡 | 12. 熊野遺跡 |
| 13. 左近山城跡 | 14. 玉見城跡 | 15. 観音山墳墓 |
| 16. 玉見・下畑遺跡 | 17. 畑坪ノ内遺跡 | 18. 山田遺跡 |
| 19. 松尾館跡 | 20. 一本木遺跡 | 21. 小谷古墳群 |
| 22. 比丘尼城跡 | 23. 船谷西山城跡 | 24. 船谷向山城跡 |
| 25. 上野城跡 | 26. 早田古墳群 | 27. 馬ノ秣古墳群 |
| 28. 軽部城跡 | 29. 小山遺跡 | 30. ユリ遺跡 |
| 31. 十二所土井の内遺跡 | 32. 竜ヶ谷古墳群 | 33. 新宮山寺院跡 |
| 34. 新宮1号墳 | 35. 新宮山経塚・中世墳墓群 | 36. 岡桜古墳 |
| 37. 大谷古墳群 | 38. 檜ヶ坪遺跡 | 39. 新宮城跡 |
| 40. 人枝坂古墳群 | 41. 宮ノ上古墳群 | 42. 十二所古墳群 |
| 43. 寺の上遺跡 | 44. 寺の上古墳群 | 45. 仙源寺跡 |

第6図 周辺の遺跡

このほか中世の寺院遺跡が知られている。大徳山の山頂に仙源寺跡や、広谷の北側の山中にある新宮山満福寺がある。満福寺は真言宗寺院で中世には16坊を数えるなど盛大な寺容を誇り、康永二年（一三四三）在銘の宝篋印塔一基はじめ中世墓群、多数の石造遺品が残され、境内には幾段もの坊院跡が認められる。天正八年（一五八〇）羽柴長秀（秀長）の第二次但馬攻めに際し寺領を没収され、一時衰退するが寛文年間（一六六一―七三）出石藩主小出氏によって再興されたとされる。新宮山満福寺では北側の旧寺域に新宮山経塚・中世墳墓群があり、昭和58年に発掘調査が行われている。中世墓は鎌倉時代から室町時代前期のもので、約六〇基が検出された。出土品は骨蔵器として備前焼の壺と甕・土鍋・漆塗曲物などがある。このほかには経塚が2基が検出されたが、これらは河原石で小石室を造る。一号経塚からは須恵器甕・経筒・菊花双雀鏡・五鈷杵・錫杖・銅銭が出土した。

また、遺跡周辺には中世段階の石像品が点在する。稲津に室町時代初期の宝篋印塔、浅野の大屋川北岸には井垣甚十郎墓と伝わる宝篋印塔、城跡の東側、畑地区にも南北朝期と推定される宝篋印塔（県指定文化財）がそれぞれ知られている。このほか建屋では建興寺で五輪塔、餅河内で宝篋印塔が集積されて残されている。



第7図 稲津の八幡神社（南から）



第8図 伝井垣甚十郎墓（南西から）



第9図 稲津の宝篋印塔（南から）



第10図 畑の宝篋印塔

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

1. 調査前の経過

国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所が計画する一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業にともなって、兵庫県教育委員会では平成12年度に分布調査を実施した。この結果、養父市大坪・浅野において埋蔵文化財の存在が確認されたため、これをNo14地点と仮称して確認調査を実施することとなった。このため平成15年度に確認調査を実施した。この結果、養父市大坪・浅野において、井垣城跡・片山古墳が含まれることと新たな遺跡の広がりが確認された。このためこれらの遺跡（確認調査時点ではNo14地点）について、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所より依頼を受け、本発掘調査を実施した。

このほか、同事業に伴いNo14地点について同様の経緯で調査の依頼を受け、調査区丘陵の東側裾で確認調査（遺跡調査番号2008239）を実施したが、埋蔵文化財は確認できなかった。

2. 調査の工程

調査区は井垣城跡・片山古墳・伝大坪八幡神社遺跡・確認調査（No14地点）の順に着手し、1月からは3遺跡を並行で進めた。なお、作業の進捗を計る目的で伝大坪八幡神社遺跡では、一部重機掘削を導入し効率化を計った。一方、確認調査では当初重機による掘削を計画したが、侵入が困難であったので人力による掘削に切り替えている。

調査では、人力によって表土を除去し、遺構面を検出した後、遺構について写真撮影・実測などを行った。なお、遺構や検出状況などは適宜足場を設置して写真撮影を実施している。

航空測量については当初1回の予定であったが、作業工程を円滑に進めるために2回実施することとした。航空測量は12月15日・2月12日に実施している。

このほか、1月24日には現地説明会を開催したが、降雪のため浅野地区公民館の御好意により公民館をお借りして調査成果の報告をおこなった。参加者は50名であった。また、2月21日には神戸大学大学院工学研究科准教授黒田龍二氏（当時）に伝大坪八幡神社遺跡で検出された礎石建物群について現地指導をいただいた。



第11図 現地説明会（浅野公民館にて）



第12図 ケーブルテレビ撮影風景（南から）

第2節 現場調査の体制

兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第1班

班長 主任調査専門員 山本三郎（職名は当時、以下同様）

主査 山上雅弘・主査 池田征弘

調査補助員 : 山本亮二

事務員 : 中島由美

室内作業員 : 島 里美



第13図 調査前の井垣城跡（南から）



第14図 調査前の井垣城跡近景代開後（北東から）

第3節 整理作業

1. 整理の経過

平成24年度に、土器の水洗い・ネーミング・接合・実測作業、木器・石製品の実測作業、金属器の保存処理作業を、同25年度に、これら遺物のトレース・レイアウト・写真撮影作業、木器・金属器の保存処理作業等の諸作業を行い、本報告書を刊行した。

2. 整理の体制

調査体制は以下のとおりである。

平成24年度

水洗い・ネーミング作業：西口由紀・小川陽子・小野潤子・藤尾裕子・前田恵梨子

接合作業：島村順子・荻野麻衣・菅生真理子・藤池かずさ・上田沙耶香

復元作業：眞子ふさ恵・荻野麻衣・吉村あけみ・佐々木 愛

実測作業：森本貴子・佐々木誓子

保存処理作業：桂 昭子・浜脇多規子

平成25年度

実測・トレース・レイアウト作業：佐々木誓子・古谷章子

保存処理作業：桂 昭子・梶原奈津子

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回の調査は井垣城跡・片山古墳・伝大坪八幡神社遺跡の3遺跡について実施した。しかし、この3遺跡は隣接して立地するため古墳・城跡・神社関連の遺構が互いの遺跡範囲を超えて重複して検出された。井垣城跡の郭群は片山古墳の遺跡範囲（小平坦地1～4）に及び、伝大坪八幡神社遺跡は同山城の居館跡と指摘され、実際に戦国時代の遺物が出土している。一方、井垣城跡の小曲輪1下層には下層古墳が検出されたが、この古墳は片山古墳と同一尾根に立地するため同じ古墳群と評価できる。さらに、伝大坪八幡神社遺跡は八幡神社の境内地に相当するもので、社殿そのものは井垣城跡主郭内に立地する。このように各時代の遺跡は相互に重層的な立地をもつ。このため、本項の報告は戦国時代（城跡）・近世以降（主に神社関連遺構）・古墳時代（古墳）の3項目に分けて行うこととした。このほか、遊離遺物である奈良時代・中世前半の遺物は戦国時代の中で記述することとした。



第15図 調査中の井垣城跡（東から）



第16図 井垣城跡主郭（北から）

第2節 戦国時代の調査成果

井垣城跡は標高128mの丘陵頂部に立地する。基本的に単郭構造であるが、これを防御するために主郭の西辺および南西側尾根続きに土塁が巡り、斜面に2段の帯曲輪をもつ。さらに、南側の尾根背後を堀切で遮断する。（図版1・写真図版3～7）

今回調査の対象となったのは主郭北端の切岸から北側に伸びる尾根筋である。井垣城跡の調査範囲内で検出された遺構は帯曲輪（帯曲輪1・2）と1箇所の小平坦（小平坦地1）がある。これらの遺構の時期は出土遺物（青磁碗・瓦質土器播鉢・土師器皿）や山城の構造から戦国時代末期と考えられる。

ただし、調査を行った尾根筋は丘陵裾に向って張り出し、末端で片山古墳が立地する。山城の関連遺構はこの古墳の範囲にも広がっており小平坦地1～4があり、平坦地は古墳と重なっており墳丘平坦面を加工して構築されている。このように井垣城跡の城域は北側の尾根筋全体を占めるもので丘陵斜面全体に防御施設を張りめぐらしている。

主郭西側の虎口が明確である一方で、主郭東側にも虎口地形が確認される。この通路は神社の参道として後世利用されるが、主郭側の通路側面に台状の地形が認められ、通路が主郭手前で折れる場所に小規模な郭を構築するなど、通路に対して厳重な監視施設が設けられる。これらのことから、この虎口に

ついても山城時代からの通路と虎口として評価してよいだろう。

【帯曲輪】（図版2・3・11・写真図版7）

帯曲輪は上段の帯曲輪1が主郭を圍繞するが、下段の帯曲輪2は主郭南辺までは巡らない。帯曲輪1は小曲輪1の下に構築される。幅1.5～2mで、北東に延びる尾根筋に対してU字形に構築される。小曲輪1との比高差は2m前後で、検出範囲の長さは15.5mである。西側は主郭側面に沿って続き、主郭虎口へと続いている。東側は主郭の東面に続くが途中までで終わっている。

この帯曲輪1の東端には集石が検出された。集石の範囲は長さ2.7m、幅1.3mにわたるが、南側は調査区外にさらに伸びている。置かれている石材は帯曲輪の縁部に位置するもので、円礫が多く付近の河川などから運ばれたものと推測される。検出状況からするとこの石材は“つぶて”（投弾）である可能性が考えられる。石材は重さ700～1,000gのものが多く、180～2,550gのものが含まれていた。大きさは長軸10～15cm前後のものが中心で、出土した石材の個数は141個である。

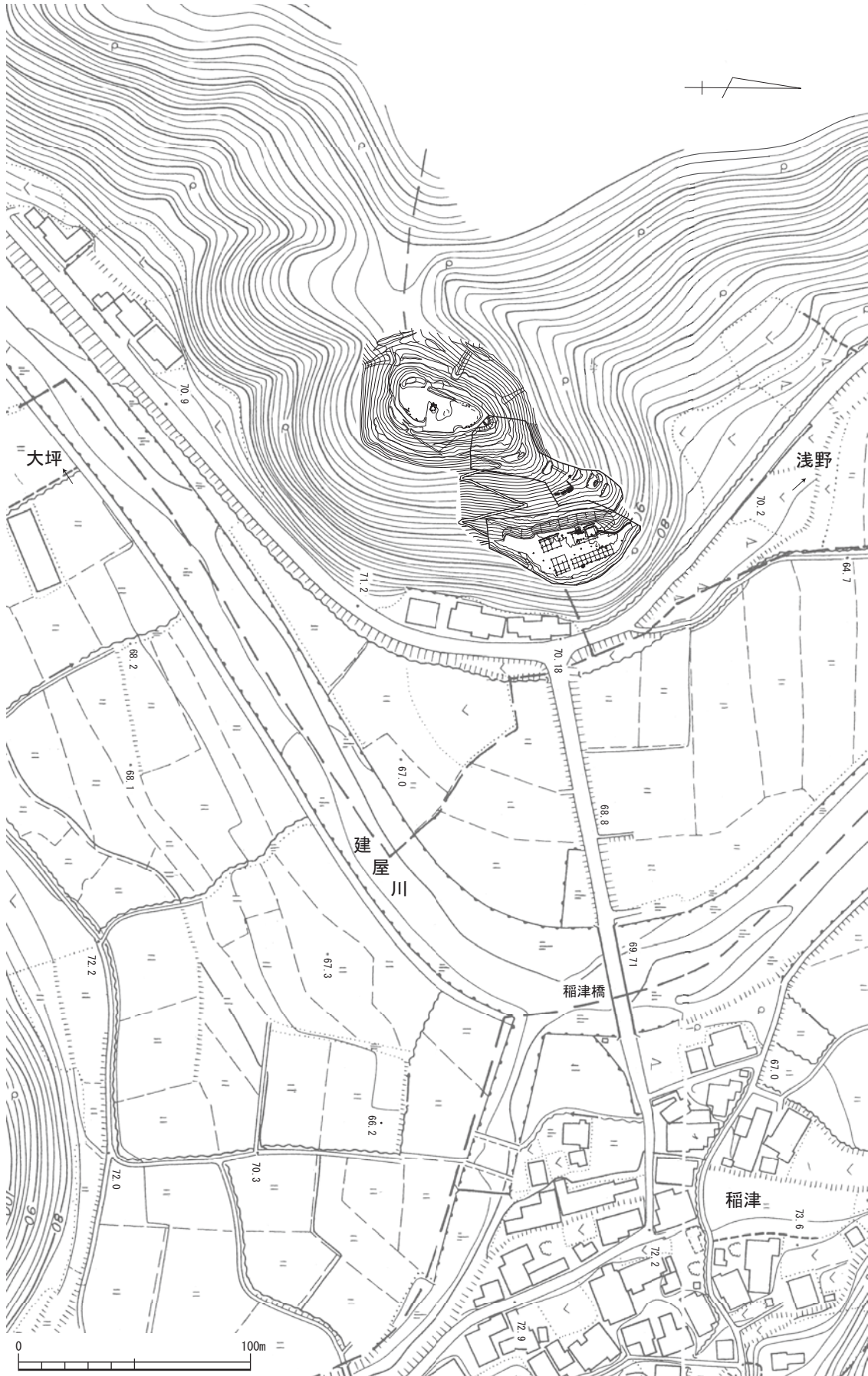


第17図 集石（西から）

帯曲輪2は幅1.5～3.6mで、検出範囲での長さは26mである。東西とも調査区外へ伸び主郭を取り巻

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	No.	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	No.	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	No.	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)
1	10.0	8.0	420	37	7.1	9.2	240	73	12.0	7.8	820	109	16.2	9.5	1280
2	10.5	8.5	590	38	9.5	11.0	700	74	19.0	12.5	1610	110	11.4	8.0	750
3	13.0	9.5	1040	39	9.0	14.5	1140	75	8.4	7.5	180	111	12.5	8.2	1010
4	13.5	11.0	1590	40	8.5	11.0	410	76	10.0	7.5	600	112	11.9	11.5	860
5	16.5	10.5	1330	41	9.7	9.5	240	77	14.1	11.3	1140	113	14.5	11.1	1300
6	13.2	11.5	1140	42	10.2	9.0	1040	78	10.7	7.6	800	114	11.0	8.0	710
7	14.0	11.7	1250	43	8.0	9.2	500	79	11.1	9.0	740	115	12.2	6.8	440
8	11.5	10.0	1650	44	8.5	10.4	580	80	19.8	12.2	2180	116	16.0	9.1	1280
9	17.0	11.0	1740	45	8.0	11.0	460	81	14.6	9.6	1020	117	11.5	10.8	720
10	15.0	15.0	1890	46	7.9	9.1	450	82	9.8	7.0	680	118	12.0	8.4	640
11	8.8	10.0	770	47	7.5	9.6	540	83	9.1	9.3	780	119	18.7	8.8	1520
12	6.2	11.0	550	48	8.0	8.9	460	84	9.4	7.1	180	120	14.5	9.5	1120
13	12.4	15.0	1600	49	8.3	11.6	970	86	11.8	7.2	780	121	9.1	8.3	600
14	10.9	11.1	970	50	9.7	11.0	880	86	14.5	6.7	980	122	12.3	7.1	1020
15	8.0	10.3	900	51	7.1	11.0	640	87	15.1	10.7	1520	123	11.4	7.6	610
16	8.5	11.0	880	52	7.3	10.1	550	88	8.6	9.2	780	124	14.4	11.3	1690
17	11.3	14.5	890	53	8.7	13.2	640	89	11.8	8.2	860	125	11.4	8.5	760
18	7.9	15.4	690	54	12.0	11.9	1130	90	8.8	6.2	320	126	11.6	10.6	1200
19	9.3	9.9	570	55	6.5	10.0	410	91	13.0	10.7	780	127	11.2	8.5	760
20	8.4	13.8	660	56	8.7	10.4	500	92	16.3	9.6	1170	128	13.0	9.4	970
21	7.0	8.5	430	57	8.4	11.5	900	93	11.5	11.3	1520	129	12.4	9.4	1060
22	11.5	14.5	1780	58	10.2	17.3	1220	94	14.0	9.9	1380	130	12.9	10.9	1020
23	12.6	15.1	2300	59	11.5	14.6	1610	95	10.9	13.5	1070	131	15.1	12.9	1920
24	8.7	9.8	770	60	7.0	9.4	320	96	9.9	12.2	780	132	12.5	7.7	540
25	8.9	13.8	1220	61	10.6	14.9	1200	97	8.1	13.3	1190	133	12.6	11.5	700
26	8.6	14.0	600	62	10.8	15.3	1340	98	10.7	12.4	1150	134	11.0	8.3	630
27	7.0	8.5	420	63	9.0	11.5	710	99	9.7	11.4	770	135	11.1	7.5	510
28	8.7	10.5	580	64	7.4	11.4	540	100	10.6	15.8	2010	136	10.9	7.7	700
29	9.0	12.0	1080	65	11.2	12.3	890	101	13.3	16.4	2550	137	9.1	9.5	410
30	6.7	16.4	760	66	11.2	14.7	1400	102	8.0	11.3	730	138	6.9	5.5	190
31	8.6	11.2	500	67	10.7	10.6	900	103	9.2	16.3	1390	139	6.7	6.0	190
32	7.3	9.7	300	68	9.3	13.4	1240	104	9.8	23.9	1250	140	7.6	6.2	270
33	11.9	16.0	1650	69	11.2	12.4	890	105	10.2	12.5	1360	141	7.3	6.7	200
34	8.9	12.8	830	70	10.9	9.2	980	106	8.9	7.1	580				
35	11.5	11.8	630	71	13.8	8.6	1320	107	10.2	7.0	520				
36	6.5	9.1	330	72	9.8	7.6	700	108	11.4	10.3	1100				

第1表 つぶて一覧表



第18図 調査区位置図

くように構築されている。帯曲輪1との高低差は7mと大きい。斜面は大きく岩盤質の地山を削り、前方に盛土をして構築しており、特に尾根筋側面の東西側は盛土が大規模である。一方、尾根筋側は4m幅と広く構築され、北前方への尾根筋の防御を重視している。

【小曲輪】（図版2・3・11・写真図版5）

小曲輪は2箇所検出された。2段の帯曲輪を補助する目的で構築されたもので、北側の尾根筋に帯曲輪1・2を挟んで上下に構築されている。

小曲輪1は主郭と帯曲輪1の間に構築された小規模な曲輪で南北2.9m、東西6mを測る。内部には土坑（SK1）が検出され、この土坑の東側壁には土留めのための石組みが構築されて、内部からは瓦質土器播鉢が出土した。

小曲輪2は帯曲輪2の下に検出されたもので、北側の尾根筋を防衛する目的で構築される。帯曲輪2との高低差は5.6mを測る。南北3.4m、東西10.6mの規模で北側の尾根に向けて構築されている。

【小平坦地】（図版2・3・11・12・写真図版5・7）

小平坦地1は小曲輪2の下に構築されるが、機能的には片山古墳の小平坦地群を背後から支援するためのもの、ないしこれらと連絡することを目的として構築されたものである。規模は南北2.6m、東西6.0mを測る。

片山古墳の範囲からは北斜面を防御するための小平坦地が検出された。検出された遺構は小平坦地3か所（小平坦地2～4）と段状遺構1カ所である。いずれも小規模なもので、山麓の街道監視や防御、山頂へのつなぎのための機能を果たしたと推定される。ただし、片山古墳の範囲では中世・近世に関係する遺物の出土はなかった。

3カ所の小平坦地は井垣城跡から北に延びる尾根突端に位置し階段状に検出された。小平坦地2は小平坦地1から5m下で検出された。小平坦地2は標高106m前後、南北2.6m、東西5.2m、小平坦地3は標高103.5～104mが南北4.6m、東西6.2m、小平坦地4は101mが南北2.1m、東西6.4mである。小平坦地内部からは遺構の検出はないが、小平坦地5の北西斜面には段状遺構が構築される。

【段状遺構】（図版2・11・12・写真図版6）

小平坦地の北西端、麓側に面した場所で検出された。規模は長さ3.7m、幅1.0mほどの小規模なもので平坦地端部を削り込んで構築されるが、内部からは遺構・遺物は出土しなかった。

【出土遺物】（図版23・写真図版20・21）

戦国時代の遺物は井垣城跡および伝大坪八幡神社遺跡から出土している。井垣城跡の範囲から出土した城跡関係の土器は4点で、土師器皿1、須恵器鉢2・瓦質土器播鉢3、青磁碗4がある。一方、伝大坪八幡神社遺跡からは土師器小皿6、同皿7～10、染付皿12～14、瀬戸美濃焼11、銅銭M2が出土している。このほか戦国時代ではないが井垣城跡からは14世紀代の須恵器甕5、伝大坪八幡神社遺跡からは奈良時代の須恵器杯A16が出土している。これらもあわせて本項で報告した。

土師器小皿1はコースター状の器形で手づくね製品であるが、粗成のもので在地産と考えられる。同じく小皿6・8は口縁端部を横ナデするもので京都系土師器である。土師器皿7・9・10はすべて手づくね皿で、京都系土師器である。やや厚手の器肉を持ち、内面および外面の口縁部周辺を横ナデ調整する。

京都系土師器は器壁がやや厚く、ナデを省略するものが多い。皿は7・9・10の3点がある。9は底部の差が明瞭で、体部が直線的に立ち上がり、器高はあまり高くない。口縁端部の横ナデは比較

的丁寧であるが横ナデ幅はやや短い。

須恵器鉢2は口縁部の破片で、口縁端部を上方に拡張する。瓦質土器挿鉢3も口縁部の破片で内面に7本単位の卸目を持つ。内面はハケ目状の器面調整、外面を板状工具で縦方向にナデ調整する。青磁碗4は口縁部片である。外面に鎬蓮弁が陽刻で表現される。染付皿12~14は染付皿B類で外面に草花文、14の内面見込みにも草花文を施す。これらは器形や文様も同一のタイプのものであるのでセットで受容されたものと推定される。

瀬戸焼天目碗11は外面に濃黒褐色の釉を施す個体で、口縁端部を上方に尖らせておえる。

須恵器甕5は口縁部片である。外反する頸部から口縁部端部を上方につまんでおえる。外面には頸部に平行叩きの痕跡が観察され、内面にあて板痕が残る。16は奈良時代の須恵器杯Aである。口縁部を尖らせて上方につまむ。

管状土錘17~24は長さが2.85~4cm、幅1.3~2.4cmであるが、3cm代のものが多く小型の製品である。

鉄製品では銭貨M2がある。銅銭で銭種は宋元通寶（初铸960年）である。これらの戦国時代の出土遺物では京都系土師器や瀬戸美濃焼の天目碗、中国産の染付皿などが含まれる一方、在地系の粗製の土師器皿が少ない。また、丹波では陶器製の挿鉢の補完品である瓦質挿鉢が1点出土しているが個体数は限られている。時期については個体数が少ないため詳細は明らかに出来ないが、土師器皿・染付皿などから戦国時代後半段階のものと考えられる。

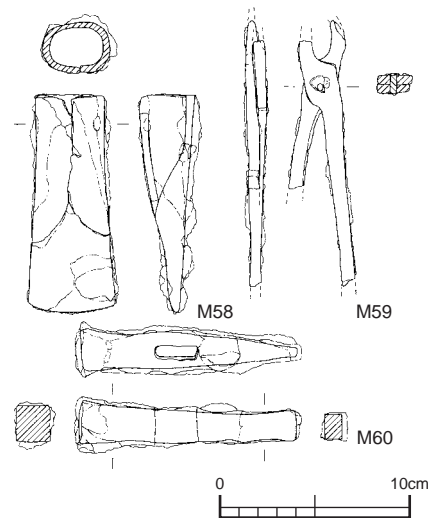
第3節 近世以降の調査成果

近世以降の成果の中心は伝大坪八幡神社遺跡の神社関連遺構が中心である。この他では井垣城跡小曲輪1で土坑が検出され、内部から工具類（金属製品）が出土した。

伝大坪八幡神社遺跡は標高92m前後の丘陵中腹の平坦地である。この場所は明治時代まで大坪・稲津・浅野の各村が集まって祭礼などの行事を行った場所と伝承されているが、確実な文献などは残されていない。調査範囲は神社境内の一部と思われるが、社殿本体は井垣城跡主郭にある1辺2.3~2.4mほどの方形石列がその建物の基礎と推定される。伝大坪八幡神社遺跡からは斜面を登る参道が確認され、帯曲輪から主郭に達する通路が通っている。

検出された平坦地の範囲は南北40m×東西（最大）20m、面積約700㎡で、丘陵斜面を大規模に削平し、麓側に土砂を盛土して平坦地を造成する。このため丘陵斜面側は削平によって高さ7m前後の崖地形となる。さらに、この削平は南北で建物敷地を確保するため削り込みを大規模に行っており、尾根筋の手前でくの字状に削り込みが見られ、特に北側のSB4背後では大規模である。一方、この神社境内の平坦地は南北方向に長く、両端に参道が通り、南側にはさらに山頂へと向かう参道が確認される。

調査によって伝大坪八幡神社遺跡で検出された遺構は建物4棟がある。このうち、SB1~3は礎石構造、SB4は掘立柱構造と礎石が混在した構造を持つ。これらの建物はすべて同一方向を向き計画的に配置されている。



第19図 出土遺物（金属製品）

【建物】

SB 1

(図版6・8・写真図版10・12)

北東部で検出されたSB 1は南北棟で、9間(18m)×2間(4m)と長大である。建物周囲の礎石は長軸60~80cmと大型であるが、中央の柱列の礎石は長軸50cmが多くやや小規模であるので、束柱と考えられる。柱間は梁行・桁行共に2mで比較的通りもよく柱間も揃う。礎石は平石で基本的に河原石である。東辺の北から3石

目の礎石がややずれており、東辺の南から3石目の周辺には拳大の礫が集積される。建物規模については9間としたが北側に礎石様の石材が並ぶことから、さらに北側に延びていた可能性も残されている。

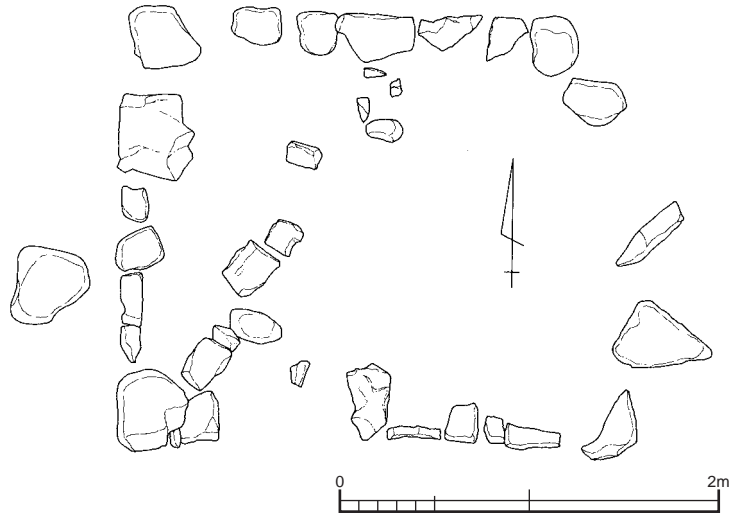
なお、建物が建つ範囲は盛土造成の地盤であるため束柱列と東辺では礎石下に同大の石材(根固め石・蠟燭石)を2~3石ほど重ねるものが多い。断面の痕跡からすると礎石据え付け時に地面を掘り凹め、地表レベルまで根固め石を据えその上に礎石を置いている。

SB 2 (図版6・9・写真図版11・12)

南東部で検出された建物で、柱列が隣接するSB 1とほぼ揃う。SB 3とは4m(2間)の間隔を置いてやはり同方向を向いて建つ。礎石の配置からすると建物は東西棟で、構造は東西2間×南北3間で東側に庇が付く。ただし、西辺の北隅および2石目の礎石は検出できなかった。礎石1~5を東西長とし、礎石4~14を南北長とすると建物規模は7m×6m、面積42㎡である。建物は大半が盛土上に位置するため、SB 1と同じく礎石下部に根固め石を据えるものが多い。

SB 3 (図版6・9・写真図版11・12)

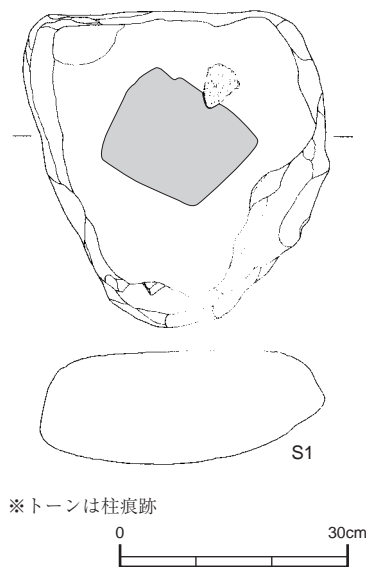
南西部で検出された建物SB 3は南北棟で規模は4間(4.0m)×2間(4.6m)である。ただし、14・15については据え付け痕跡のみが残されていた。礎石構造であるが、造成された地山面の上に建つため、6・7で根固め石が検出された以外は、礎石は



第20図 八幡神社小祠平面図 (S = 1/20)



第21図 八幡神社小祠 (南から)



第22図 SB2 礎石 13 (S = 1/10)

地山に直接据えられる。S B 3の南側からは寛永通宝を中心とする銭貨が集中して出土している。

S B 4 (図版6・10・写真図版13)

北西隅で検出されたS B 4はP 3・P 2・P 1・P 11・P 10・P 9の並びから、南北9.9mの柱列が確認できる。この柱列に平行して東側に礎石の並びが確認され、12・13・14・15に対応して先の柱列が等間隔で並ぶ。これらからP 3-P 9間の柱列を桁行とし、P 3-P 12間を梁行とする建物を復元した。この建物は東側が礎石、西側が柱穴構造となるもので、変則的な構造を持つ。建物規模は南北棟で南北5間×東西2間(9.9m×5.0m)を測る。ただ、建物南側は柱穴が検出されないため、礎石が攪乱を受けたものと推測される。

一方、建物の北西隅には方形土坑が検出され、この土坑からは北参道に向かって溝が伸び、参道に沿って下っている。溝は幅50cm、深さ20cm前後の規模を持つが、S B 4の汚水などを排水する機能を果たしたことが推測される。このほか、建物内側の西寄りに土坑群S K 2～5が集中し、建物外側にはS K 6が検出された。S K 2～5は基本的に円形の土坑で直径0.7～0.9m、深さ0.3～0.6m前後の規模である。これらのうちS K 3では堀直しが行われている。

S K 6はS B 4に付属する土坑である。建物外側に接して掘削され、南北方向に長軸を持つ。長軸長1.45m×短軸長0.8m、深さ0.8mの規模を持つ。内部および東辺の周辺には人頭大の円礫が多数投げ込まれていた。

【出土遺物】 (第19・22図・図版23～25・写真図版22～24)

近世以降の遺物が出土したのは伝大坪八幡神社遺跡が中心である。土器では江戸時代の染付碗(15)1点、鉄製品では工具類(M58～60)、銭貨(寛永通宝M3～M50・一銭貨M51～M57)などがある。

染付碗15は小型の丸碗で外面高台に1重回線を描き、さらに体部にも描くようであるが欠損しており詳細は不明である。

銭貨は寛永通宝が62枚、一銭銅貨が7枚、合計69枚出土した、これらの銭貨はS B 3の南側、南参道を上った平坦地の入口周辺から集中して出土しており、多地点からの出土はない。

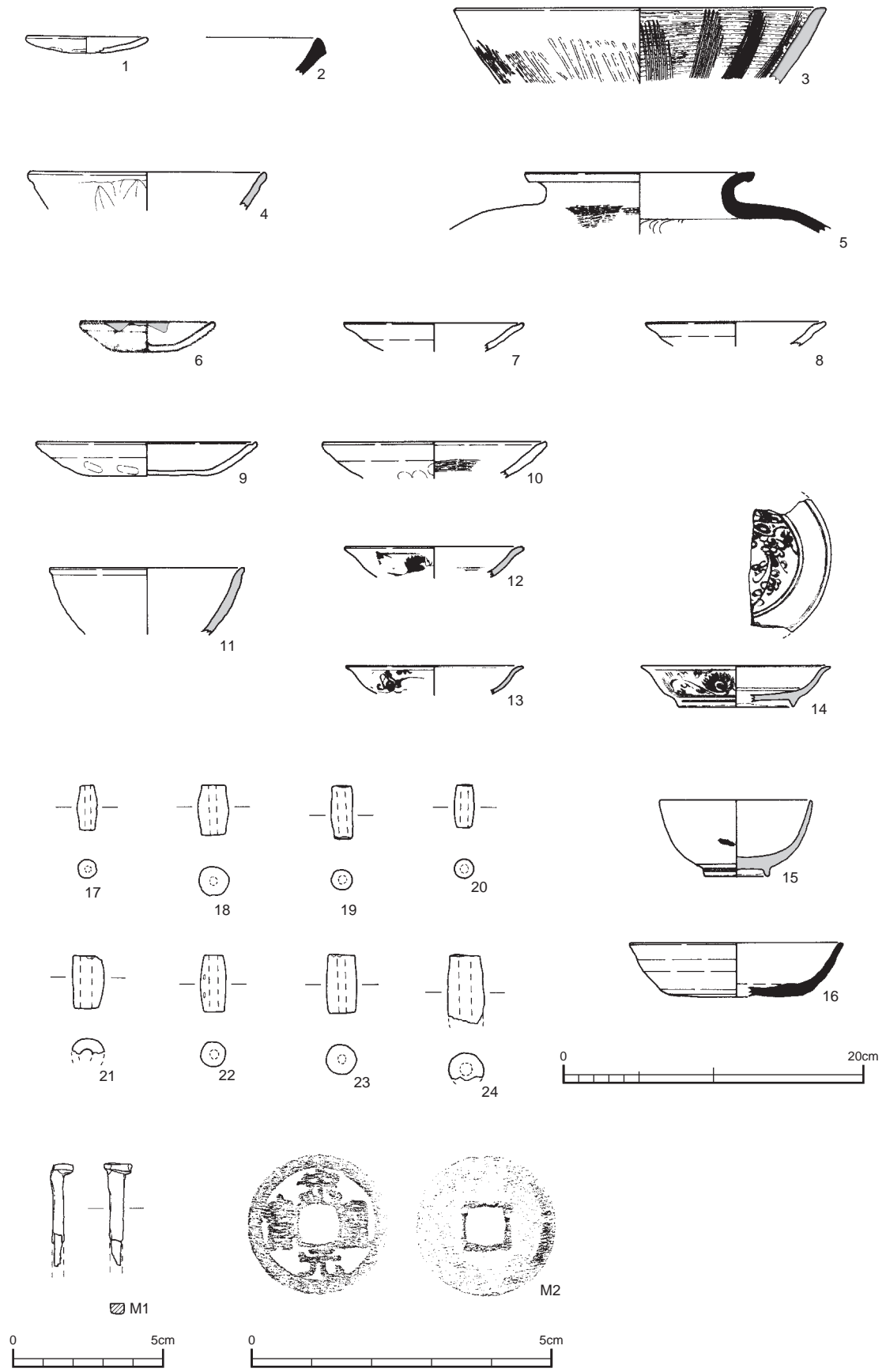
寛永通宝は大半が銅銭であるが、M47～M50は鉄銭である。またM10は裏面に文の文字を入れる。

一銭銅貨はM57の明治9年が最も古く、M52の明治18年が最も新しい。出土したものはすべて表面に卍竜が描かれ、周縁に大日本・製造年・菊が刻印され、裏面に一銭、周縁に桐ノ葉文、頂点には菊文を描く。

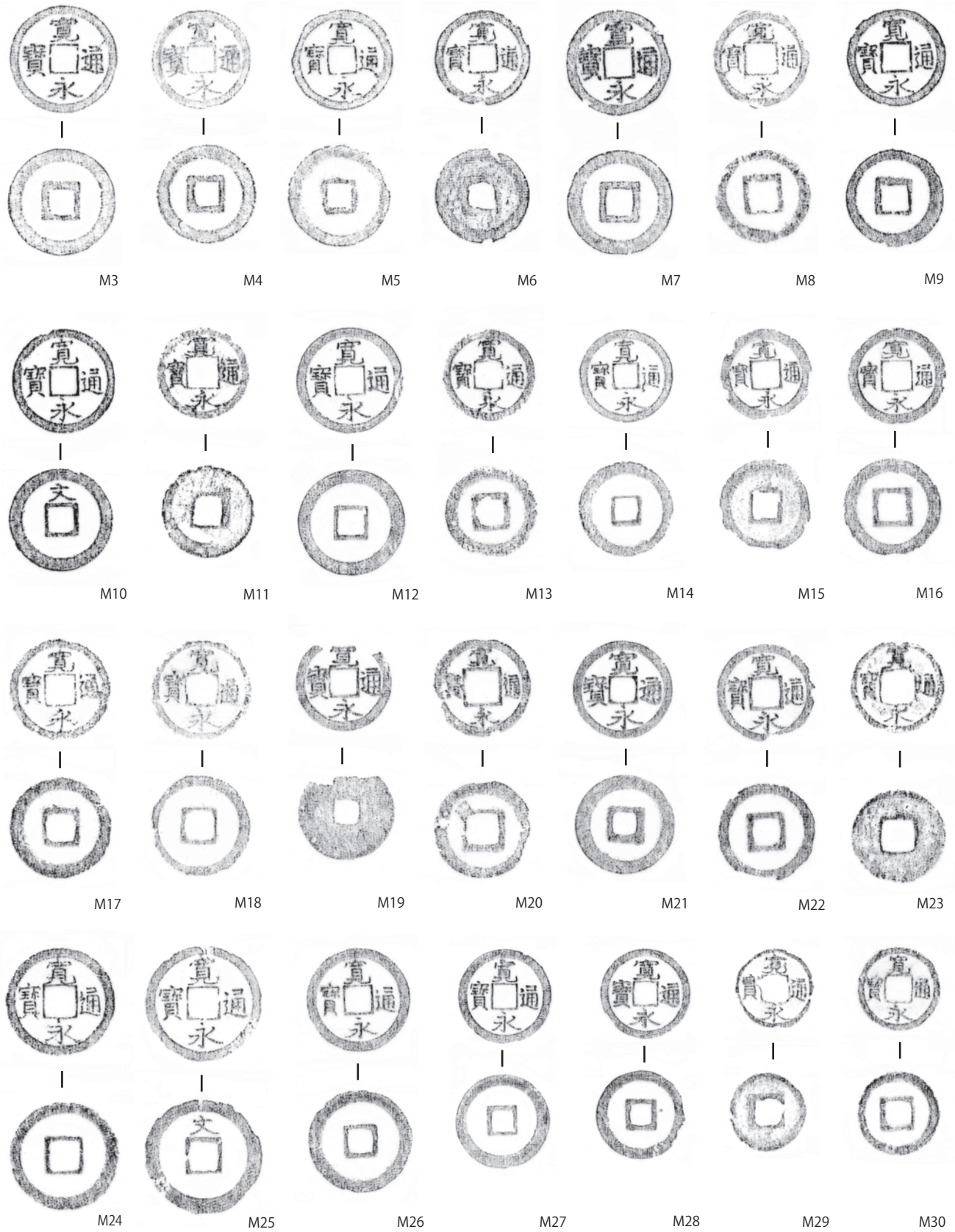
明治6年に貨幣のデザインが一新され国際化を目指して、これ以降の貨幣には貨幣価をローマ字表記し、裏表は左右を水平軸に縦転する形式となっている。出土したものはすべてこの形式のもので明治期の早い段階に鑄造されたことが分かる。

工具類は井垣城跡小曲輪1のS K 1ないし攪乱土から出土した。鉄斧(M58)、鉄鉗(M59)、鉄槌(M60)、スラッグ(M65)がある。

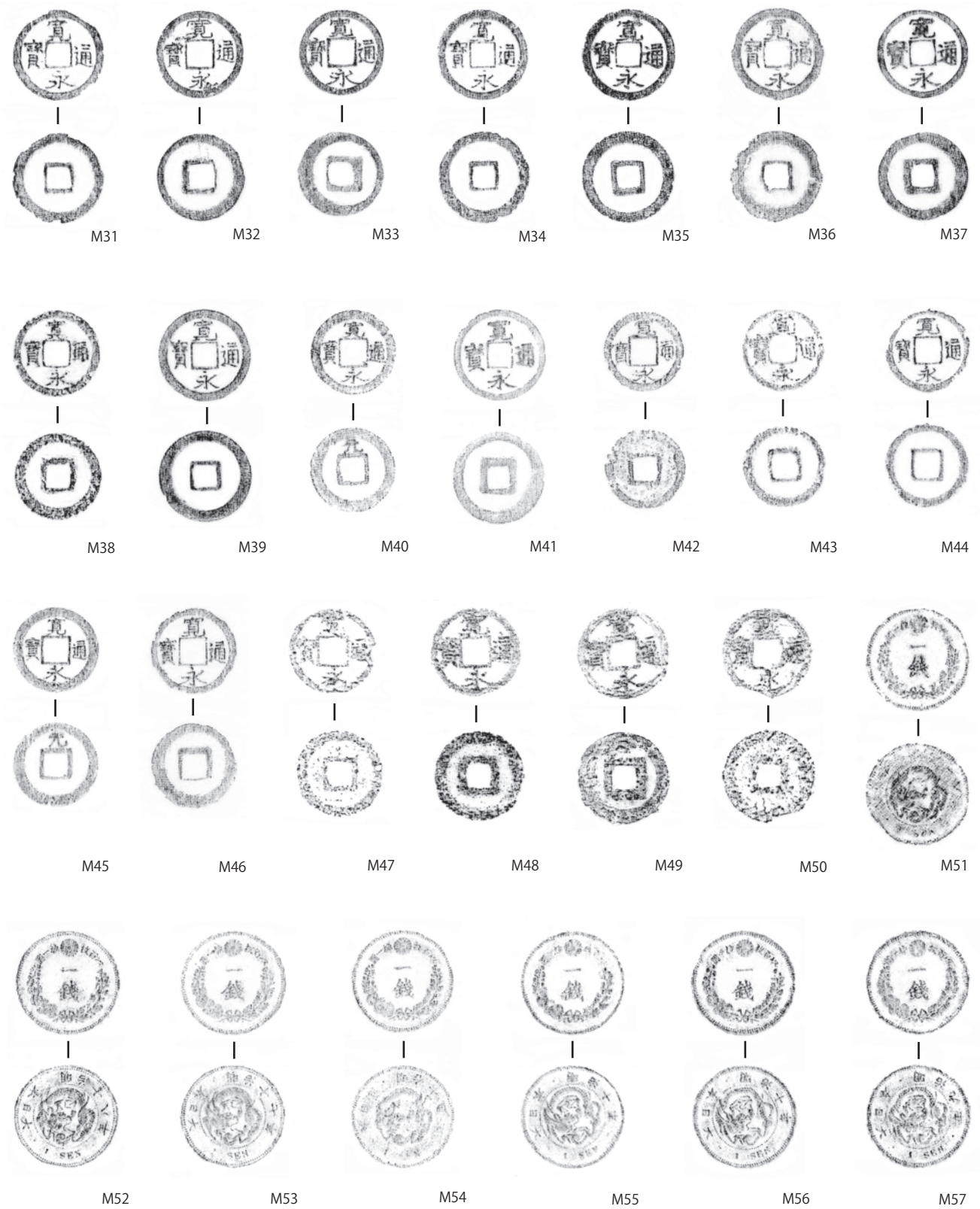
鉄斧(M58)は、全長11.6cm、刃幅4.8cmを測る。片刃無肩式の袋状鉄斧である。鉄鉗(M59)は残存長13.9cmと小型品である。鉄槌(M60)は全長11.9cm、幅3.0cm、厚さ2.9cmを測る小型品である。



第 23 图 中世土器



第 24 圖 錢貨 1



第 25 圖 錢貨 2

第4節 古墳時代の調査成果

1. 遺構

井垣城跡から北側に延びる尾根上に周知の古墳、片山古墳が知られていたが、今回の調査によって新たに土壙墓4・木棺墓群が検出された。また、周知の遺跡である片山古墳については土壙墓4の可能性が濃厚であるが特定することはできなかった。この他、井垣城跡の範囲からは小曲輪1下層に古墳1基が検出されたため井垣古墳とした。

以上のとおり、調査によって片山古墳は単独墳ではなく、尾根上を中心に階段状に古墳が構築される構造を持つことが明らかとなった。

井垣城跡（図版1～5・写真図版16）

井垣古墳1基が検出された。この古墳は井垣城跡の小曲輪1の北端下層から検出された。墳丘の上面は小曲輪1・帯曲輪1の造成によって削られている。墓壙は2段墓壙で長さ軸3.7m、幅2m以上、深さ76cmである。上段の墓壙の棺の小口側部分のみ棺の幅だけわずかに下げられている。ただし、埋葬施設の上部は築城時の造成によって状況は不明となっていた。

埋葬施設は箱式木棺で、長さは1.75m、幅は50cmである。棺底には径5cm以下の円礫が敷かれている。円礫の厚さは3～5cmで墓壙底はほぼ水平に地山を掘削して構築する。

棺内の東端では径10cmの角礫が2つ置かれ、枕の可能性が考えられる。下段墓壙の小口側掘方内には幅約20cmの平石が置かれている。ただ棺内には副葬品がないため詳細な年代は判然としない。

棺上の埋土（棺底より約60cm上）からは鉄斧、鉄鎌、金槌などが出土しているが、これらは前掲のとおり近世以降の土坑SK1に混入したものである。

片山古墳（図版1・2・11～16・写真図版3・17～19）

古墳時代の遺構は調査区東側の斜面に庄内期の木棺墓群（1-1・2、2、3）、小平坦地1・2間に布留期の土器棺、平坦地3の下層に土壙墓4が検出された。この他、小平坦地2の東斜面に黒色包含層が確認され、内部からは土師器が集中して出土した。これらの土器は小平坦地2の造成によって、斜面に流失した土砂に土器が混じったものと判断され、もともと尾根上には古墳墳丘が構築されていたと考えられる。このため、城郭の築城は墳丘地形の平坦面を足がかりとして、さらにこれを造成することによって平坦地を拡大したものと考えられる。この他、土壙墓4についても同様に古墳墳丘を造成して小平坦地を構築するもので、尾根上の古墳はすべて築城時の影響を被っていると判断される。

これらのことからみると、尾根先端の防御施設は古墳地形を再利用する形で造成が行われていたことが窺われ、このことによって古墳の墳丘地形は失われたと考えられる。

【木棺墓群】

（図版2・11～15・写真図版17～19）

木棺墓群は尾根筋より西側に下がった斜面で、標高104.5m前後の位置に検出された。



第26図 急斜面に立地する木棺墓群（西北から）

これらは等高線に平行して列状に並んで見つっている。北側の木棺墓1-1と1-2はほぼ同じ位置で検出されており、その南側に木棺墓2、木棺墓3が並んでいる。木棺墓はわずかに平坦面を造り出していると思われるが、明瞭な地山の成形は認められない。木棺墓の時期は土器から庄内期と考えられる。検出された木棺墓群の斜面北側からは暗黒褐色シルト層から多量の土師器を含む包含層が検出された。この包含層は木棺墓群の直下から6～7m前後斜面方向に広がり、幅は木棺墓群に沿って10m前後にわたって確認されている。出土した土師器のうち29・30などがこの包含層からの出土である。これらの遺物は状況から木棺墓群から流失した土砂に混じって出土したものと推測される。

木棺墓1-1は木棺墓1-2に対してほとんど重なっているがやや山側にずらして設けられている。墓壙は平面長方形で、長さ3.2m、幅1.25m以上、深さ83cmである。埋葬施設は底部の断面は弧状を呈し、小口が丸みをもつことから、削り抜き式木棺と考えられる。長さは2.0m、幅は50cmである。棺内北端西側で鉄剣、掘方から破砕された小型の甕が出土している。棺内北側中央では他の部分に対してやや赤色を呈した部分が存在する。遺物の位置や赤色を呈した部分から頭位は北と考えられる。

木棺墓1-2は木棺墓1-1に切られている。墓壙は平面長方形で、長さ2.6m、幅0.5m以上、深さ18cmである。埋葬施設は底部の断面が弧状を呈し、削り抜き式木棺と考えられる。長さは2.45m、幅は30cmである。棺内北部西側でM61が出土した。遺物の位置から頭位は北と考えられる。

木棺墓2は木棺墓1の南側に位置している。墓壙は平面隅丸長方形で、長さ2.2m、幅1.0m、深さ50cmである。埋葬施設は箱式木棺と考えられ、長さは1.65m、幅は南端で55cm、南端で35cmである。棺内南部東側でM63、棺内中部東側で鉄鏃M64、棺内及び掘方内から破砕された壺片27が出土している。遺物の位置や棺の形状から頭位は南と考えられる。

木棺墓3は木棺墓2の南側に位置している。墓壙は長楕円形で、長さ2.3m、幅0.8m、深さ25cmである。埋葬施設は底部の断面が弧状を呈し、削り抜き式木棺と考えられる。長さは1.75m、幅は50cmである。棺内南端で碧玉製管玉3点、ガラス製丸玉5点、棺内南半で破砕された壺28が出土している。遺物の位置から頭位は南と考えられる。

【土器棺】（図版2・11・12・16・写真図版18）

土器棺は木棺墓群背後、標高107mの尾根上に位置している。掘方の平面は楕円形で長さ113cm、幅85cm、検出面からの深さ30cmである。高さ約70cmの大型二重口縁壺を横たえ、頸部より上を欠いた丸底の小型の甕を身の口縁部の内側に差し入れて蓋をしている。時期は布留期と考えられる。

【土壙墓4】（図版2・11・12・16）

小平坦地3の下層で検出されたもので、平坦地の先端付近に位置し、東西方向に長軸をもつ。平面は一部木根の影響により乱れているところもあるが、西側がやや幅広い隅丸長方形を呈している。長さ2.5m、幅1.5m、深さ57cmである。底部での規模は長さ1.85m、幅45cmで、西端が幅50cmとやや広い。木棺の痕跡は確認できなかった。土壙墓に伴って遺物は出土していない。

城跡の小平坦地3は古墳地形を改変して平坦面を拡大したと推定されるが、この地形の原形は古墳構築に伴って形成された墳丘と考えられる。しかし、背後の周溝を含めて古墳の痕跡が消滅していることからみると、城跡の平坦地構築が大規模で、古墳を完全に破壊したものと推定される。

2. 遺物

片山古墳（墳墓）からは古墳時代初頭から前期にかけての遺物が出土している。内容は土器が最も多く、他に金属器と玉類がある。

【木棺墓1】

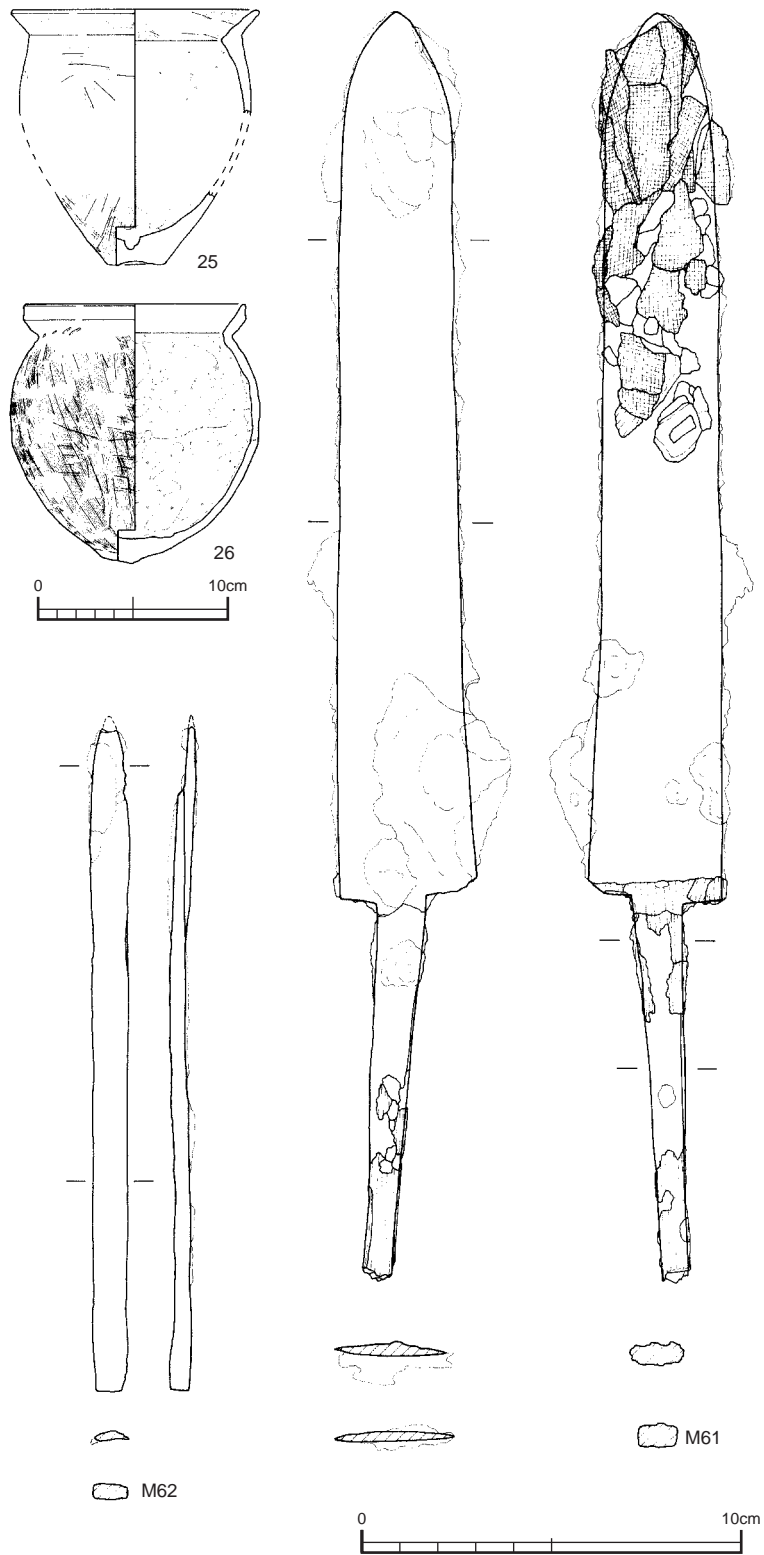
（第27図 写真図版25）

(1) 土器

甕が2点出土した。

25は口縁部と底部の破片から復原した。体部から口縁部にかけて、く字状に屈折する。体部は横および縦方向の短い単位の手調整を行う。口縁部は外面が縦方向、内面が横方向を中心とした手調整を行い、ヨコナデを行うが弱い。体部内面は斜め上方に向かってケズリを行う。底部は平底でやや凹んでおり、ナデで仕上げる。内面は縦方向の指によるナデを行うが、中央部分は未調整で成形時の痕跡が残り、大きく凹んでいる。外面にはススが付着しているが、内面にはコゲは存在していない。土器全体の容量は推定で0.86リットル、体部の容量は推定で0.72リットルである。

26は球形の体部に小さな底部を作りだす。口縁部は屈曲し、上方に立ち上げ、ヨコナデにより面を作る。体部外面は横方向のタタキ後、縦方向の細かい手調整を行い、内面は下半を縦方向、上半は横方向のケズリを屈曲部まで行う。底部側面には



第27図 木棺墓1出土遺物

接地黒斑が残り、対する内面に熾溜黒斑が残る。外面にはススが付着しているが、内面にはコゲは存在していない。土器全体の容量は1.10リットル、体部の容量は0.99リットルである。

(2) 鉄器

木棺墓1-1から剣M61が、木棺墓1-2からは鉞M62が出土した。剣M61は全長33.5cm、剣身長23.5cmを測る。剣身の厚みは4mmで、鑄は存在しない。関は直角関で、茎は細く、全長10.0cmを測る。剣身部には木質は存在していないが、表面の先端部に折り重なった布が付着している。茎の関部分には剣身と同じ幅の木質が付着している。

鉞M62は全長17.6cm以上を測り、刃部先端を僅かに欠く。刃部は僅かに屈曲しており、刃部長3.0cm以上、刃幅1.1cmを測り、先端が尖る。鑄は観察できない。柄部は幅0.9cm、厚み0.4cmの断面形が長方形をなす。木質は存在しない。

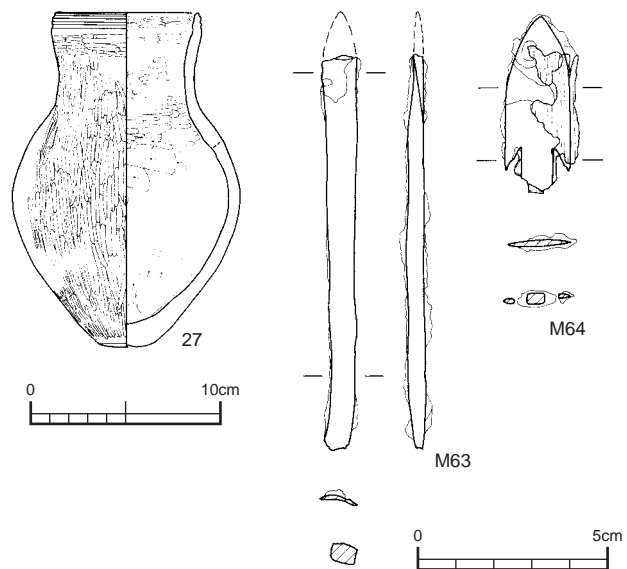
【木棺墓2】（第28図 写真図版26）

土器と金属器が出土した。

(1) 土器

直口壺27は縦長の体部に小さな平底を作り出す。体部から外反気味に直立する口頸部が立ち上がる。

口縁端部は受け口状に屈曲させ、外面には面を作り、擬凹線を施す。体部から頸部にかけては、縦方向のミガキ、口縁部直下は横方向のミガキを行う。内面は下半を縦方向、上半は横方向のケズリを行い、口頸部は横方向のミガキを行う。体部外面最大径部には覆接触黒斑が存在するが、反対面には接地黒斑は存在しない。土器全体の容量は0.83リットル、体部の容量は0.66リットルである。



第28図 木棺墓2出土遺物

(2) 鉄器

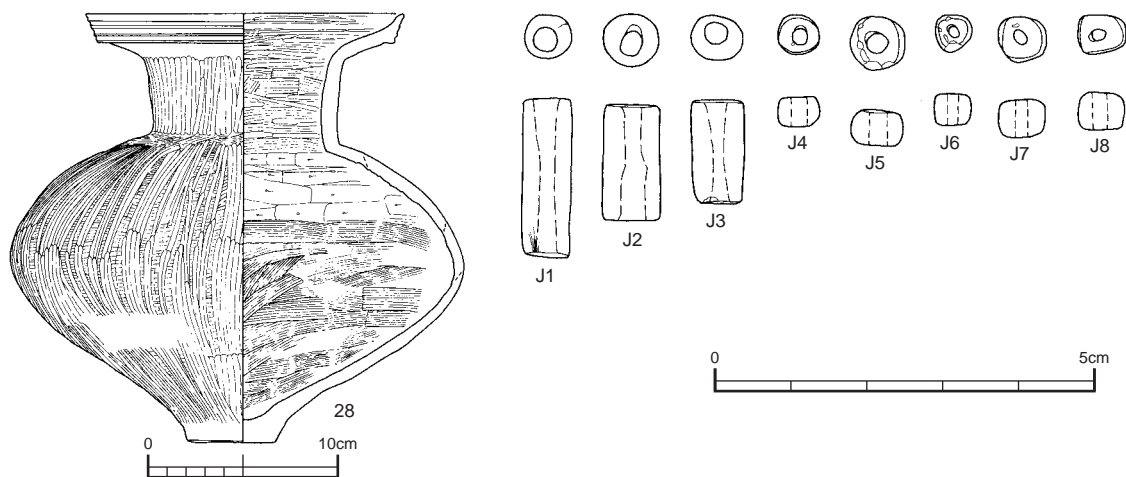
鉞・鏃が出土した。鉞M63は全長10.4cm以上を測り、刃部先端を欠く。刃部は僅かに屈曲しており、刃部長2.0cm以上、刃幅1.0cmを測る。鑄は観察できない。柄部は幅0.7cm、厚さ0.5cmの断面形が長方形をなす。木質は存在しない。鏃M64は短茎鏃で、全長4.7cmを測る。鏃身長4.1cm、幅1.7cm、厚さ0.2cmで、腸挟がある。茎部は長さ1.2cm、幅0.6cm、厚さ0.3cmで断面形が長方形をなす。茎部の周囲に木質が残り、外周は錆化した樹皮が存在する。

【木棺墓3】（第29図 写真図版26）

土器と玉が出土した。

(1) 土器

広口壺28は扁平な体部に安定した平底の底部を作る。頸部は体部から直立して立ち上がり、口縁部は



第 29 図 木棺墓 3 出土遺物

大きく屈曲して外方に開き、口縁端部は上方に拡張し、擬凹線を施す。体部から頸部にかけては、縦方向のミガキを行う。内面は下半を横方向、上半は横方向のケズリを行い、口頸部は横方向のミガキを行う。体部外面下半部にはススが付着している。土器全体の容量は3.80リットル、体部の容量は3.16リットルである。

(2) 玉

管玉と丸玉がある。管玉 (J1~J3) は 3 点出土しており、いずれも両面穿孔である。太さはいずれも 6 mm 前後である。J1 は碧玉で濃緑色である。片側端部の側面には、一次整形の粗い磨痕が残る。長さは 2 cm 以上で、1 本だけ長い。J2・J3 は緑色凝灰岩で、J2 が緑灰色で縞があり、J3 が淡緑灰色である。長さは J2・J3 とも、1.4 cm 前後である。

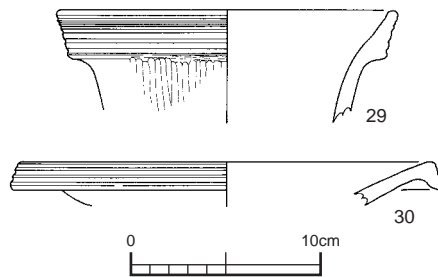
丸玉 (J4~J8) は 5 点出土している。濃青色のガラス玉で、いずれも巻付け技法で作っている。表面は角が残り、丸く仕上がっていない。直径 6 mm 以上の比較的大型の J5・J7・J8 と、直径 5 mm 以下の比較的小型の J4・J6 とがある。厚みは 4 mm 前後で揃っている。

【木棺墓群東側斜面】 (第30図 写真図版26)

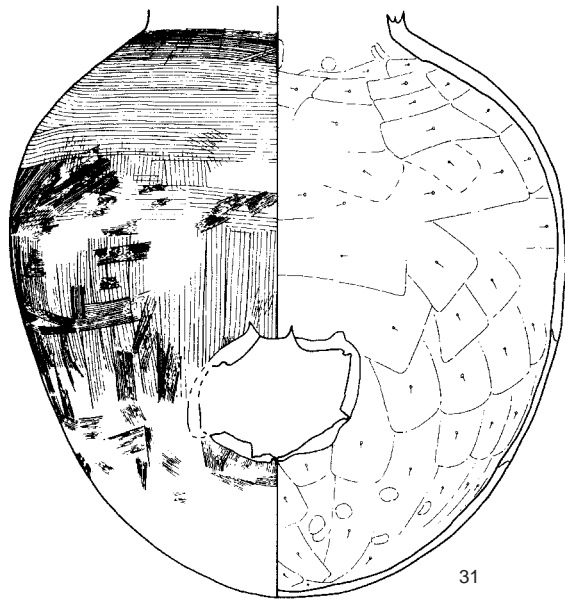
(1) 土器

木棺墓 1~3 の東側斜面から出土した土器で、おそらくいずれかの木棺墓に供献されたものが転落したものと考えられる。壺・器台が出土した。壺 29 は広口長頸壺の口頸部の破片で、口縁部外面に粘土を貼り付けて有段にし、擬凹線を付けている。頸部は縦方向のミガキを行う。

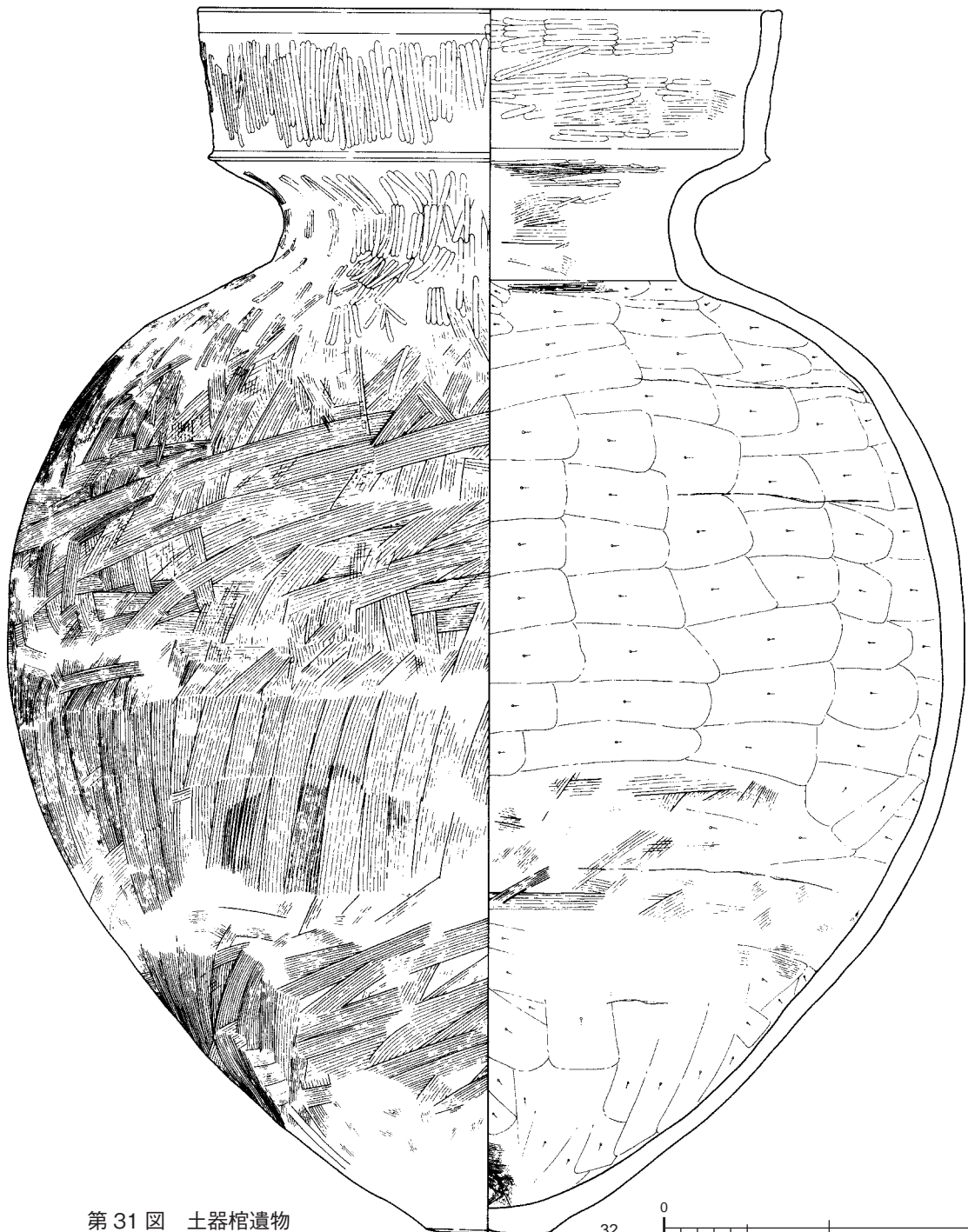
器台 30 は口縁部の破片である。口縁端部は下方に粘土を貼り付け外傾させて面を作り、擬凹線を付けている。



第 30 図 木棺墓群東側斜面出土遺物



31



32



第 31 図 土器棺遺物

【土器棺】（第31図 写真図版27）

(1) 土器

大型の壺を棺身、小型の壺を棺蓋とする土器棺である。

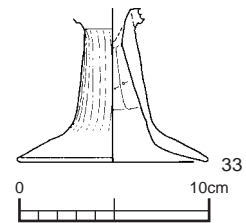
大型壺32は完存する複合口縁壺である。倒卵形の体部に小さな底部を作り出す。頸部は外反し、口縁部は直立して立ち上がる。口縁端部および、口頸部境はヨコナデにより鋭い稜を作り出している。体部は時間をあけて乾燥しながら作っており、4単位ほど確認できる。最下部は斜め方向、次は縦方向、最大径部分は横と斜め方向、肩部は縦方向のハケ調整を行っている。底部付近はナデ消しており、肩部から頸部・口縁部は縦方向のミガキを行う。体部内面は、底部付近を縦方向、それ以上は横方向のケズリを行う。頸部は横方向のハケ調整を行い、口頸部は横方向のミガキを行う。体部の器厚は1 cm～1.8 cmを測る。底部側面に接地黒斑が存在し、対する内面には燻溜黒斑が存在する。接地黒斑のある側面の肩部から口頸部にかけて覆接触黒斑が存在する。土器全体の容量は96.05リットル、体部の容量は88.10リットルである。

小型壺31は球形の体部で、わずかに立ち上がる頸部を残すが、口頸部は打ち欠く。体部下半部には、直径8 cm程度の打ち欠き孔が存在する。外面は縦方向のハケ調整の後、最大径部以上を回転利用した横方向のハケ調整で仕上げ、底部はナデ消す。内面は底部を指押さえて成形し、最大径部までを斜め上方に、上半部を横方向にケズル。底部側面には接地黒斑が存在し、対する肩部に覆接触黒斑が存在する。内面には燻溜黒斑は存在しない。体部下半部にススが付着するが、内面に焦げは存在しない。体部の容量は14.23リットルである。

【小平坦地1】（第32図 写真図版27）

(1) 土器

高坏33は坏部を欠く。脚柱部から屈折して脚裾部は広がる。透孔は存在しない。脚柱部外面は縦方向にミガキを行い、内面は横方向に丁寧なケズリを行う。



第32図 小平坦地1出土遺物

【小平坦地2】（第33図 写真図版28）

(1) 土器

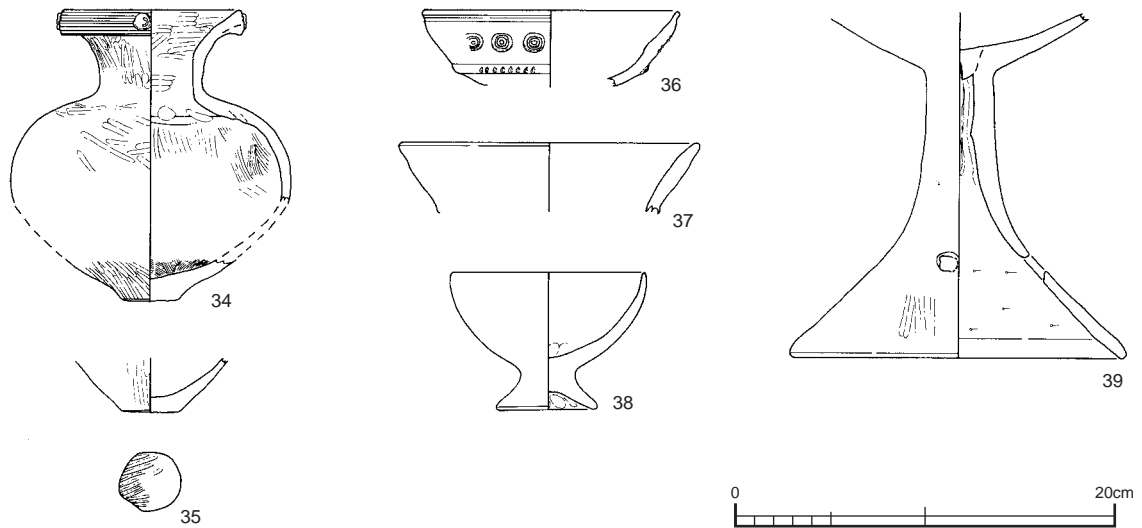
壺・甕・高坏・鉢が出土した。

壺は全容がわかる34と底部35と口縁部36とがある。34は体部がやや扁平の平底である。頸部は体部から屈曲して大きく外反し、口縁端部を拡張して擬凹線を巡らす。口縁端部には単位は不明であるが、竹管文を押し付けた円形浮文を貼り付ける。外面は丁寧にミガキを行う。土器全体の容量は推定で1.05リットル、体部の容量は推定で0.94リットルである。35は小型壺の底部で、完存しており平底である。体部は縦方向にミガキを行い、底部にはタタキの痕跡が残る。

36は有段の口縁部で、ヨコナデで仕上げている。屈曲部には竹管によるC字文を連続して押圧し、口縁部には二重の円形の竹管文を押圧している。

甕37は口縁部の破片で口縁部中央が膨らんでいる。

鉢38は半球形の体部に低い脚台を貼り付ける。体部は内外とも丁寧にナデられている。脚台底面は指押さへの整形ヒビが残る。鉢部の容量は0.94リットルである。



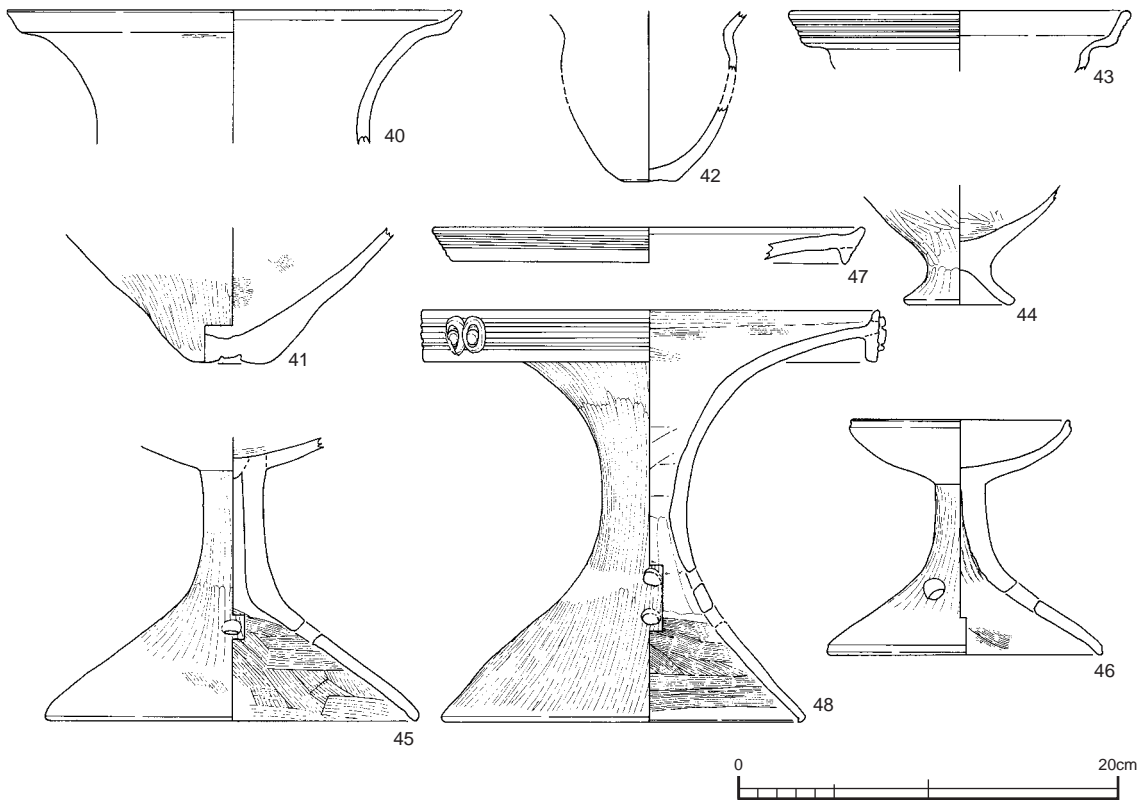
第 33 図 小平坦地 2 出土遺物

高坏39は坏部上部を欠く。細身の脚柱部から脚裾部が広がる。脚裾部の上部には4方向に円孔を開ける。坏部は脚柱部に貼り付け、臍で蓋をしている。脚外面は縦方向のミガキ残り、内面は柱部は絞り痕が残り、裾部は横方向のケズリを行う。

【小平坦地 3】（第34図 写真図版28）

(1) 土器

壺・甕・鉢・高坏・椀形高坏・器台が出土した。壺は口頸部40と底部41がある。40は広口壺の口頸部

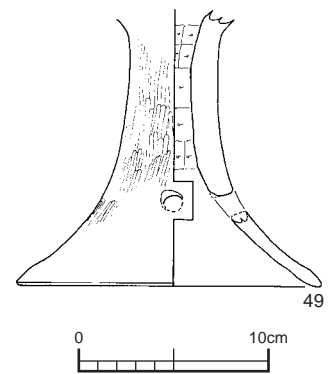


第 34 図 小平坦地 3 出土遺物

の破片で頸部は大きく外反し、口縁部は斜め上方に立ち上がる複合口縁である。内外ともに摩滅が著しい。41は厚い底部に平底を作り出すが、底面は整形時のくぼみが残る。外面は縦方向のミガキを行う。底部から体部側面にかけて接地黒斑が存在する。

甕42は口縁部と体部の破片から復原した。底部は完存しており、口縁端部は欠いている。調整は不明である。

鉢は口縁部43と底部44がある。43は有段口縁鉢の口縁部で、口縁端部には擬凹線を付けている。44は低い脚台を持つ鉢で、上半部を欠く。内外ともミガキを行う。内面に赤色顔料が付着している。体部外面に接地黒斑が残る。



第 35 図 小平坦地 4 出土遺物

高坏45は坏部上部を欠く。細身の脚柱部から屈曲して脚裾部が広がる。脚裾部の上部には4方向に円孔を開ける。坏部は脚柱部に貼り付け、臍で蓋をしている。脚部外面は縦方向のミガキを行い、内面は回転をしながら斜め方向にハケ調整を行う。

椀形高坏46は口縁部の一部を欠く。浅い半球状の小型の坏部に脚柱部が付き、そのまま脚裾部に向かって広がる。脚裾部は3方向に円孔を開ける。口縁端部と脚端部は強いナデによって凹線を巡らす。脚部外面は縦方向のミガキを行い、脚柱部は絞っている。坏部は摩滅している。

器台は口縁部のみの47と全体像がわかる48とがある。47は口縁部がほぼ全周している。口縁端部は下方に粘土を貼り付けて、面を作り、擬凹線を付けている。48は最小径が中央部に位置する括れた脚柱をなす。脚端部に向かって大きく開いている。脚裾部の上部には4方向に2段の円孔を開ける。受部は大きく開き、口縁端部の上下に粘土を貼り付けて面を作り、擬凹線を付けている。擬凹線上には竹管文を押し付けた2個1対の円形浮文を貼り付ける。脚部外面は縦方向のミガキを行い、内面は回転をしながら斜め方向にハケ調整を行う。受部内面は横方向のミガキを行う。

【小平坦地 4】（第35図 写真図版29）

(1) 土器

器台49は脚部だけの破片である。脚柱部から脚裾部にかけて外反し、4方向に円孔を開ける。外面は縦方向のミガキを行い、脚柱部の内面は横方向のケズリを行う。

第1表 遺物観察表

井垣城跡													
報告番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)				残存			備考1
						口径	器高	底径	重量 (g)	口縁	底	他	
1	帯曲輪1-2間斜面	-	表土	土師器	小皿	(8.0)	1.1	-	-	1/7	若干	-	粗製でコースター状の器形、手づくね。
2	腰曲輪1-2間斜面	-	表土	須恵器	鉢	-	(2.45)	-	-	小片	-	-	やや軟質焼成、口縁部を上下に拡張する。
3	小曲輪1	S K 1	表土	瓦質土器	搦鉢	(24.4)	(5.0)	-	-	1/4強	-	-	丹波焼模倣品。
4	小曲輪1	-	表土	青磁	碗	(15.7)	(2.45)	-	-	1/9	-	-	鑄の稜が明瞭
5	小曲輪2	-	表土	須恵器	甕	(15.2)	(4.0)	-	-	若干	-	肩1/4	14世紀代。
M58	小曲輪1	-	攪乱土	鉄器	鉄斧	長11.6	幅4.8	-	266.1	-	-	-	一部欠
M59	小曲輪1	-	攪乱土	鉄器	かなとこ	長13.95	幅3.53	厚1.28	42.0	-	-	-	一部欠
M60	小曲輪1	-	攪乱土	鉄器	鉄鋌	長11.95	幅3.0	厚2.95	187.3	-	-	-	完形
M66	小曲輪1	S K 1	攪乱土	鉄器	スラッグ	長12.3	幅6.7	厚4.7	359.1	-	-	-	写真のみ

伝大坪八幡神社遺跡													
報告番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)				残存			備考1
						口径	器高	底径	重量 (g)	口縁	底	他	
6	北部	S K 3	-	土師器	小皿	8.75	2.0	-	-	5/6	1/1	-	京都系土師器、灯明皿
7	北部	-	面検出	土師器	皿	(11.9)	(1.9)	-	-	1/12	-	-	京都系土師器
8	中部	-	面検出	土師器	小皿	(11.8)	(1.6)	-	-	1/9	-	-	京都系土師器
9	北部	S K 6	-	土師器	皿	(14.6)	2.25	(7.85)	-	1/5	1/4	-	京都系土師器
10	南側	-	-	土師器	皿	(14.8)	(2.4)	-	-	1/10	-	-	京都系土師器
11	南西端(崖際)	-	地山直上	瀬戸焼	天目碗	(12.8)	(4.45)	-	-	小片	-	-	瀬戸美濃焼
12	南側	-	面検出	染付	皿	(11.5)	(2.05)	-	-	1/12	-	-	皿Bタイプ、外面に草花文。
13	南側	-	面検出	染付	皿	(11.7)	(1.9)	-	-	1/7	-	-	皿Bタイプ、外面に草花文。
14	中部	-	面検出	染付	皿	(12.5)	2.75	(7.6)	-	1/4	1/3	-	皿Bタイプ、外面に草花文。
15	南端	表土	表土	染付	碗	(10.0)	5.1	(4.4)	-	1/12	1/2	-	近世
16	北側	-	表土	須恵器	杯A	(14.05)	3.55	(9.0)	-	若干	1/2	-	奈良時代
17	南端	-	表土	土師質	土錘	長3.0	幅1.35	厚1.2	4.4	-	-	表面一部欠損	管状土錘
18	南端	-	表土	土師質	土錘	長3.4	幅2.05	厚1.9	13.4	-	-	裏面若干剥離	管状土錘
19	南側	-	表土	土師質	土錘	長3.6	幅1.4	厚1.35	6.8	-	-	一部欠損	管状土錘
20	南側	-	表土	土師質	土錘	長2.85	幅1.3	厚1.3	4.0	-	-	一部欠損	管状土錘
21	南側	-	面検出	土師質	土錘	長3.6	幅2.1	厚1.05	8.0	-	-	約1/2	管状土錘
22	南側	-	面検出	土師質	土錘	長3.8	幅1.7	厚1.7	9.8	-	-	完形	管状土錘
23	不明	-	面検出	土師質	土錘	長3.95	幅2.0	厚2.0	17.4	-	-	裏面若干欠損	管状土錘
24	南端	-	表土	土師質	土錘	長4.6	幅2.4	厚1.9	18.6	-	-	裏面・下半欠損	管状土錘
S1	中部	S B 2	P 13	石製品	礎石	41.9	40.8	15.05	37000	-	-	-	完形 柱痕跡が明瞭に残る。
報告番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)				残存			備考1
						口径	器高	底径	重量 (g)	口縁	底	他	
M01	-	S B 3	建物周囲	鉄器	釘	3.39	0.91	0.34	1.9	-	-	下半欠損	和釘、頭巻きタイプ。
M02	不明	-	表土	銅製品	銅銭	2.8	2.4	0.12	2.49	-	-	完形	宋元通寶
M03	確認調査トレンチ	-	表土	銅製品	銅銭	2.5	2.45	0.1	2.52	-	-	完形	寛永通寶
M04	確認調査トレンチ	-	表土	銅製品	銅銭	2.45	2.45	0.1	2.15	-	-	完形	寛永通寶
M05	確認調査トレンチ	-	表土	銅製品	銅銭	2.45	2.45	0.15	2.94	-	-	完形	寛永通寶
M06	確認調査トレンチ	-	表土	銅製品	銅銭	2.3	2.3	0.1	1.73	-	-	完形	寛永通寶
M07	確認調査トレンチ	-	表土	銅製品	銅銭	2.5	2.5	0.15	2.62	-	-	完形	寛永通寶
M08	確認調査トレンチ	-	表土	銅製品	銅銭	2.3	2.25	0.1	1.76	-	-	完形	寛永通寶
M09	確認調査トレンチ	-	表土	銅製品	銅銭	2.35	2.3	0.1	2.03	-	-	完形	寛永通寶
M10	確認調査トレンチ	-	表土	銅製品	銅銭	2.5	2.5	0.15	2.30	-	-	完形	寛永通寶
M11	確認調査トレンチ	-	表土	銅製品	銅銭	2.25	2.25	0.1	1.66	-	-	完形	寛永通寶
M12	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.58	2.58	0.18	3.08	-	-	完形	寛永通寶
M13	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.3	2.28	0.1	1.47	-	-	完形	寛永通寶
M14	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.5	2.5	0.18	2.65	-	-	完形	寛永通寶
M15	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.09	2.15	0.15	1.79	-	-	完形	寛永通寶
M16	中央	-	表土	銅製品	銅銭	2.39	2.4	0.12	1.95	-	-	完形	寛永通寶
M17	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.39	2.33	0.15	2.55	-	-	完形	寛永通寶
M18	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.45	2.4	0.2	2.91	-	-	完形	寛永通寶
M19	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.4	2.1	0.15	1.62	-	-	完形	寛永通寶
M20	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.35	2.28	0.15	1.36	-	-	完形	寛永通寶
M21	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.45	2.45	0.15	3.17	-	-	完形	寛永通寶
M22	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.23	2.28	0.1	1.87	-	-	完形	寛永通寶
M23	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.25	2.15	0.15	1.42	-	-	完形	寛永通寶
M24	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.4	2.5	0.15	2.38	-	-	完形	寛永通寶
M25	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.52	2.54	0.12	2.40	-	-	完形	寛永通寶
M25	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.5	2.23	0.2	-	-	-	完形	寛永通寶
M26	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.55	2.5	0.15	2.93	-	-	完形	寛永通寶
M27	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.65	2.6	0.2	3.26	-	-	完形	寛永通寶
M28	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.4	2.42	0.15	2.40	-	-	完形	寛永通寶
M29	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.19	2.15	0.1	1.32	-	-	完形	寛永通寶
M30	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.4	2.3	0.15	2.33	-	-	完形	寛永通寶
M31	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.45	2.45	0.15	2.05	-	-	完形	寛永通寶
M32	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.32	2.4	0.2	3.21	-	-	完形	寛永通寶
M33	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.3	2.3	0.15	2.50	-	-	完形	寛永通寶

※器高の()は残存高、その他の()は復元値

第2表 遺物観察表

伝大坪八幡神社遺跡													
報告番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)				残存			備考1
						口径	器高	底径	重量(g)	口縁	底	他	
M34	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.5	2.45	0.2	2.99	-	-	完形	寛永通寶
M35	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.5	2.5	0.2	2.81	-	-	完形	寛永通寶
M36	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.5	2.35	0.25	2.63	-	-	完形	寛永通寶
M37	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.4	2.4	0.2	2.51	-	-	完形	寛永通寶
M38	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.4	2.4	0.15	2.52	-	-	完形	寛永通寶
M39	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.51	2.5	0.15	3.39	-	-	完形	寛永通寶
M40	南端	-	表土	銅製品	銅銭	2.35	2.28	0.1	1.95	-	-	完形	寛永通寶
M41	南端	-	表土	銅製品	銅銭	2.51	2.51	0.2	2.29	-	-	完形	寛永通寶
M42	南端	-	表土	銅製品	銅銭	2.1	2.1	0.2	2.15	-	-	完形	寛永通寶
M43	南端	-	表土	銅製品	銅銭	2.25	2.23	0.1	1.69	-	-	完形	寛永通寶
M44	南端	-	表土	銅製品	銅銭	2.3	2.3	0.15	1.82	-	-	完形	銭種不明
M45	南端	-	表土	銅製品	銅銭	2.35	2.3	0.15	2.05	-	-	完形	寛永通寶
M46	南端	-	表土	銅製品	銅銭	2.35	2.32	0.15	1.75	-	-	完形	寛永通寶
M47	確認調査トレンチ	-	表土	鉄製品	鉄銭	2.26	2.22	0.21	3.0	-	-	完形	寛永通寶
M48	南側	-	表土	鉄製品	鉄銭	2.35	2.35	0.15	2.8	-	-	完形	寛永通寶
M49	南側	-	表土	鉄製品	鉄銭	2.37	2.41	0.16	2.8	-	-	完形	寛永通寶
M50	南側	-	表土	鉄製品	鉄銭	2.4	2.42	0.2	3.1	-	-	完形	寛永通寶
M51	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.8	2.8	0.2	6.31	-	-	完形	一銭銅貨、明治18年鑄造
M52	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.77	2.77	0.15	6.65	-	-	完形	一銭銅貨、明治18年鑄造
M53	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.85	2.85	0.2	6.62	-	-	完形	一銭銅貨、明治19年鑄造
M54	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.8	2.8	0.2	6.55	-	-	完形	一銭銅貨、明治8年鑄造
M55	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.89	2.8	0.15	6.41	-	-	完形	一銭銅貨、明治17年鑄造
M56	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.8	2.8	0.2	6.41	-	-	完形	一銭銅貨、明治10年鑄造
M57	南側	-	表土	銅製品	銅銭	2.85	2.8	0.2	6.77	-	-	完形	一銭銅貨、明治9年鑄造
片山古墳													
報告番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)				残存			備考1
						口径	器高	底径	重量(g)	口縁	底	他	
25	東斜面	木棺墓1	-	土師器	小型甕	12.7	13.5	3.0	-	1/6	1/1	体1/6	
26	東斜面	木棺墓1	-	土師器	小型甕	11.6	13.7	1.5	-	1/3	1/1	体1/2	
27	東斜面	木棺墓2	-	土師器	壺	16.5	22.6	4.6	-	完存近	完存	体一部欠	
28	東斜面	木棺墓2	-	土師器	直口壺	7.3	17.7	3.0	-	1/3	1/1	体1/2	
29	東斜面	-	表土	土師器	壺	(17.6)	6.0+	-	-	1/6弱	-	-	
30	東斜面	-	表土	土師器	器台	(21.5)	2.3+	-	-	1/8	-	-	
31	尾根上	土器棺	土坑内	土師器	壺	-	31.0+	-	-	-	ほぼ完	体ほぼ完存	
32	尾根上	土器棺	土坑内	土師器	壺	(35.2)	74.8	7.6	-	-	-	-	
33	斜面	小平担地1	表土	土師器	高坏	-	8.1+	9.6	-	-	1/2	-	
34	斜面	小平担地2	包含層	土師器	壺	9.2	10.2	-	-	1/6	-	肩1/3	
35	斜面	小平担地2	包含層	土師器	壺	-	2.9+	3.2	-	-	3/4	底部片	
36	斜面	小平担地2	包含層	土師器	壺	13.3	4.0+	-	-	1/4	-	口縁部片	
37	斜面	小平担地2	面上	土師器	甕	(15.7)	3.7+	-	-	若干	-	口縁部片	
38	斜面	小平担地2	表土	土師器	台付鉢	10.1	7.3	5.3	-	1/4	4/5	-	
39	斜面	小平担地2	包含層	土師器	高坏	-	18.2+	17.2	-	-	-	-	
40	斜面	小平担地3	包含層	土師器	壺	23.9	7.0+	-	-	1/12	1/4	-	
41	斜面	小平担地3	包含層	土師器	壺	-	7.2+	4.0	-	-	完存	底部片	
42	斜面	小平担地3	包含層	土師器	小型甕	-	8.9+	3.0	-	-	1/1	頸1/5体1/6	
43	斜面	小平担地3	包含層	土師器	脚台付鉢	17.6	3.2+	-	-	1/5	-	-	
44	斜面	小平担地3	包含層	土師器	台付鉢	-	6.3+	4.8	-	-	-	脚1/2鉢底1/1	
45	斜面	小平担地3	包含層	土師器	高坏	-	15.0+	19.5	-	-	-	脚3/5	
46	斜面	小平担地3	包含層	土師器	高坏	11.3	12.4	14.2	-	1/3	-	脚一部欠	
47	斜面	小平担地3	包含層	土師器	器台	22.5	1.9+	-	-	4/5	-	口縁部片	
48	斜面	小平担地3	包含層	土師器	器台	23.9	21.7	18.7	-	1/4	-	脚(中)4/5	
49	斜面	小平担地4	包含層	土師器	器台	-	14.5+	15.8	-	-	-	脚柱1/1脚端片	
報告番号	出土地区	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)				残存			備考1
						口径	器高	底径	重量(g)	口縁	底	他	
M61	東斜面	木棺墓1	-	鉄器	剣	33.5	5.37	1.17 0.69	128.7				
M62	東斜面	木棺墓1	棺底	鉄器	槍鉾	17.55	1.12	0.28 0.3	18.3				
M63	東斜面	木棺墓2	-	鉄器	槍鉾	10.4	1.1	0.42 0.53	8.9				
M64	東斜面	木棺墓2	-	鉄器	鎌	4.69	2.1	0.49 0.45	8.0				
J1	東斜面	木棺墓3	棺内床面	石製品	管玉	2.08	0.63	0.61	1.4			完形	
J2	東斜面	木棺墓3	棺内床面	石製品	管玉	1.48	0.73	0.71	1.3			完形	
J3	東斜面	木棺墓3	棺内床面	石製品	管玉	1.36	0.68	0.59	0.9			完形	
J4	東斜面	木棺墓3	棺内床面	ガラス玉	丸玉	0.54	0.53	0.39	0.14			完形	
J5	東斜面	木棺墓3	棺内床面	ガラス玉	丸玉	0.7	0.68	0.47	(0.28)			一部欠	
J6	東斜面	木棺墓3	棺内床面	ガラス玉	丸玉	0.49	0.47	0.41	0.14			完形	
J7	東斜面	木棺墓3	棺内床面	ガラス玉	丸玉	0.59	0.61	0.49	0.27			完形	
J8	東斜面	木棺墓3	棺内床面	ガラス玉	丸玉	0.52	0.62	0.52	0.24			完形	

*器高の()は残存高、その他の()は復元値

第4章 まとめ

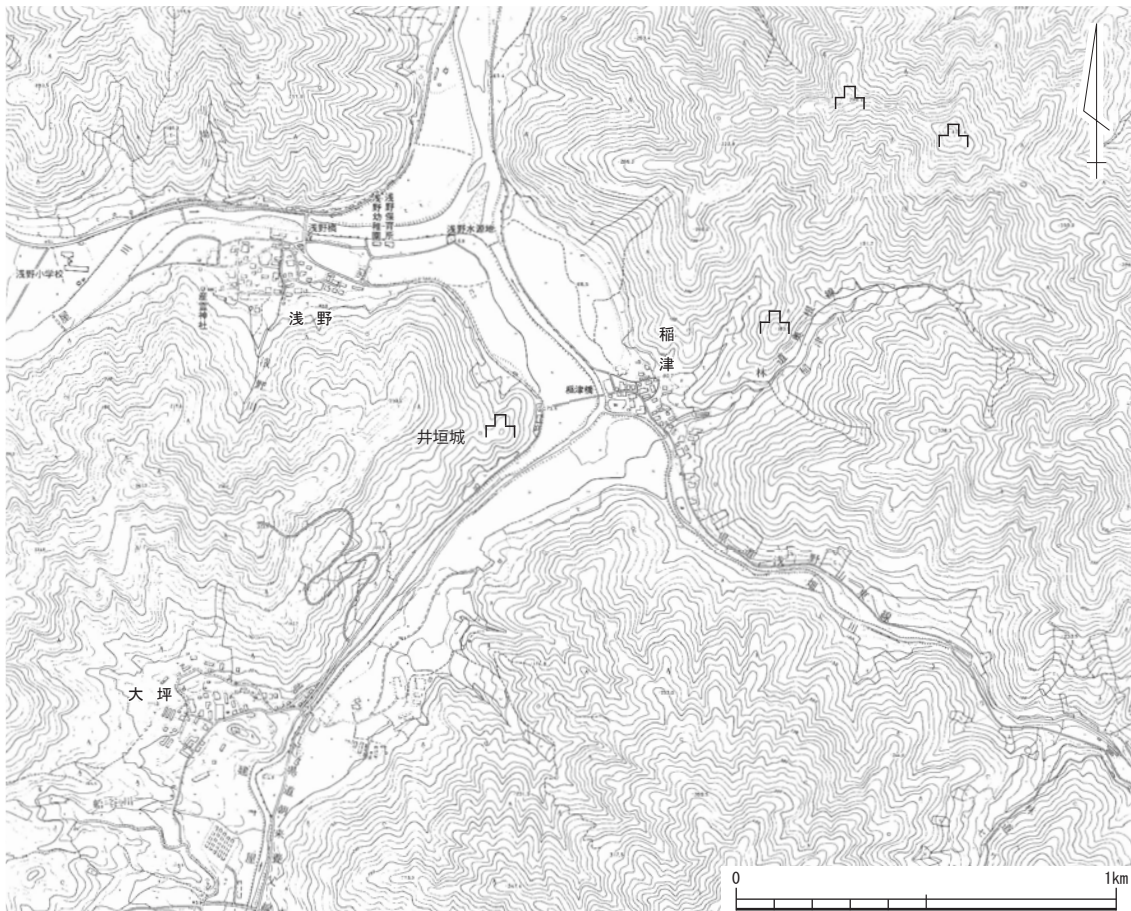
1. 井垣城跡

井垣城跡は建屋の谷の北端、大屋川との合流点に位置する。第2章でも述べたとおりこの場所は、大屋川と建屋川、さらに畑川などの合流点であり、それぞれの河川沿いに通じる交通路の結節点に立地している。主要な幹線ではないが、地域の重要な結節点であることは疑いがない。このような結節点に位置する井垣城跡は、対岸の稲津城跡・稲津里城跡などと共に、地域の境目を監視する機能を担った山城と評価されている。

城跡の居所としての機能は主郭に限定されるので基本的に単郭構造と評価できる。今回の調査でも北側尾根の各郭・平坦地に生活痕跡が検出されていないため、このことは考古学的にも確認できることとなった。主郭の周囲には2段の帯曲輪が取り巻いて斜面を防御し、調査範囲である北側の尾根筋には帯曲輪を補完する形で2カ所の小曲輪を築き、さらに尾根先端には麓からのルートを防御するために4カ所の小平坦地を構築する。一方、南側の尾根



第36図 井垣城跡から見た稲津城と稲津里城跡（西から）



第37図 井垣城跡と周辺地区

背後には堀切が設けられ、帯曲輪とセットで背後の尾根続きとの遮断を計っている。この堀切に連携してこれに面した主郭南辺も高さ1.5mと城内で最大の土塁を構築し、これらによって南側背後に対する防御としている。一方、主郭への虎口は東西に2カ所見られる。前述のように西側のものは両側に低い土塁をもつ。東側の虎口は主郭手前で折れを持つ。さらに、主郭側にこの通路への監視点が構築され、通路手前には武者溜としての機能を持つ小曲輪が通路の背後に構築される。西側の虎口は腰曲輪への出入りを主とするが、東側の虎口は山麓からの通路となるもので、機能的にはより重要度が高い。

腰曲輪から下位へのルートは明確ではないが、前述のようにこの虎口は近世以降の八幡神社参道としても使われているので、中腹平坦地（神社境内）との行き来が踏襲されているとすれば、ルートはそのまま使われたとも考えられる。特に主郭東側下斜面は急傾斜であるため、斜面を往来するには現参道周辺にルートを設定するほうが自然である。ただし、北側の尾根上に構築された小平坦地を伝うルートを利用することも可能なのでこの点の結論は保留しておきたい。

今回の調査は前述の通り井垣城跡の北側について実施したが、表面観察では認識されなかった小曲輪2・小平坦地1～4が新たに検出された。特に、尾根先端に当たる小曲輪群の発見は、井垣城跡が山裾を監視するために、尾根先端にまで施設を設けていたことが判明するもので、防禦が厳重であったことを示すものである。

2. 出土遺物から見た井垣城跡と時期

今回の調査において出土した井垣城跡関係の遺物は余り多くない。今回の調査地点は主郭の中心部分を調査の対象としないため、この城においてどの程度の生活が行われたかを評価することは難しい。その前提に立って出土遺物の概要を検討してみたい。出土遺物で注目されるのは京都系土師器皿や染付皿・青磁碗、瀬戸天目碗などの広域的な流通品、ないしは技術的な影響によって搬入された遺物が多くを占める点である。さらに、瓦質播鉢3についても器形的には丹波地域で出土する瓦質播鉢に共通する。これらのことから本城の生活雑器は在地的な様相よりも広域的なものの方が主体を占める点が注目される。逆に在地的な遺物は土師器皿1のみで地域の生活雑器の様相を垣間見ることが出来ない。

遺物の時期については、染付が16世紀中頃～後半、土師器皿が16世紀中頃などとなるが、遺構の時期を特定することは個体数の関係からは慎重を期したい。このため前述の通り主郭の虎口構造や土塁の存在、多重の帯曲輪などから16世紀後半と考えておきたい。

3. 伝承と井垣城跡

井垣城跡の膝下を流れる建屋川と井垣城が登場する伝承がある。城主によって謀殺された家老井垣甚十郎の首が建屋川上流の“七日めぐり”に遡り、再び城の前を流れ、大屋川との出合から川を再び遡って大屋町横行の村はずれの川中にある、大きな石（井垣さんの首石と言い伝える）の上に東（浅野の方向）を向いて鎮座したという話である。この場所にはのちに首塚が造られ、これを恐れた殿様は浅野橋のたもとに五輪塔と宝篋印塔を建てて、その霊を弔ったという。但し、現在伝承される宝篋印塔は延文2年（西暦1357年）であるため甚十郎と無関係であることは明らかである。（残念ながら現在一部を失っている）

また、この伝承では建屋の太田垣氏との関係も垣間見えるが、これらの関係からみると、伝承から語られる世界観は旧大屋町域が1つの単位として描かれている点が興味深い。井垣城が属する地域が旧八鹿町域や和田山町域を意識せず、旧の町域を生活圏として語られているのである。この生活圏が城跡の時期に反映されるかどうかは不明であるが、南の建屋から通じるルートは播磨からこの地域に入る上で

の玄関口にあたる。甚十郎の首が遡ったルートそのものが播磨から旧大屋町域の主要部を通るルートでもある。このことから見ると街道の要衝に位置する井垣城跡は旧大家屋町域の玄関口を抑える重要な役割を果たした可能性が高いといえるだろう。

4. 伝大坪八幡神社について

伝大坪八幡神社遺跡で検出された個々の建物は、軸方向が揃い、建物配置も含めて計画的な構造を持つ。建物の中でもSB1は9間という長大な建物で、その長さは平坦面の約半分に及ぶ。これらの配置と建物構造からそれぞれの建物の機能は以下のとおりであると推定されている⁽¹⁾。

SB1は桁行方向に長い建物であることから宮座儀礼に使われる「長床」と考えられる。SB2は「長床」に付属する建物で、行事の準備や物置的な機能を持った建物と考えられる。SB3は参籠や宮座の宿所である「籠堂」と考えられる。SB4は規模などの詳細は不明であるが、南側と北側が柱穴、東側が礎石構造の建物で、排水溝に連なるSK4（方形土坑）や南西側に集中する土坑群などの存在から、雑舎あるいは炊事場などが考えられる。



第38図 北参道（北から）

以上のように、今回、検出された建物は村落の宮座儀礼に使われる施設群と考えられる。長大な「長床」（SB1）をはじめとする建物群は大坪・稲津・浅野の3村の結束を固める宮座儀礼の

場であった。そして、この場所では少なくとも明治時代までは祭礼がおこなわれていたが、その後は神社の衰退とともに、祭礼も廃れたのであろう。ただ、鎮座した祠が八幡社か稲荷社かについては地元の人々の中で相違が見られ、結局結論を得られていない。

5. 古墳群について

今回の調査で片山古墳群から木棺直葬墳4基、土器棺1基、井垣城跡から木棺直葬墳1基が検出された。このほか、小平坦地1・2についても同様の古墳が存在した可能性があるが、築城に伴う削平で消滅したと思われる。それぞれの時期は木棺墓1～3が庄内期、小平坦地1・2、土器棺が布留期になる。

井垣古墳の時期は不明であるが、おおむね尾根下側から上方に向けて構築されていったと思われる。ただし、木棺墓1～3は尾根の急斜面でこの場所に最も早く古墳の構築が始まったとは考えにくい。おそらく伝大坪八幡神社遺跡側に初期古墳が構築され、その流れで木棺墓1～3へ墓域が拡大したのではないかと推測される。

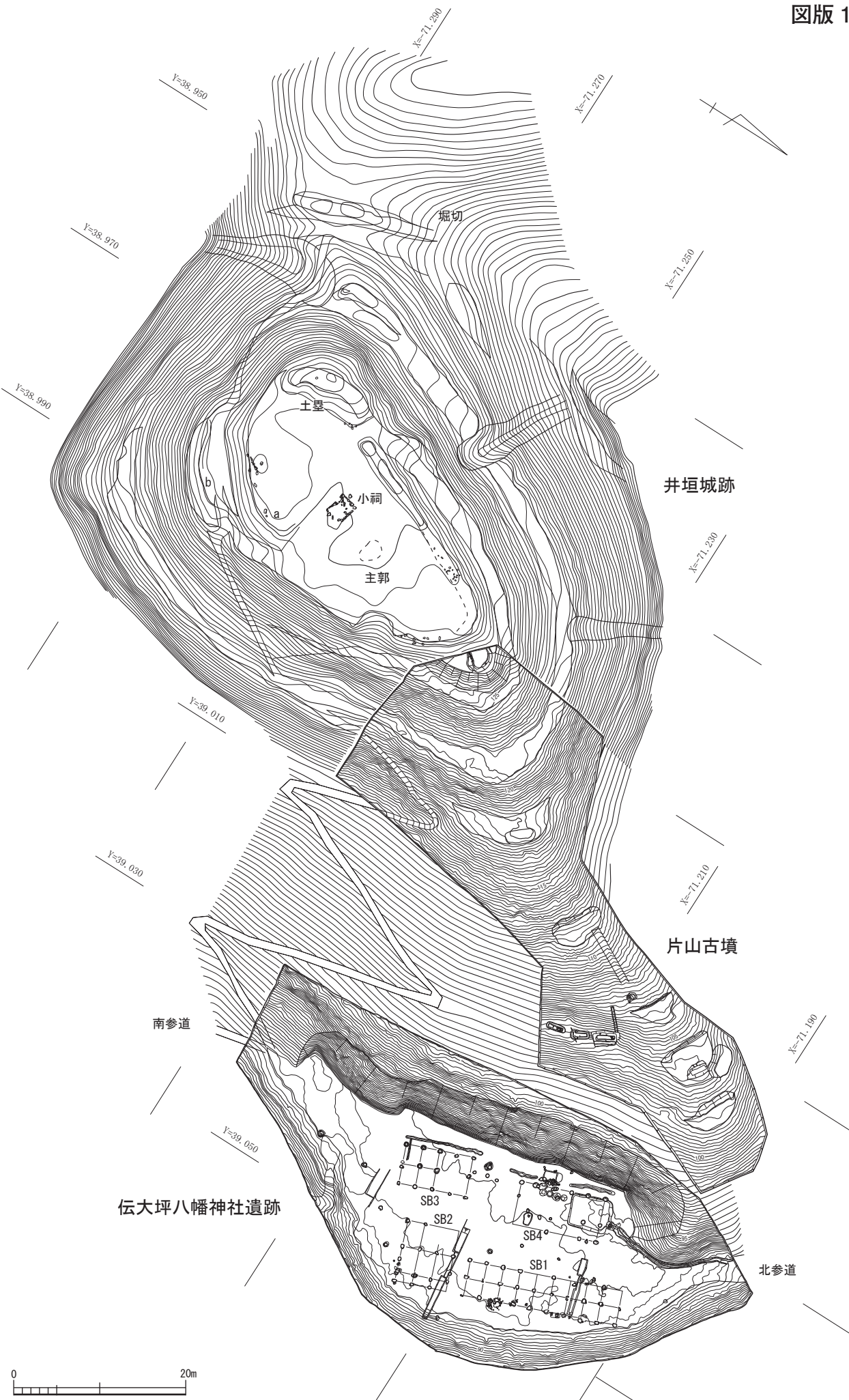
また、遺跡名の上では片山古墳と井垣城跡に分かれるがこれらは同一の古墳群であり、一連の遺跡として評価する必要がある。いずれにしても、今回の調査は本地域の古墳群の様相を知る上で貴重な成果となった。

註) (1) 神戸大学黒田龍一氏に教示をいただいた。ただし、文責は調査担当者にある。

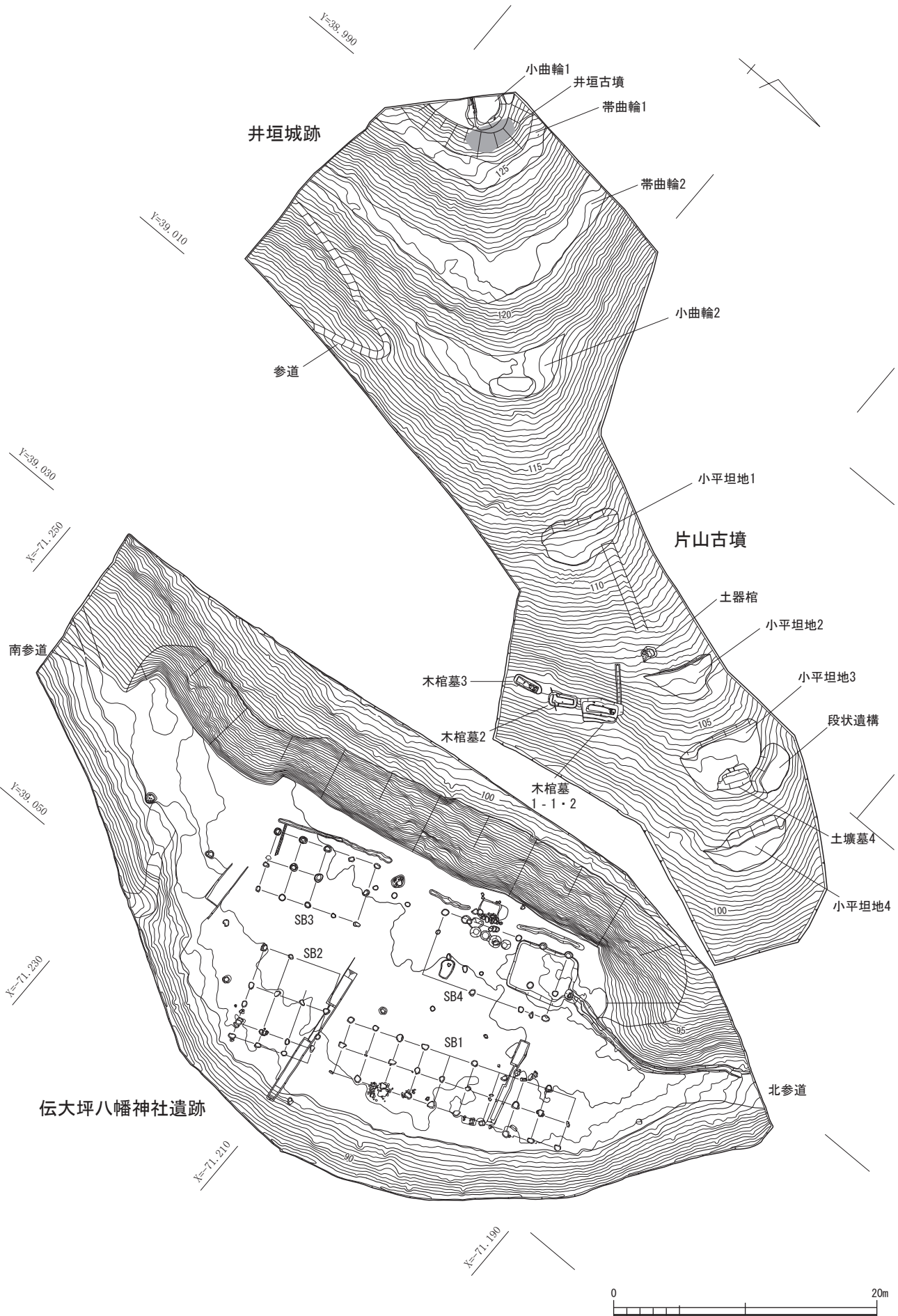
参考文献

西尾孝昌2010『図説養父市城郭事典』養父市教育委員会

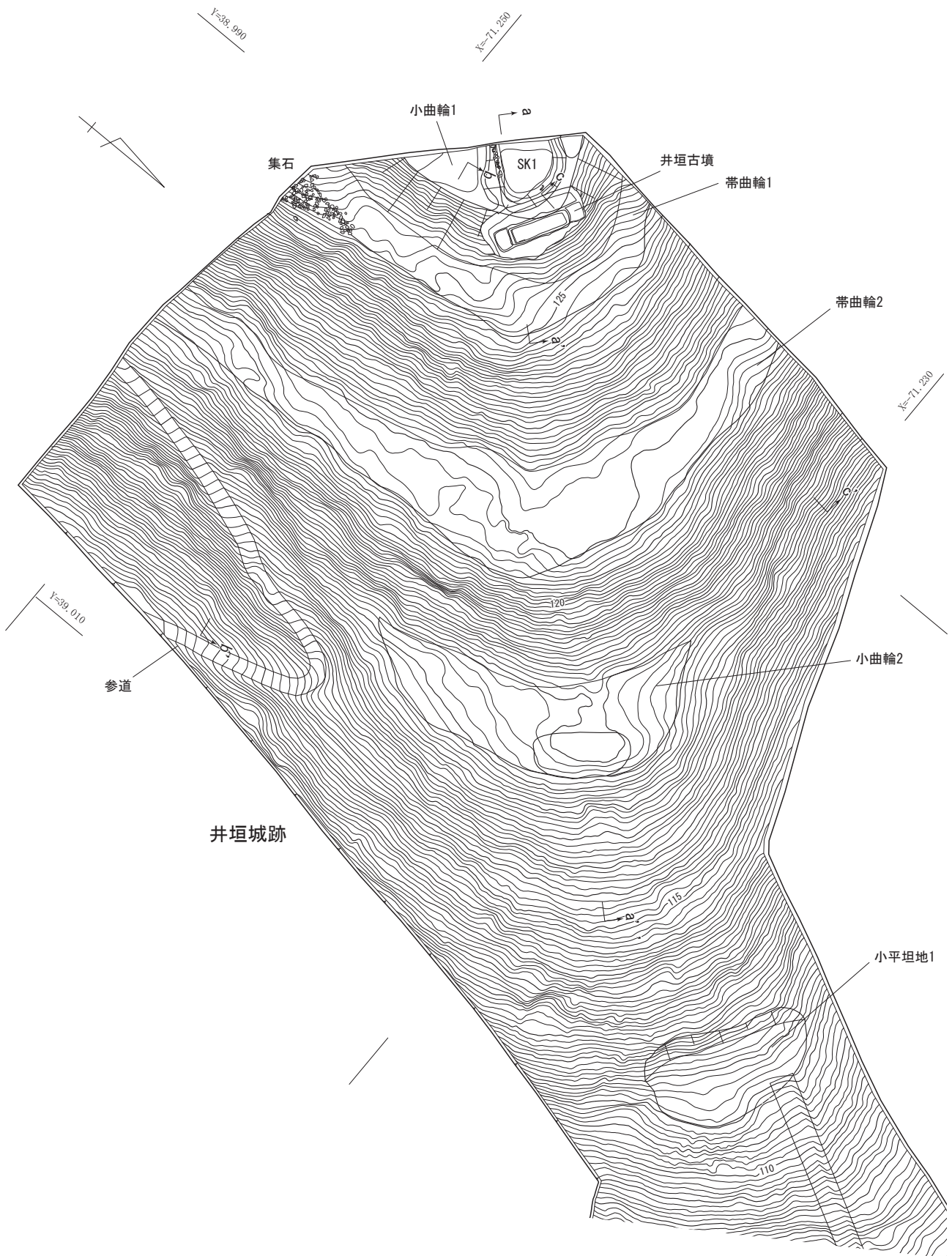
圖 版



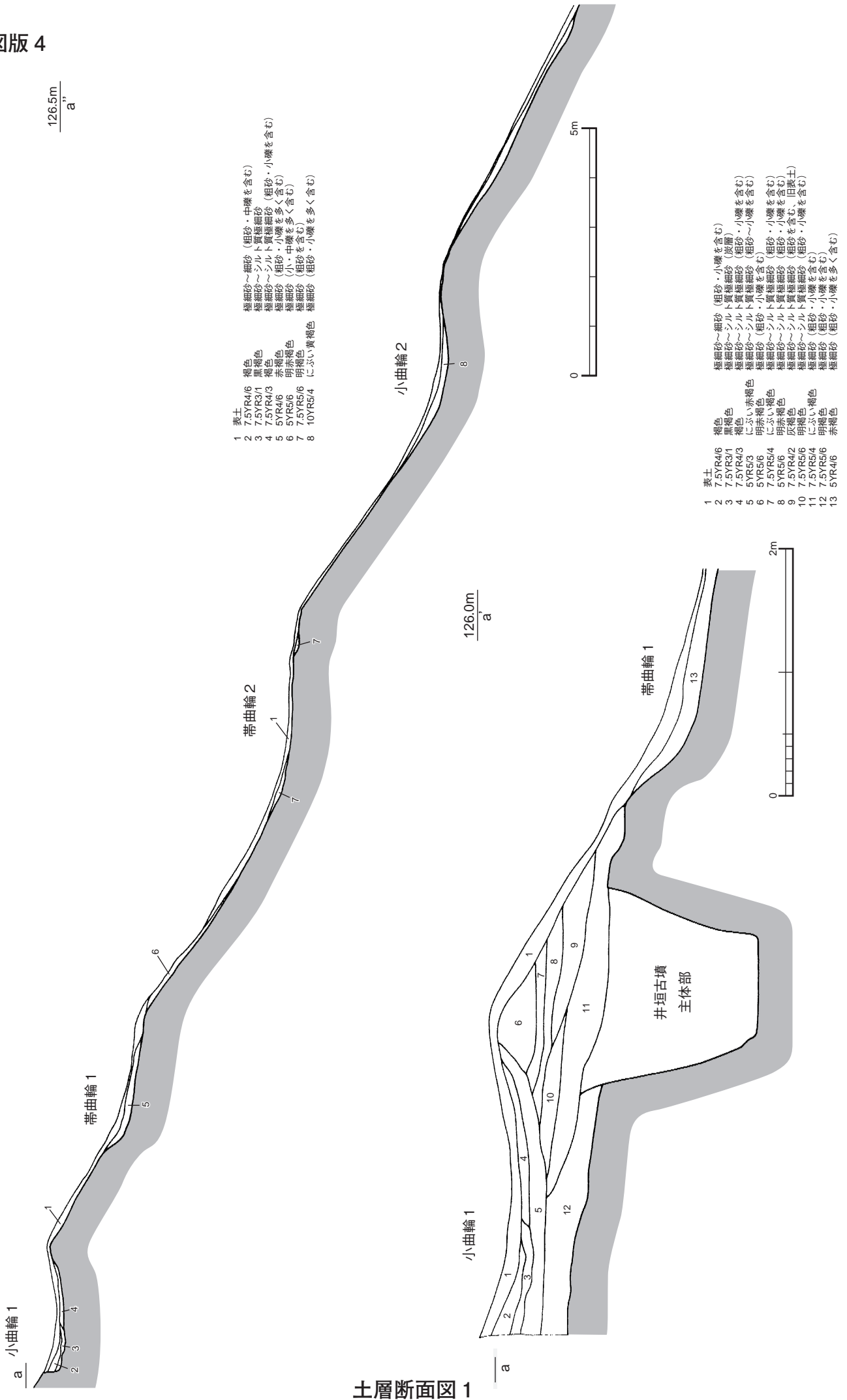
井垣城跡と調査区全体図



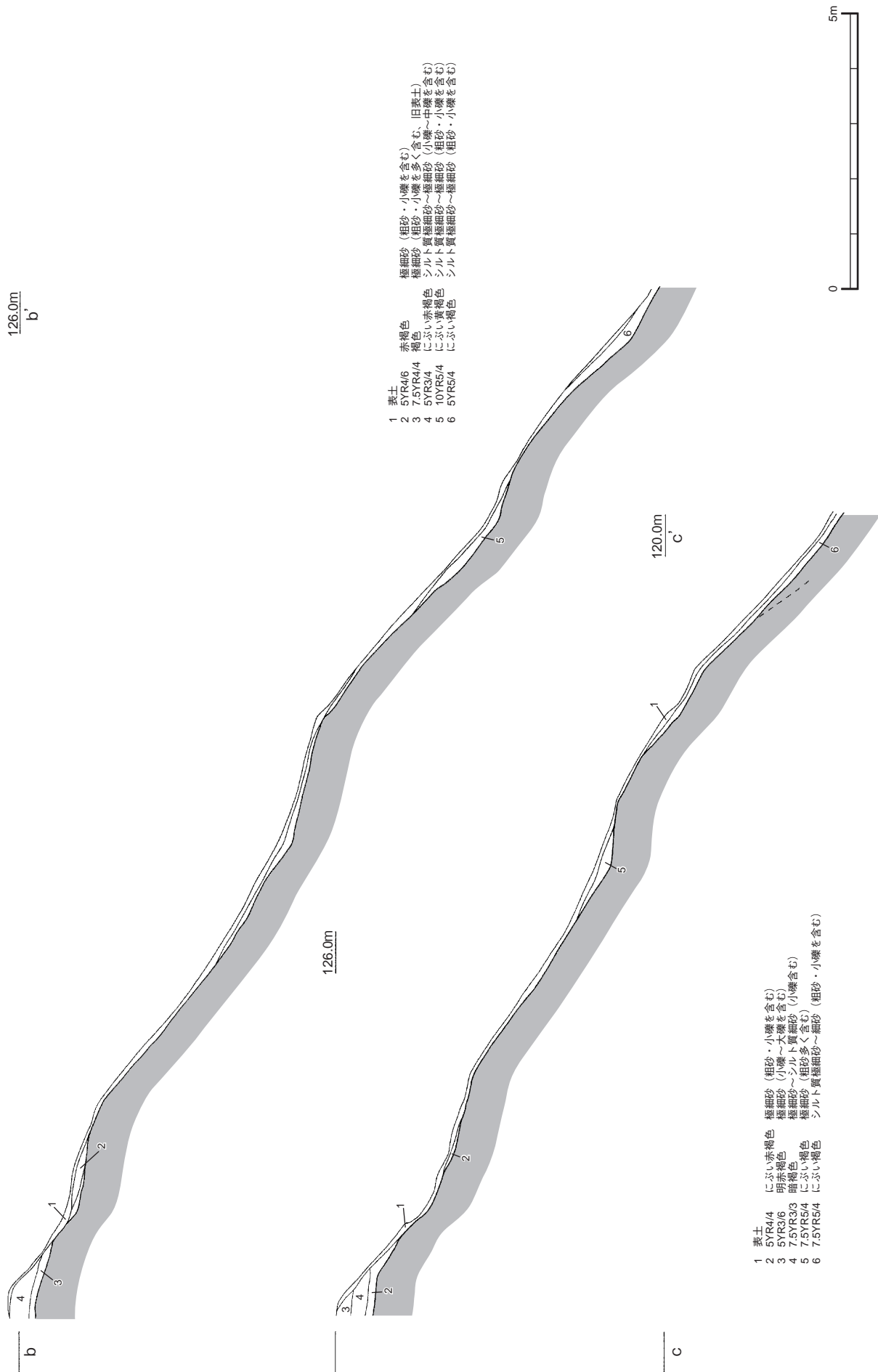
井垣城跡・伝大坪八幡神社遺跡・片山古墳調査区位置図



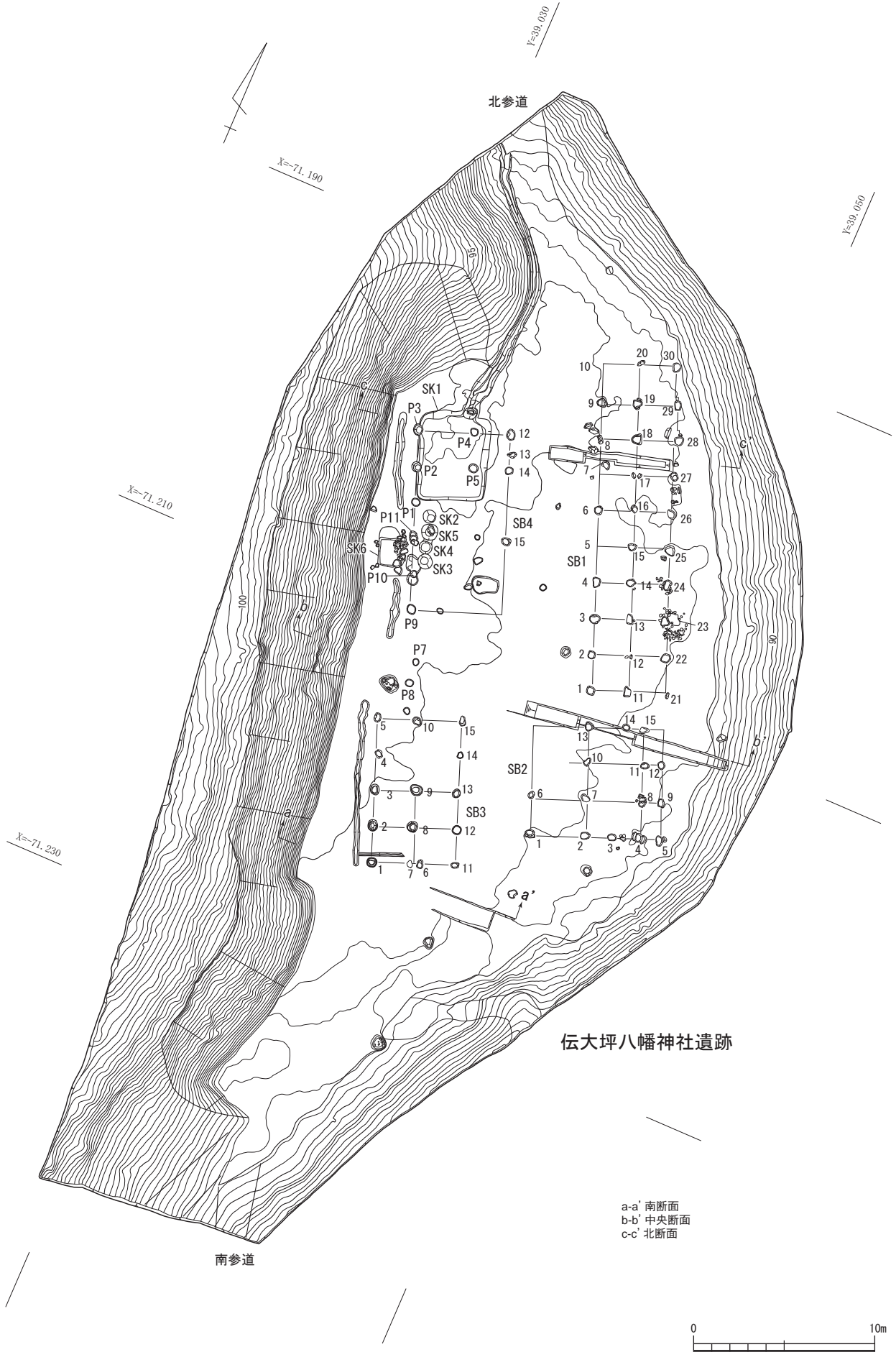
井垣城跡調査区全体図



土層断面図 1



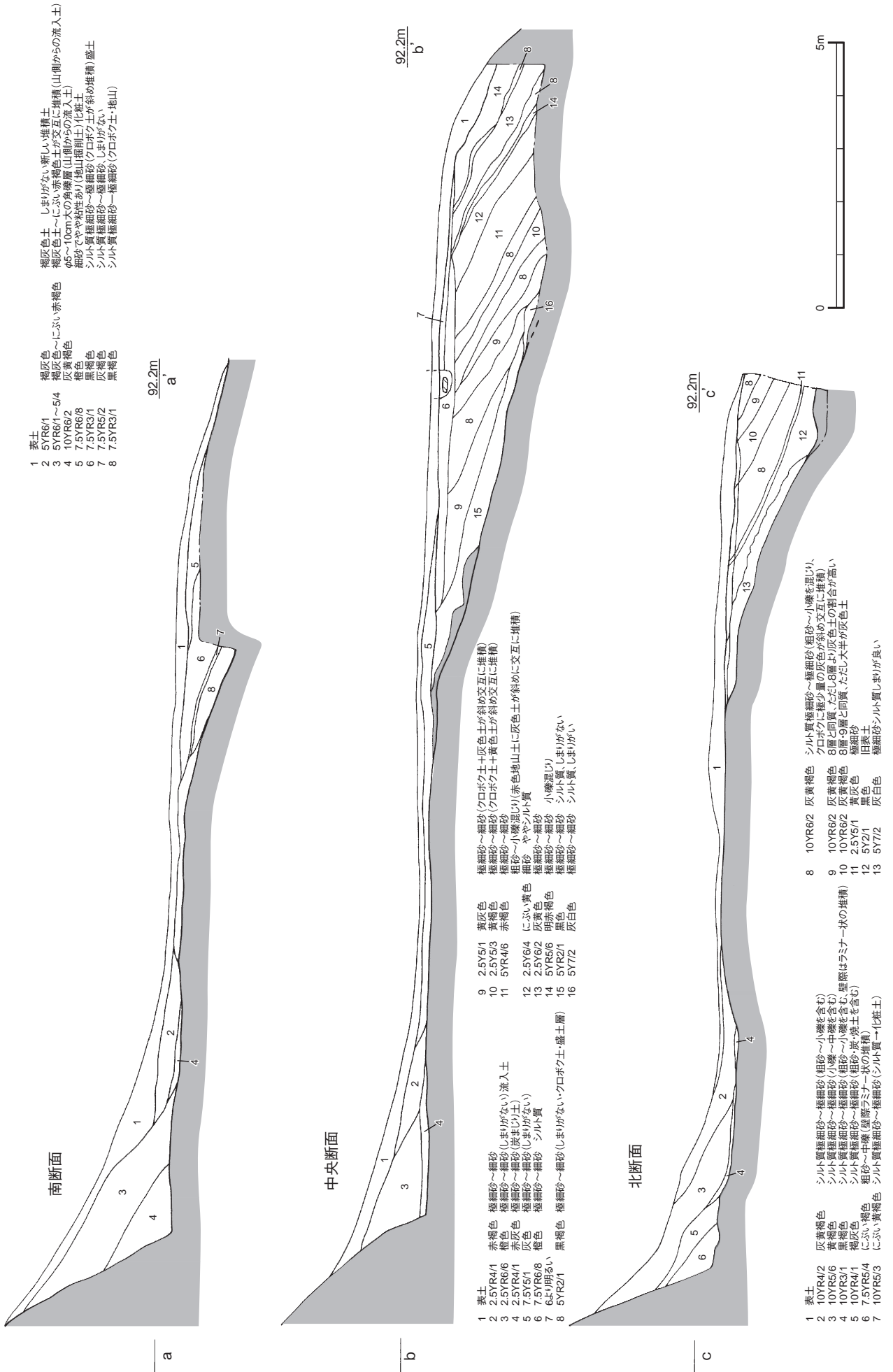
土層断面図2



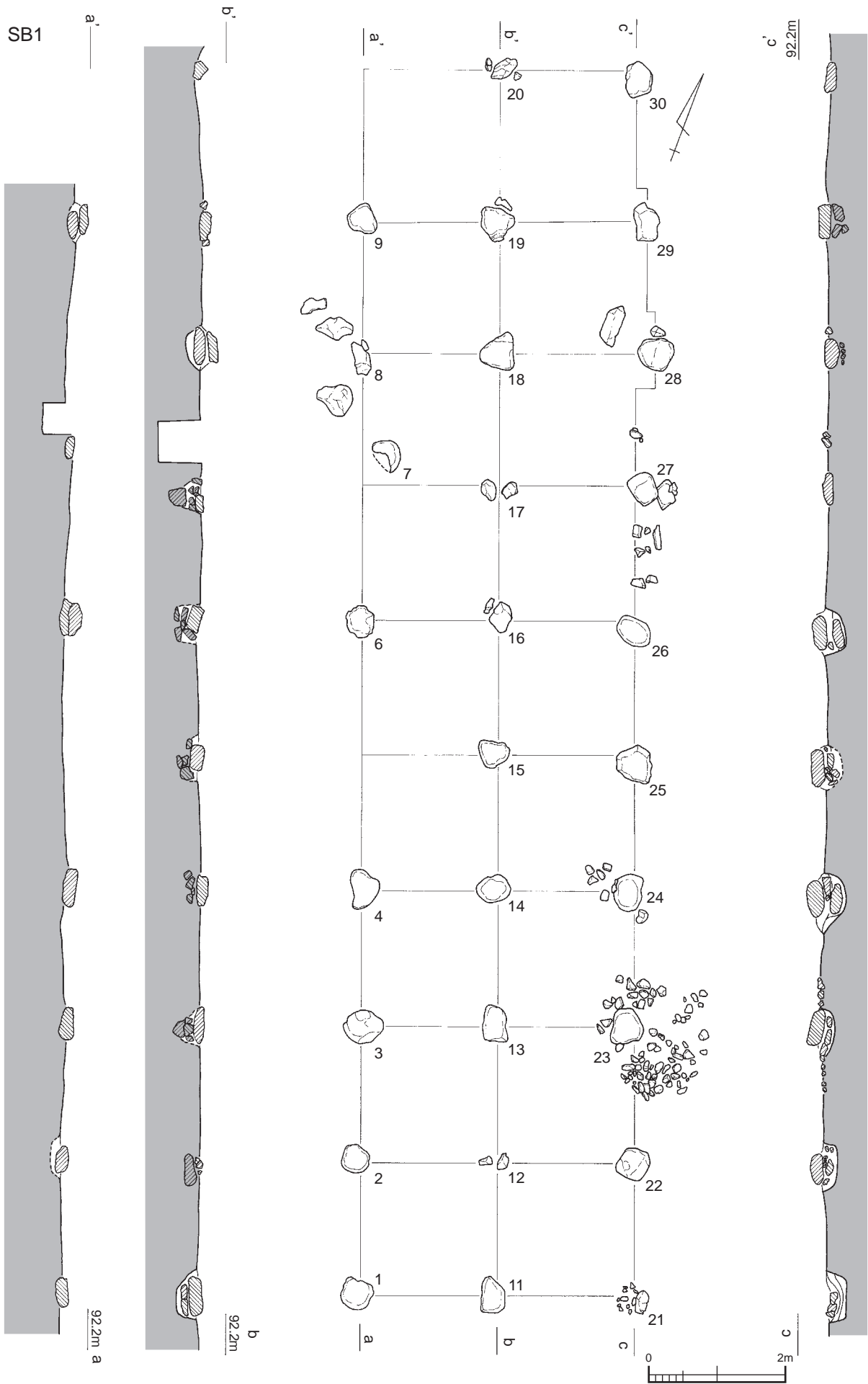
伝大坪八幡神社遺跡

a-a' 南断面
b-b' 中央断面
c-c' 北断面

伝大坪八幡神社遺跡調査区全体図

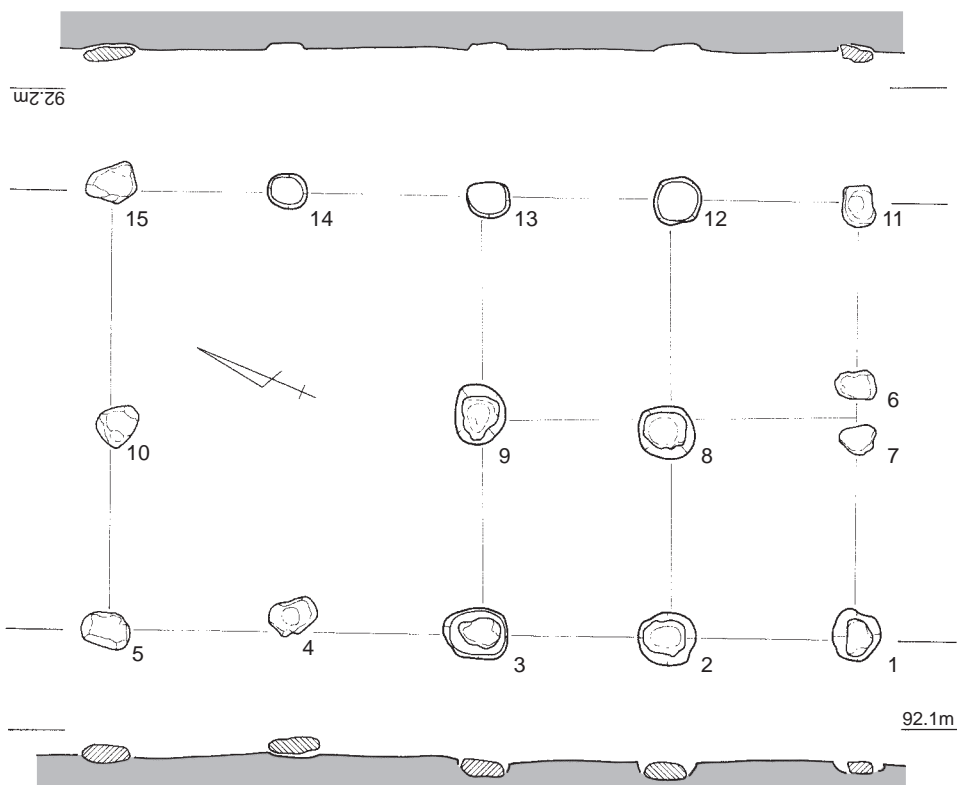


伝大坪八幡神社遺跡断面図

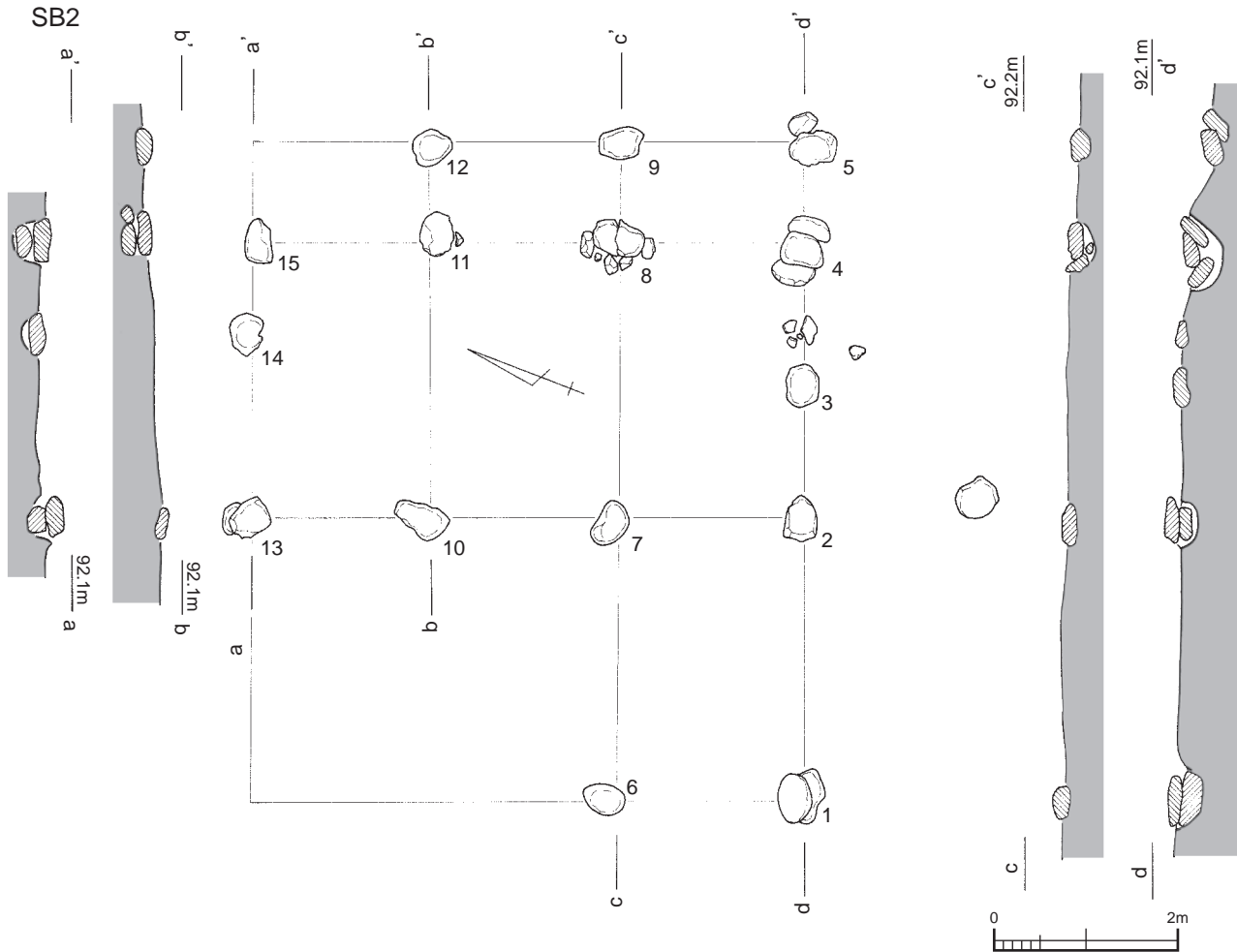


SB1 平面图·断面图

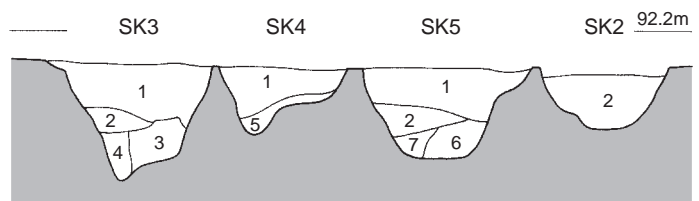
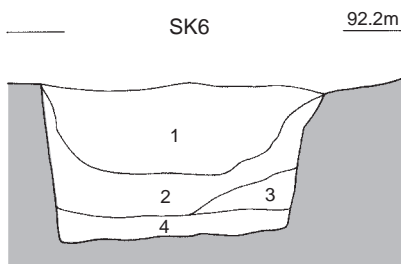
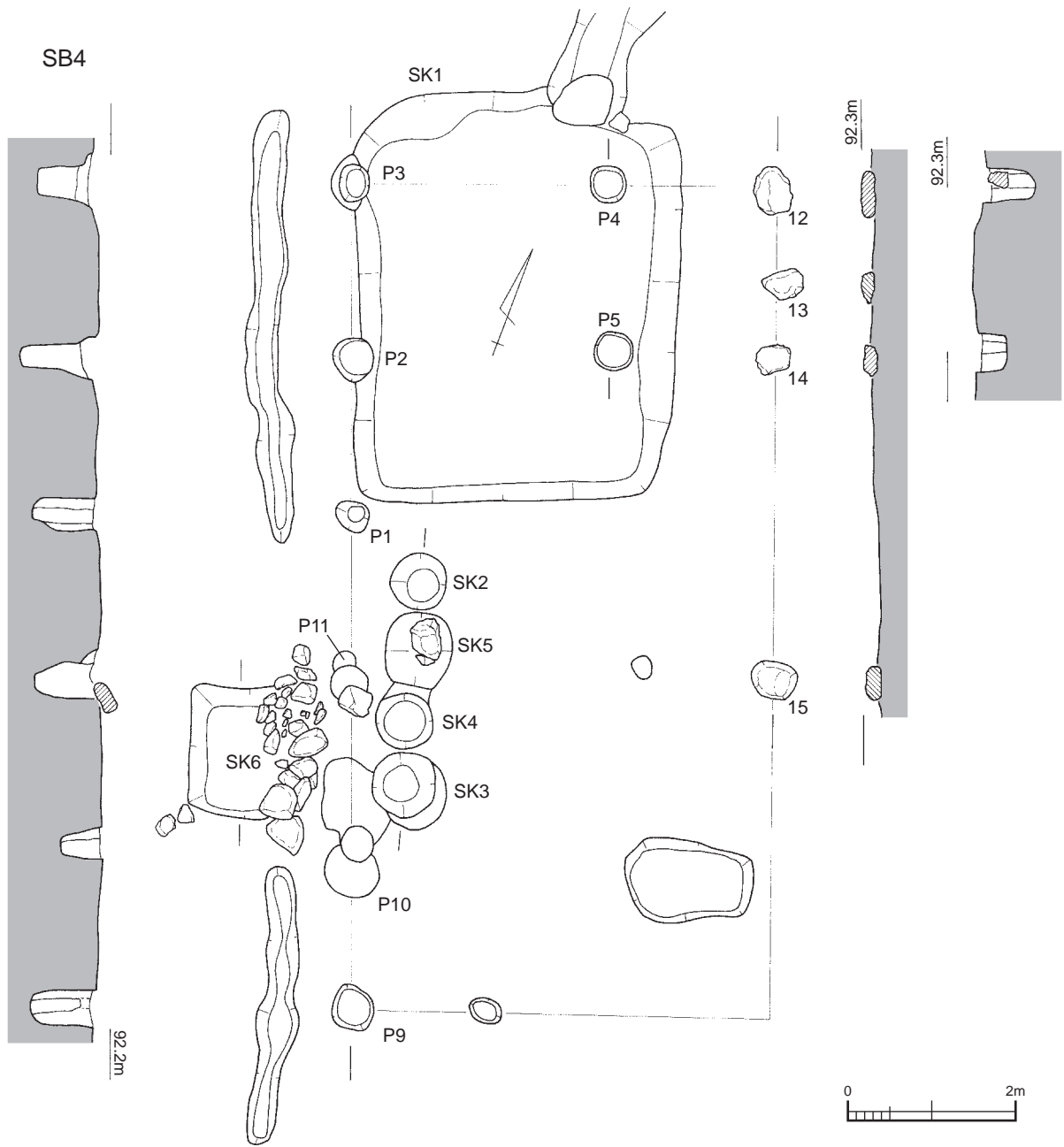
SB3



SB2



SB2·3 平面图·断面图

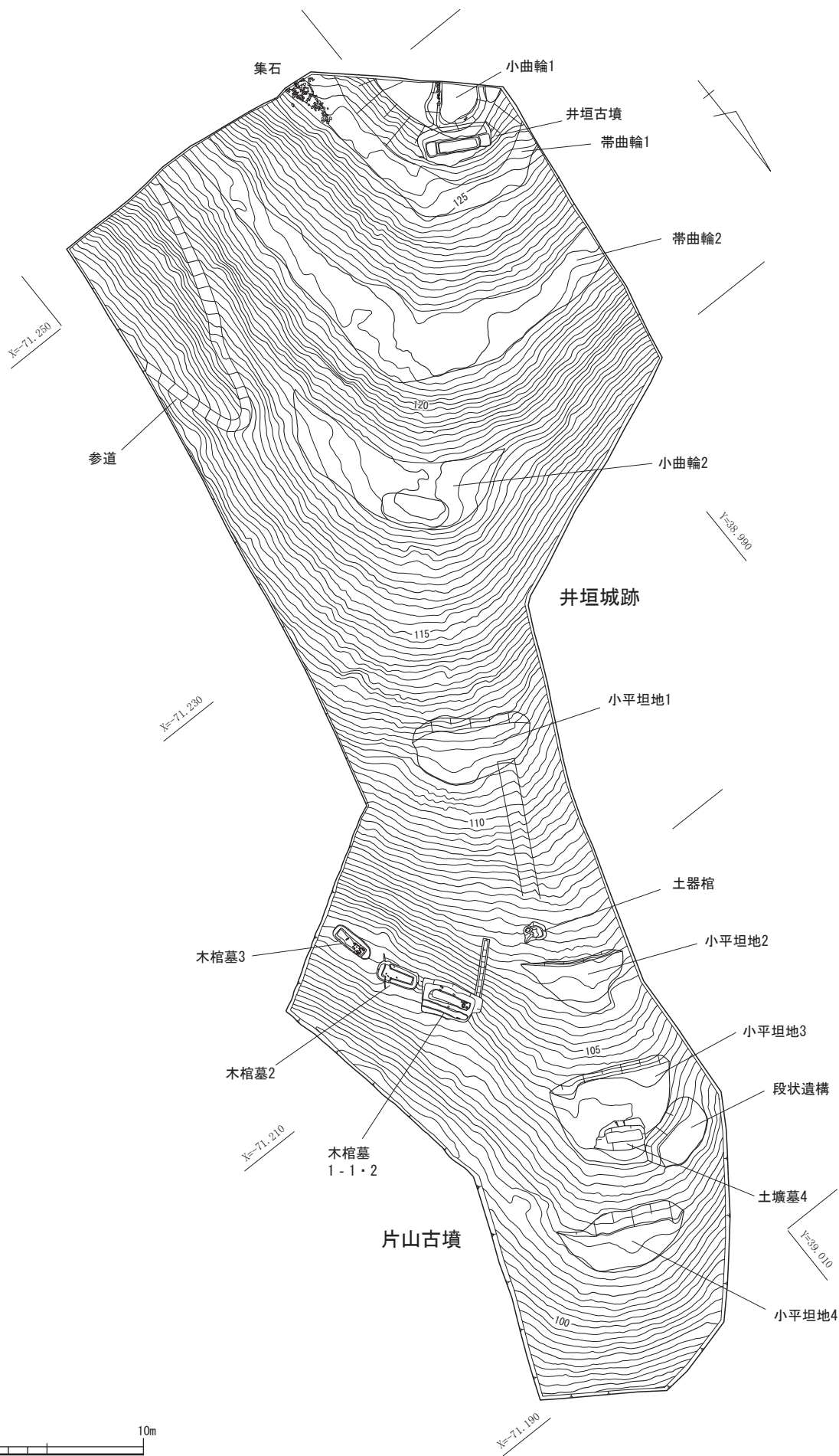


- | | | | | | | |
|---|---------|--------|--------|------|--------|--------|
| 1 | 10YR6/4 | にぶい黄橙色 | 極細砂～細粒 | シルト質 | しまりが悪い | 地山礫混じり |
| 2 | 10YR3/1 | 黒褐色 | 極細砂～細粒 | 灰層 | | |
| 3 | 5YR5/8 | 明赤褐色 | 極細砂～細粒 | 地山礫 | が多く混じる | |
| 4 | 10GY5/1 | 緑灰色 | 粗粒～細粒 | 滞水層 | | |

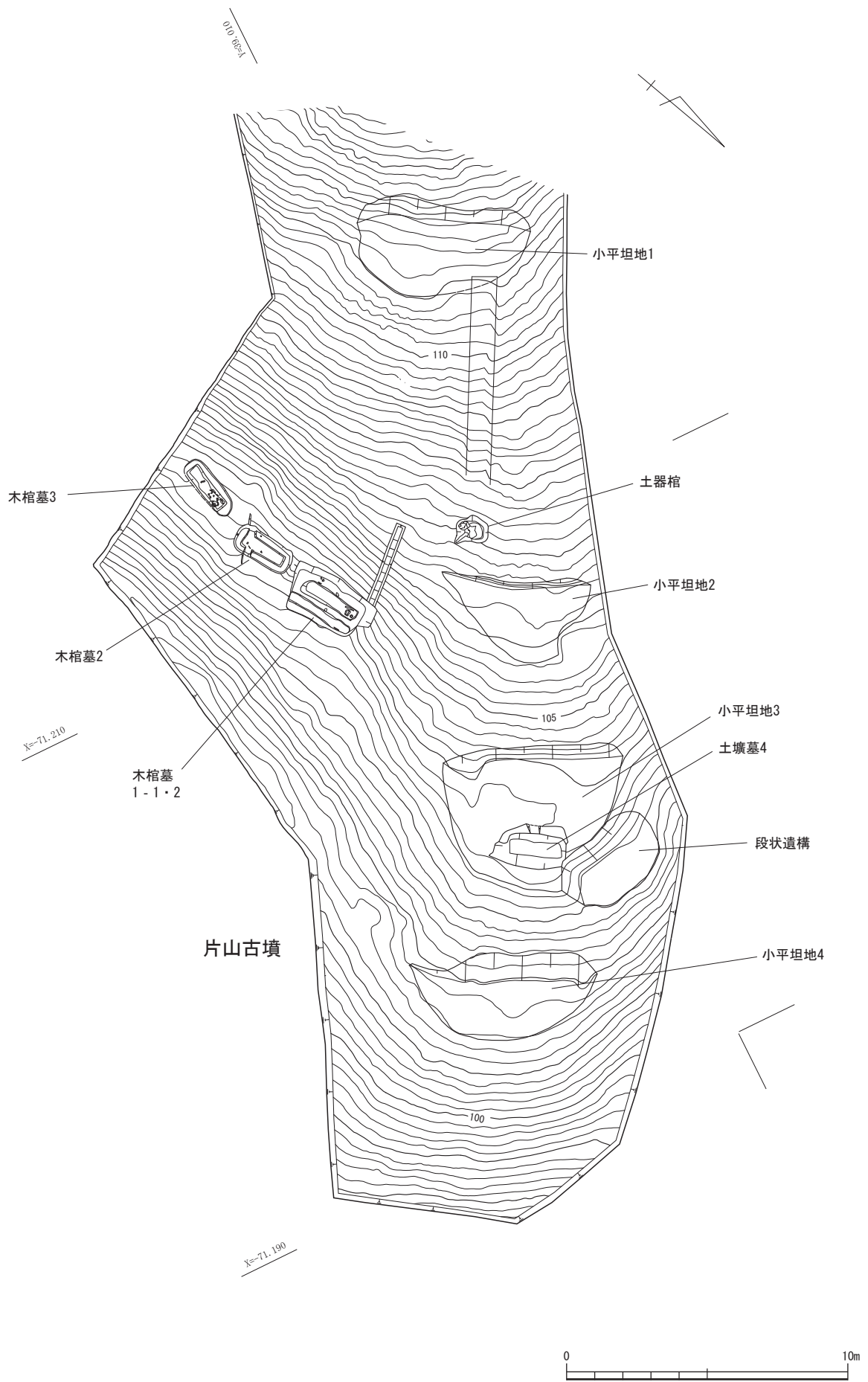
- | | | | | |
|---|---------|--------|--------|-----------------|
| 1 | 5Y3/1 | オリーブ黒色 | 極細砂～細砂 | |
| 2 | 10R4/8 | 赤色 | 極細砂～細粒 | 現状に赤色塊を含む、地山土か？ |
| 3 | 2.5Y6/2 | 灰黄色 | 極細砂～細粒 | やや粗砂を含む。 |
| 4 | 5Y3/1 | オリーブ黒色 | 極細砂～細粒 | 粗砂を含む。 |
| 5 | 2.5Y5/1 | 黄灰色 | 極細砂～細粒 | |
| 6 | 2.5Y3/1 | 黒褐色 | 極細砂～細粒 | |
| 7 | 7.5Y5/1 | 灰色 | 極細砂～細粒 | |



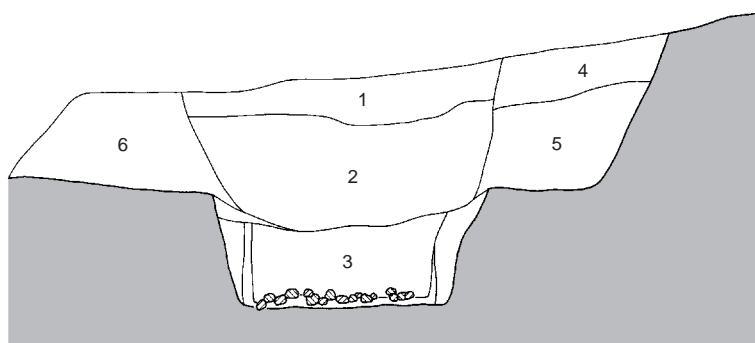
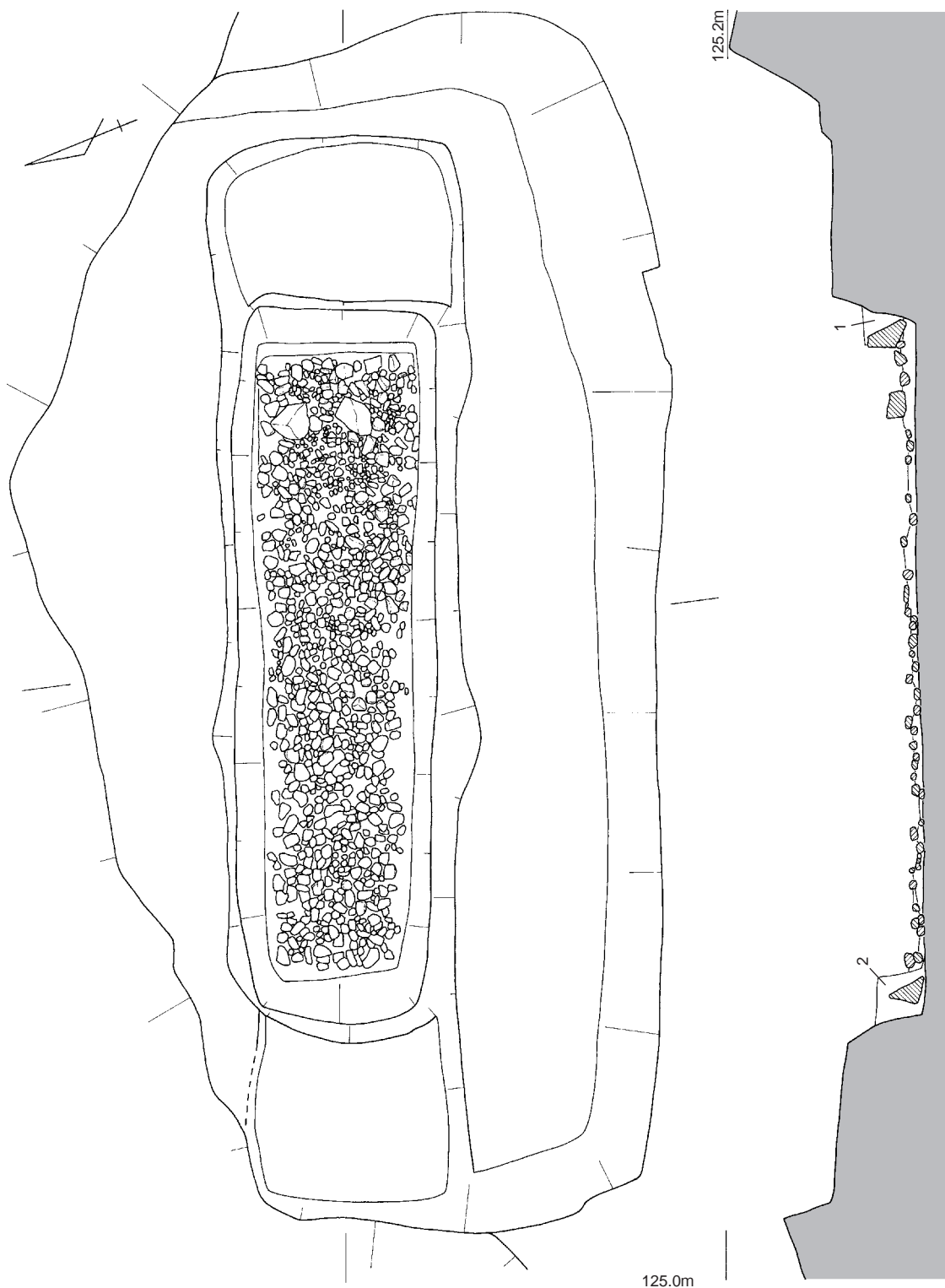
SB4 土坑平面図・断面図



古墳時代 遺構図

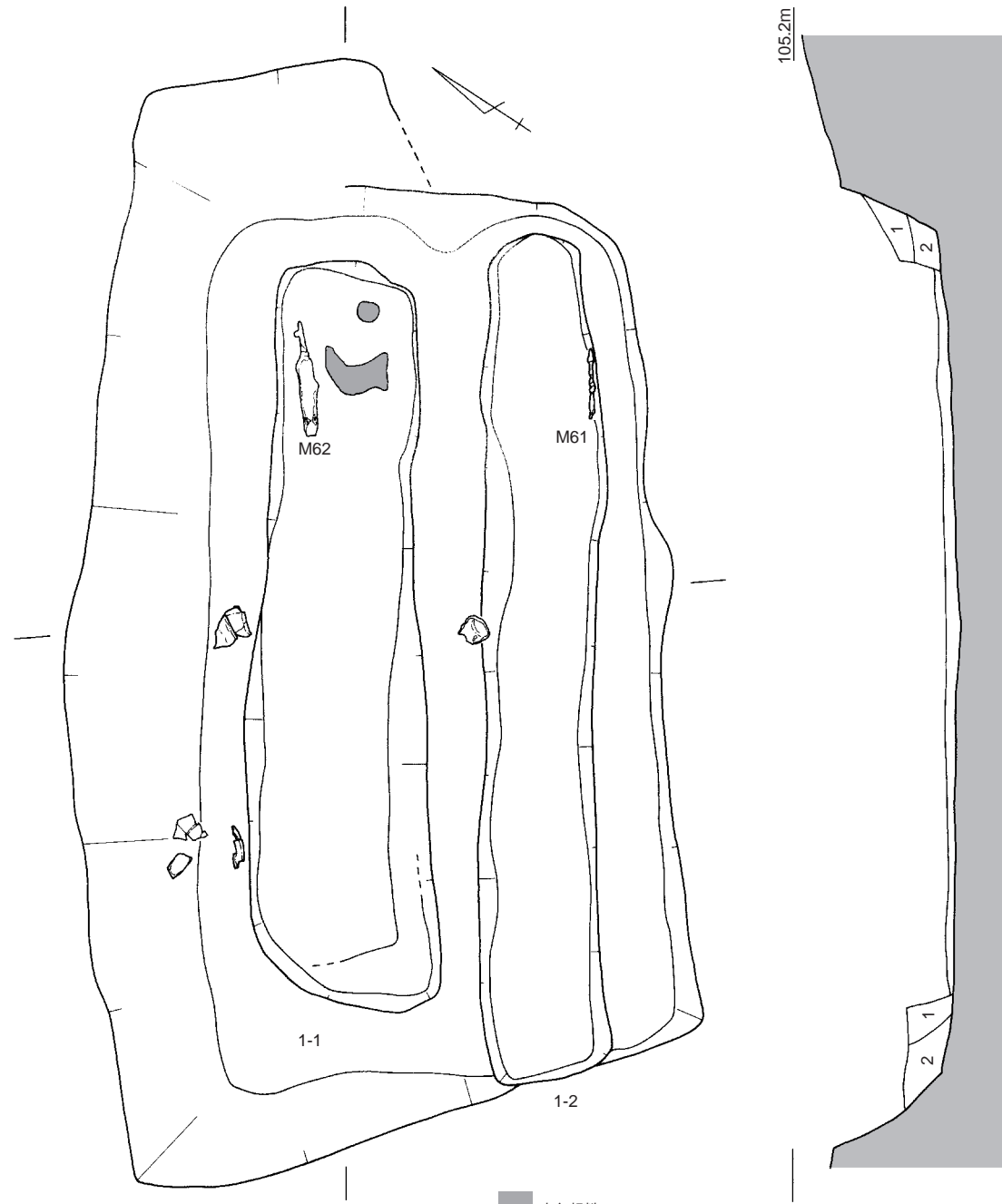


遺構配置図

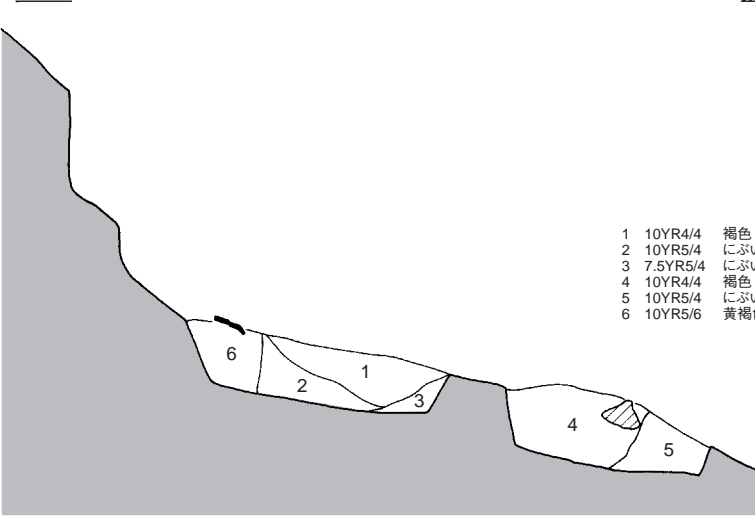


- 1 2.5Y4/1 黄灰色 極細砂～細砂(旧表土の影響で暗色化 しまりがない)
- 2 2.5YR5/8 明赤褐色 極細砂～細砂(10～数cm大の地山礫を多量に含む、シルト質、ややしまる)
- 3 2.5YR6/8 明黄褐色 極細砂～細砂(2～3cm大の地山礫を含む粒子の淘汰が進む)
- 4 2.5YR6/6 明黄褐色 極細砂～細砂(5～数cm大の地山礫を含む、シルト質、ややしまる)
- 5 10R5/6 黄褐色 極細砂～細砂(10～15cmの地山礫を多量に含む、シルト質、ややしまる)
- 6 2.5YR6/6 明黄褐色 極細砂～細砂(5～数cm大の地山礫を含む。)

井垣古墳 主体部平面図・断面図

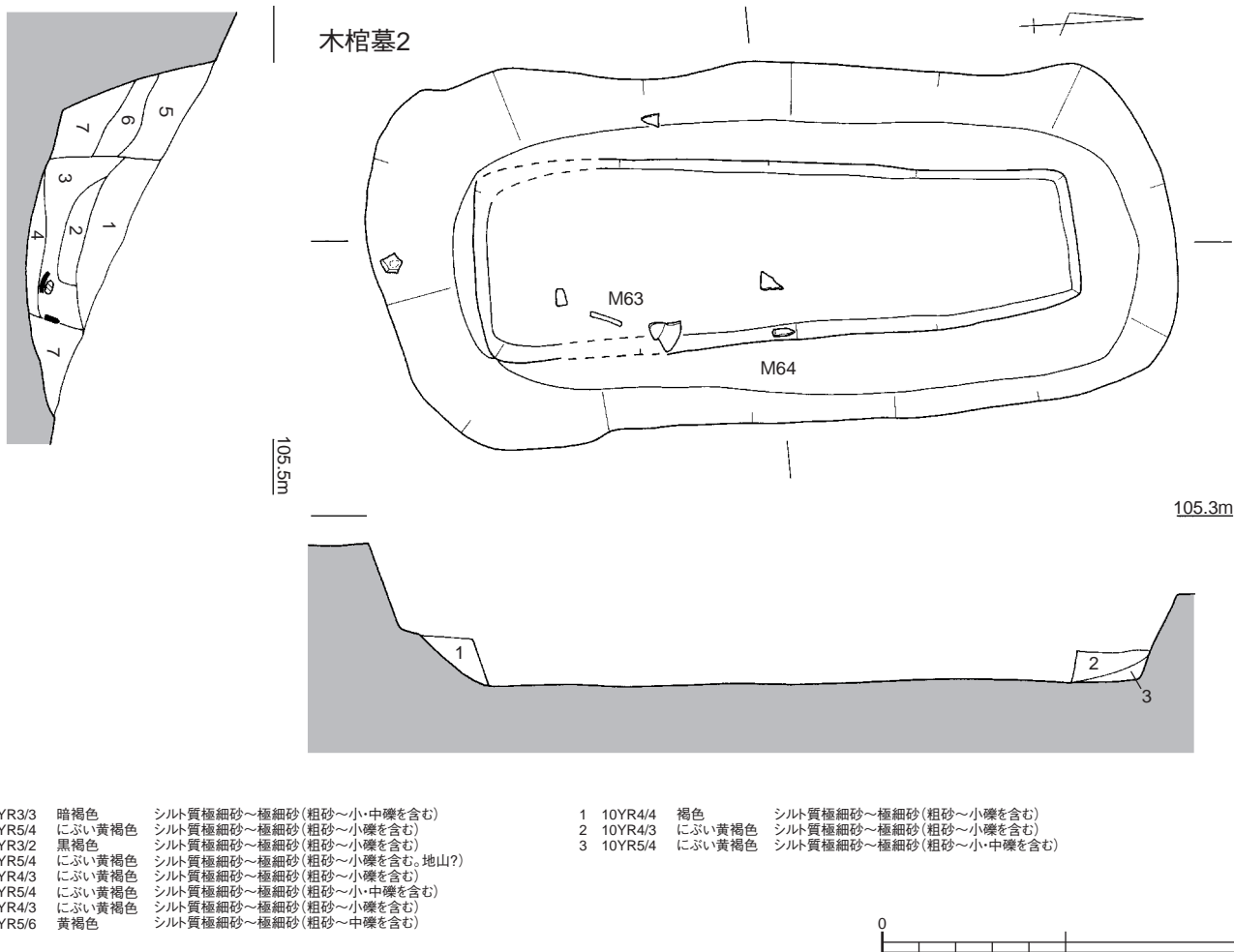
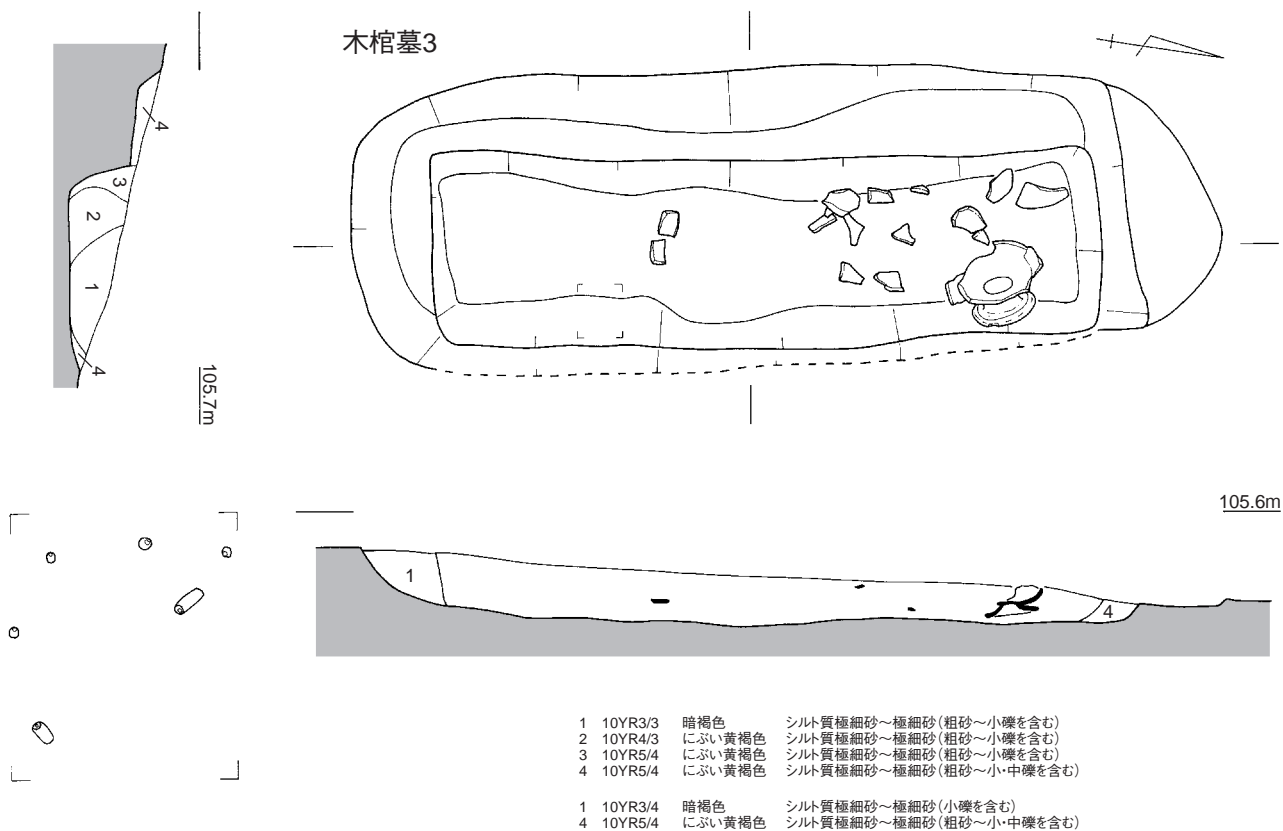


1 10YR3/4 暗褐色 シルト質極細砂～極細砂(小～中礫を含む)
 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂～極細砂(粗砂～小礫を含む)



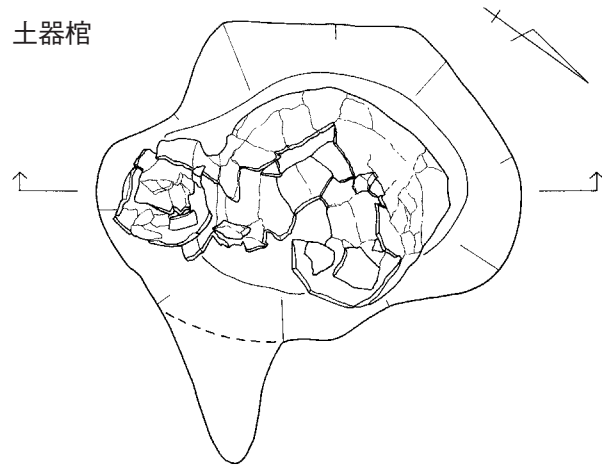
1 10YR4/4 褐色 極細砂～シルト質極細砂(粗砂～小礫を含む)
 2 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂～極細砂(粗砂含む)
 3 7.5YR5/4 にぶい褐色 シルト質極細砂～極細砂(粗砂含む)
 4 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂～極細砂(粗砂～小礫を含む)
 5 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂～極細砂(粗砂～小礫を含む)
 6 10YR5/6 黄褐色 シルト質極細砂～極細砂(小～中礫を含む)

片山古墳 木棺墓 1-1・2 平面図・断面図



片山古墳 木棺墓2・3 平面図・断面図

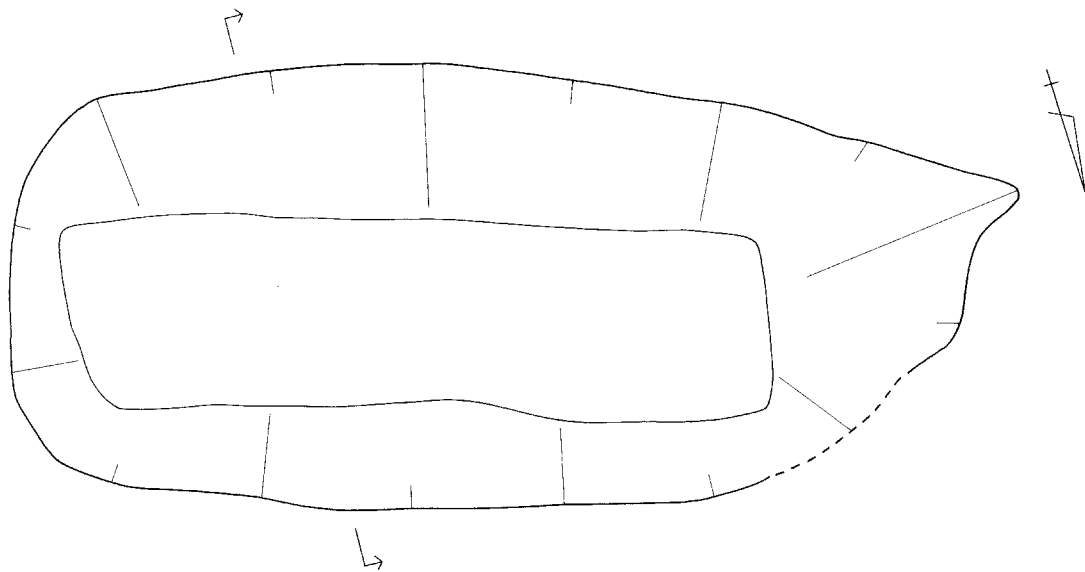
土器棺



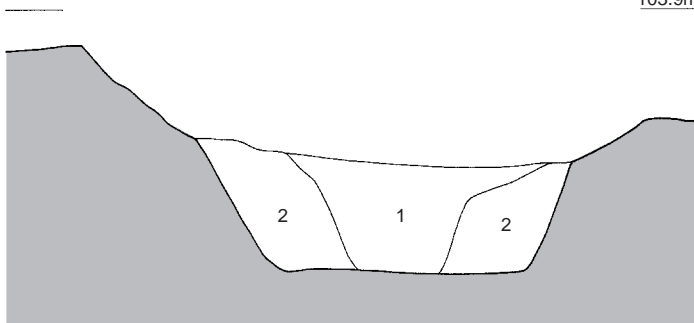
107.3m



土壇墓4



103.9m



- 1 5YR4/4 にぶい赤褐色 極細砂～シルト質極細砂(小～中礫を含む)
- 2 5YR4/8 赤褐色 極細砂～シルト質極細砂(粗砂～小礫を含む)



片山古墳 土器棺・土壇墓4 平面図・断面図

写真図版



北から



東から

写真図版 2 城跡遠景



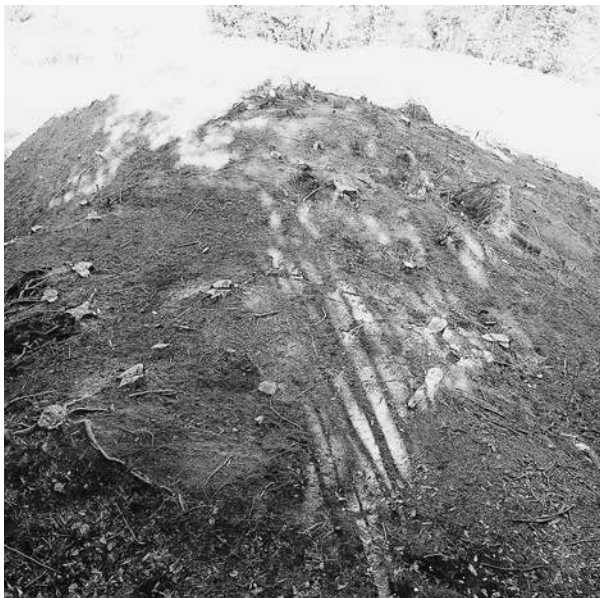
南から



東から



井垣城跡（東北から）



井垣城跡（南から）



片山古墳（南から）



伝大坪八幡神社遺跡（西から）



伝大坪八幡神社遺跡（南から）

写真図版4 井垣城跡 調査区全景



北東から



南から



完掘後の井垣城跡



小曲輪1 (南から)



小平坦地2・3
(南から)

写真図版6 井垣城跡 帯郭など



帯郭1 (南から)



帯郭2 (西から)



帯郭2 (西から)



集石全景 (西から)



集石近景 (西から)



集石石材 (西から)



段状遺構断面 (東から)



片山古墳 段状遺構 (東から)

写真図版7 井垣城跡 土層断面



中央トレンチ表土断面（東から）



東トレンチ表土断面（東から）



西トレンチ表土断面（東から）



小平坦地3曲輪断面（東から）



中央トレンチ下端断面（東南から）



東トレンチ斜面断面（北西から）



帯曲輪2盛土断面中央（東から）



帯曲輪1東側盛土断面（南から）

写真図版8 伝大坪八幡神社遺跡 全景



南から



北から



南から



北から



SB 1 (北から)



SB 1 (南から)



SB 2・3 (西から)



SB 3 (北から)



SB 2 (北から)

写真図版 12 伝大坪八幡神社遺跡 建物礎石



S B 1 礎石1 (西から)



S B 1 礎石2 (西から)



S B 1 礎石3 (西から)



S B 1 礎石9 (西から)



S B 1 礎石11 (西から)



S B 1 礎石13 (西から)



S B 1 礎石22 (東から)



S B 1 礎石23 (西から)



S B 1 礎石25 (東から)



S B 1 礎石26 (東から)



S B 2 礎石1 (南から)



S B 2 礎石13 (北真上から)



S B 2 礎石4 (南から)



S B 2 礎石12 (南から)



S B 2 礎石13 (北から)



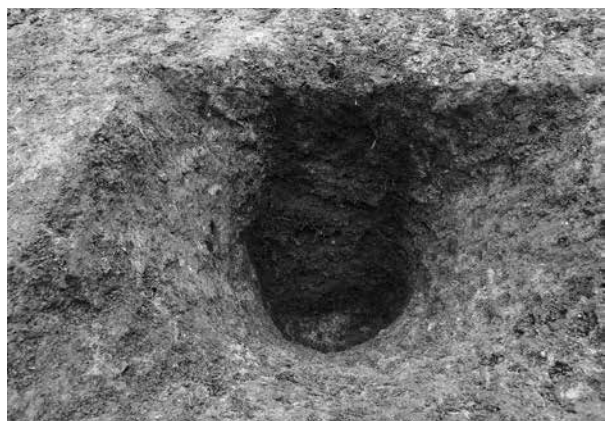
S B 3 礎石2 (西から)



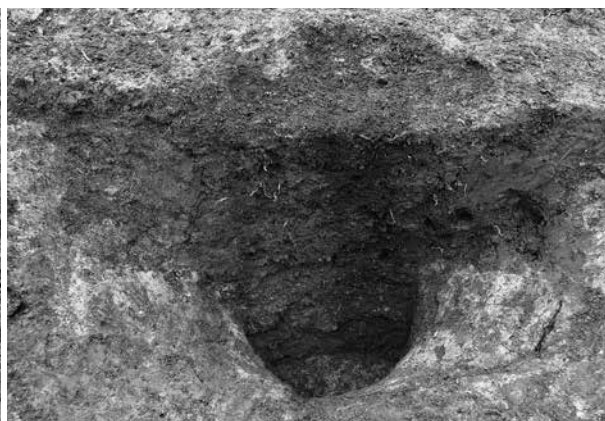
S B 3 礎石4 (西から)



S B 3 礎石5 (西から)



SB4 P7断面 (西から)



SB4 P8断面 (西から)



SB4 P9断面 (東から)



SB4 P10断面 (東から)



SB4 P11断面 (北から)



SB4 P2断面 (西から)



SB4 P3断面 (東から)

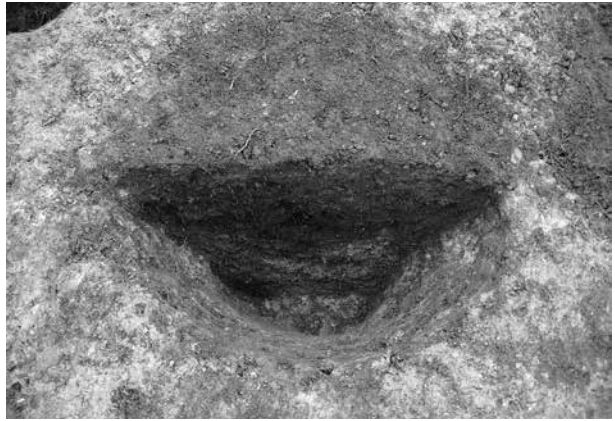


SB4 P4断面 (西から)

写真図版 14 伝大坪八幡神社遺跡 土坑



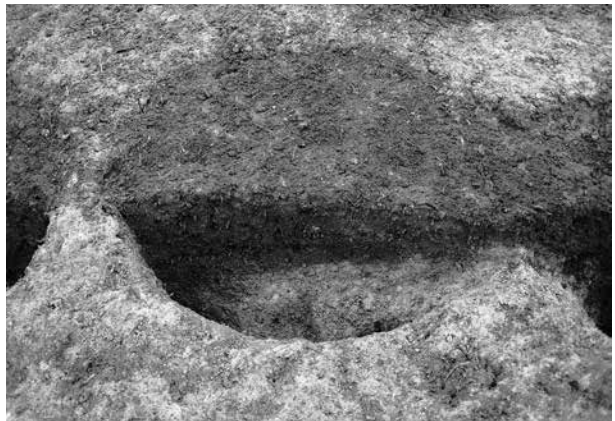
SK3完掘（東から）



SK3断面（東から）



SK4完掘（東から）



SK4断面（東から）



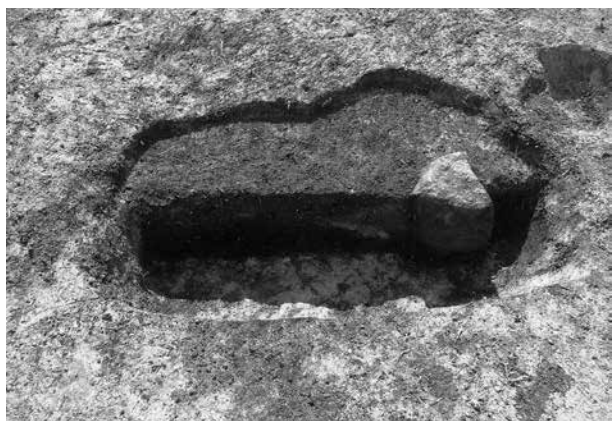
SK5完掘（東から）



SK5断面（東から）



SK6完掘（東から）



SK6断面（北から）



中央断面（南から）



中央断面（南から）



中央トレンチ北壁



中央トレンチ北壁



北断面（南から）



北トレンチ近景（南東から）



北トレンチ全景（南西から）



南から



東から



木棺墓 1～3
(西から)



木棺墓 1-1・2
(東から)



木棺墓 2 (北から)



木棺墓3 (南から)



木棺墓3・土器近景
(北から)



土器棺 (北東から)

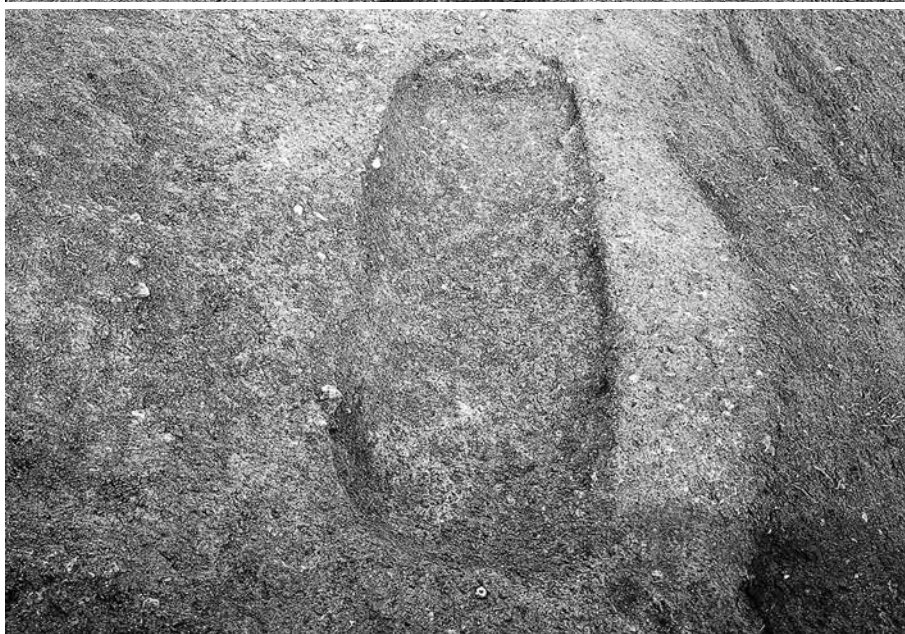
木棺墓 1-1・2
完掘状況
(西北から)

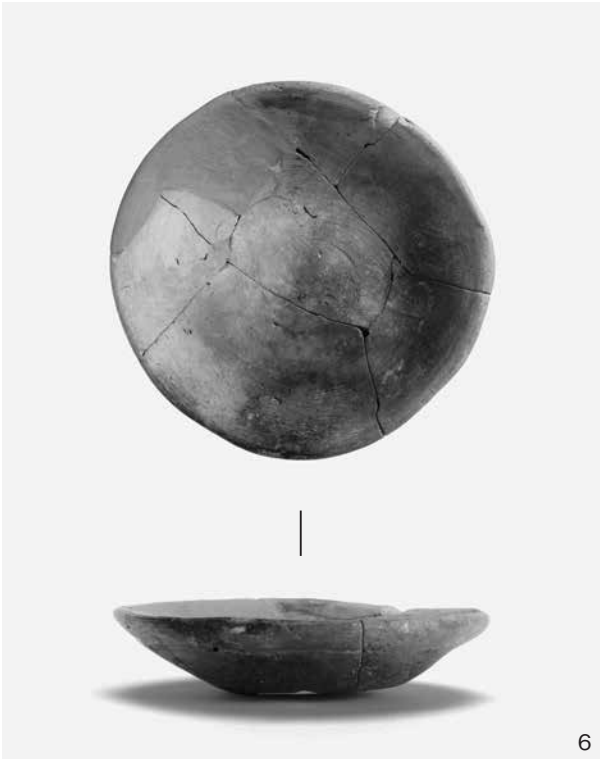


木棺墓 2 完掘状況
(北から)



木棺墓 3 完掘状況
(北から)

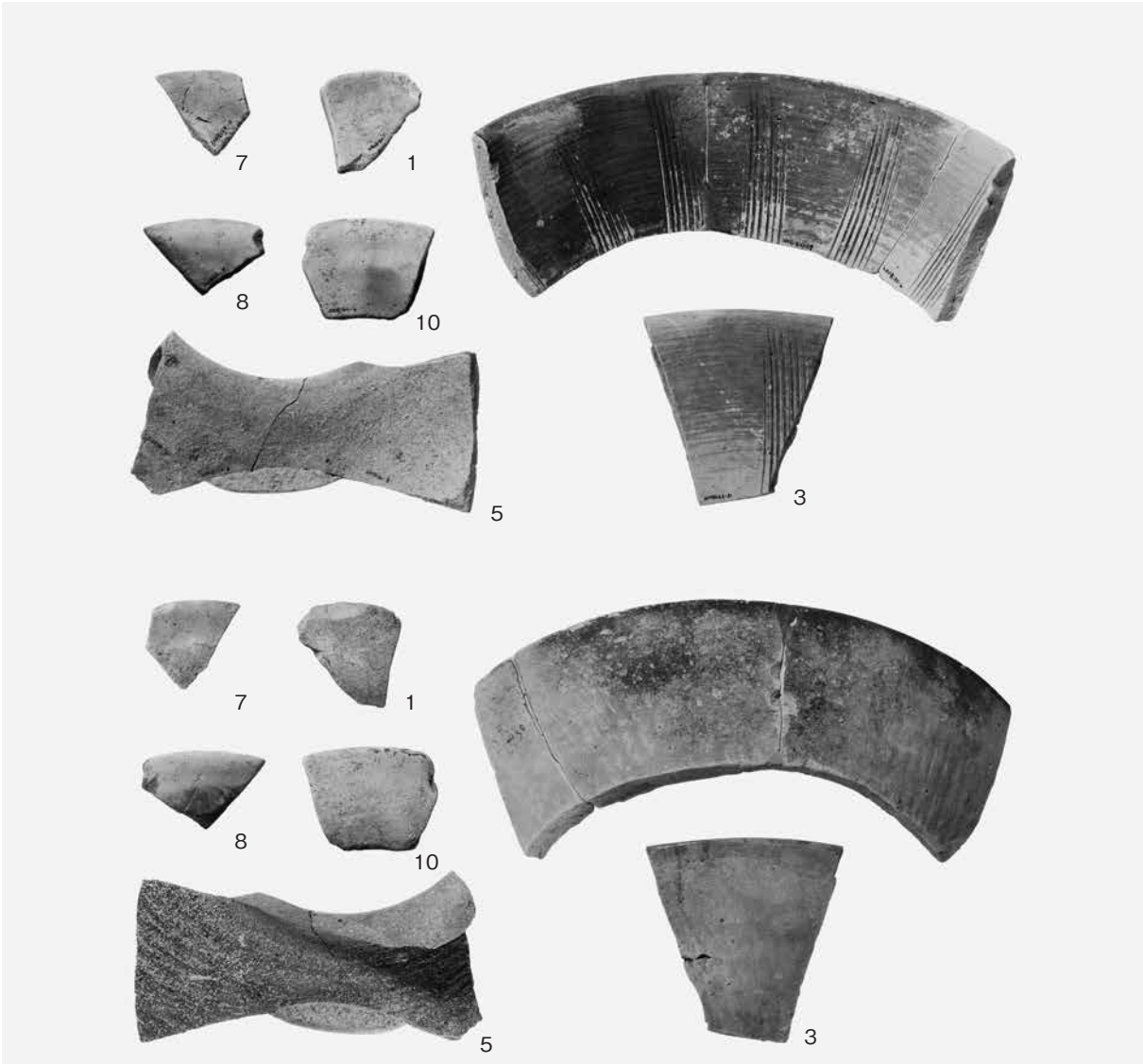




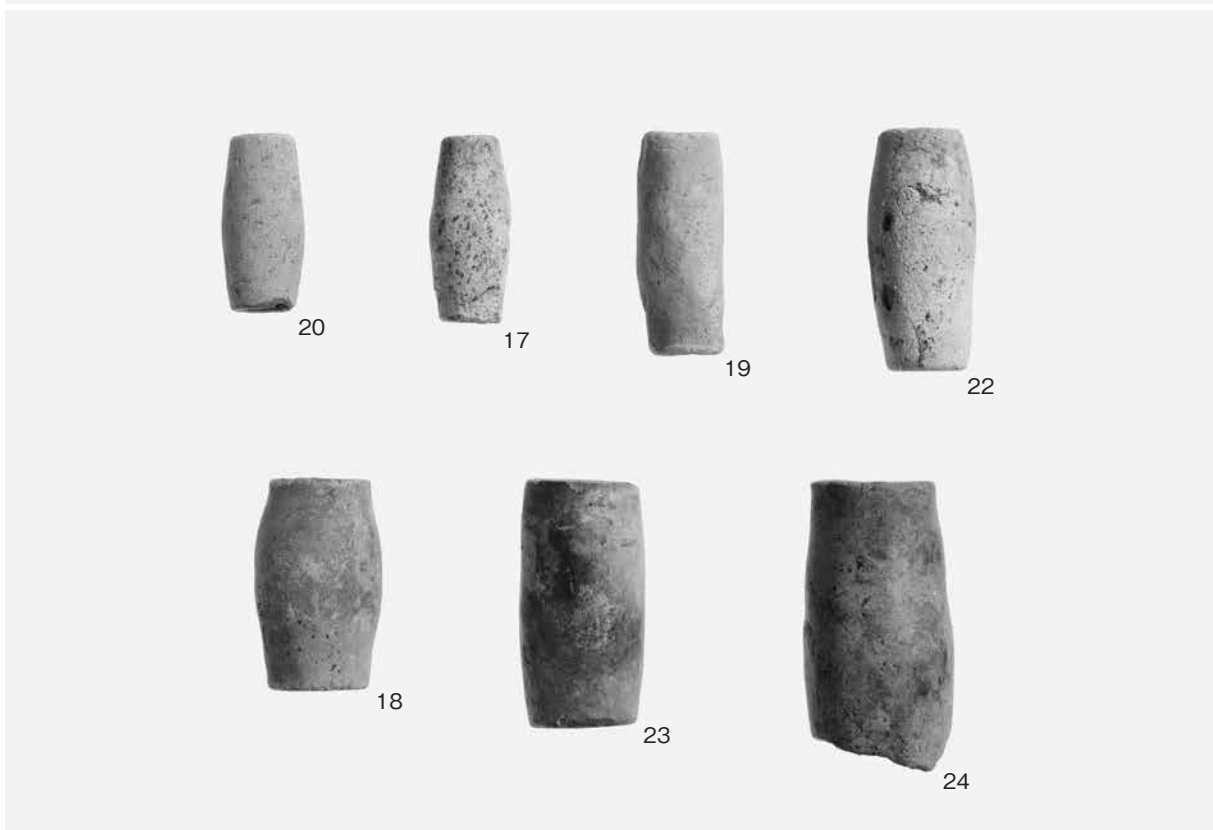
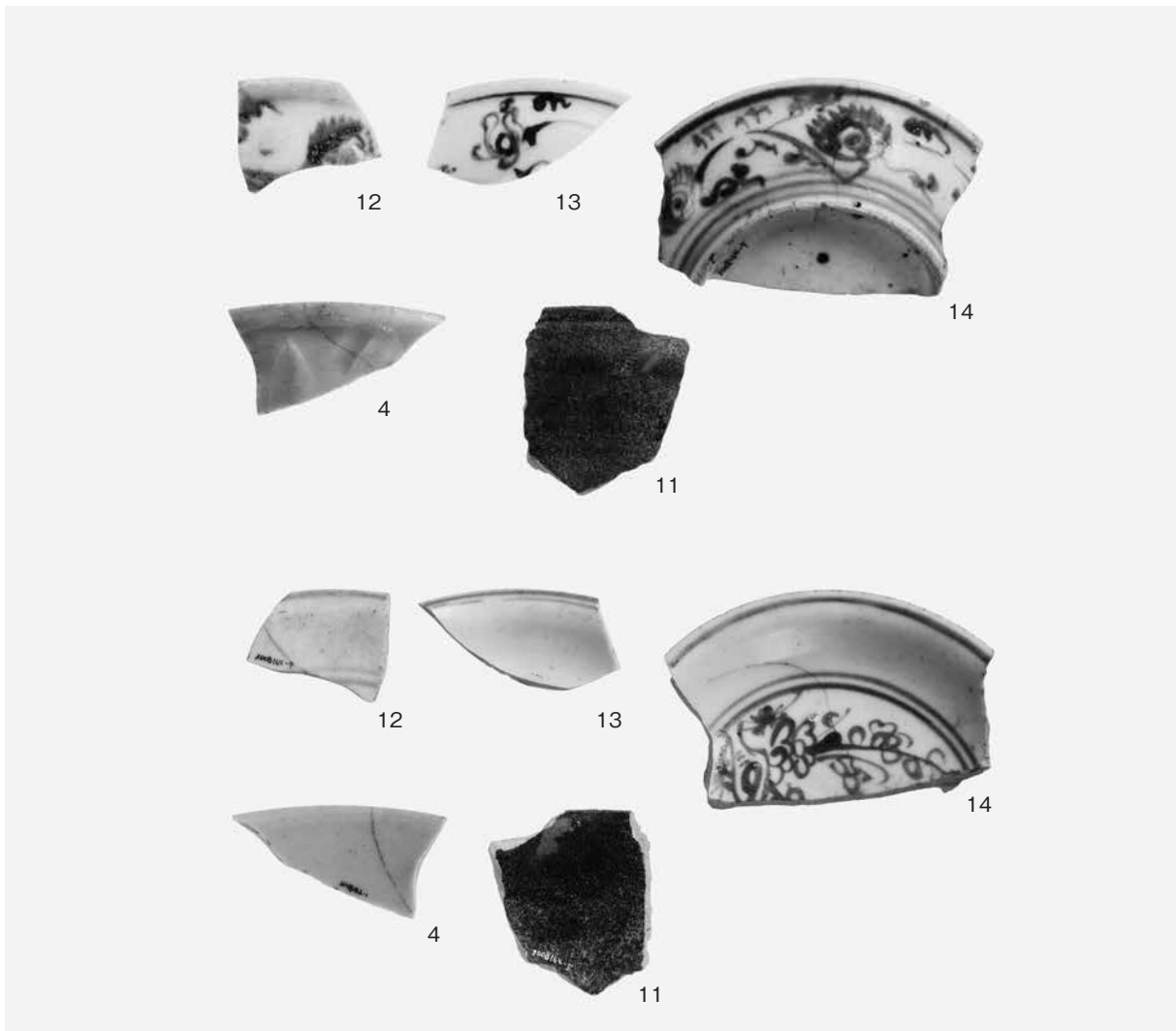
6



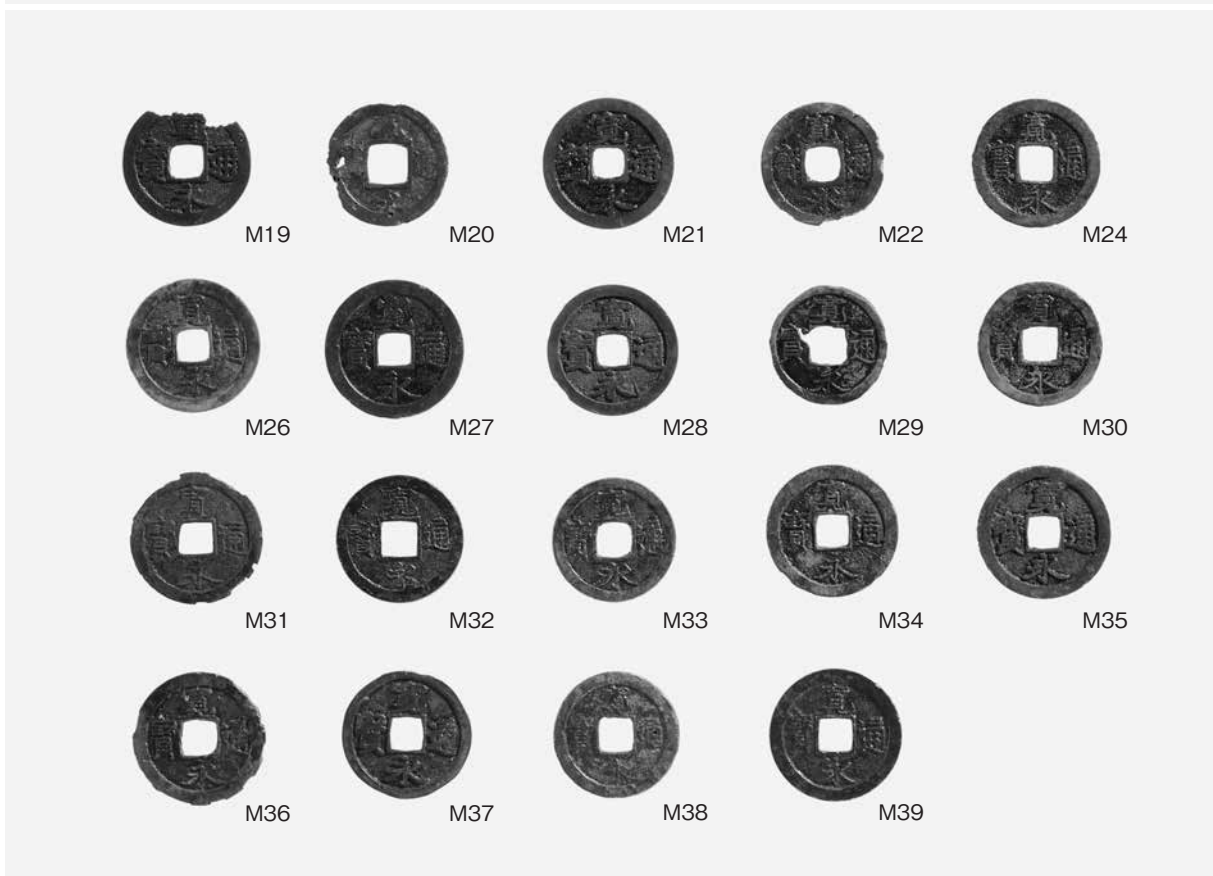
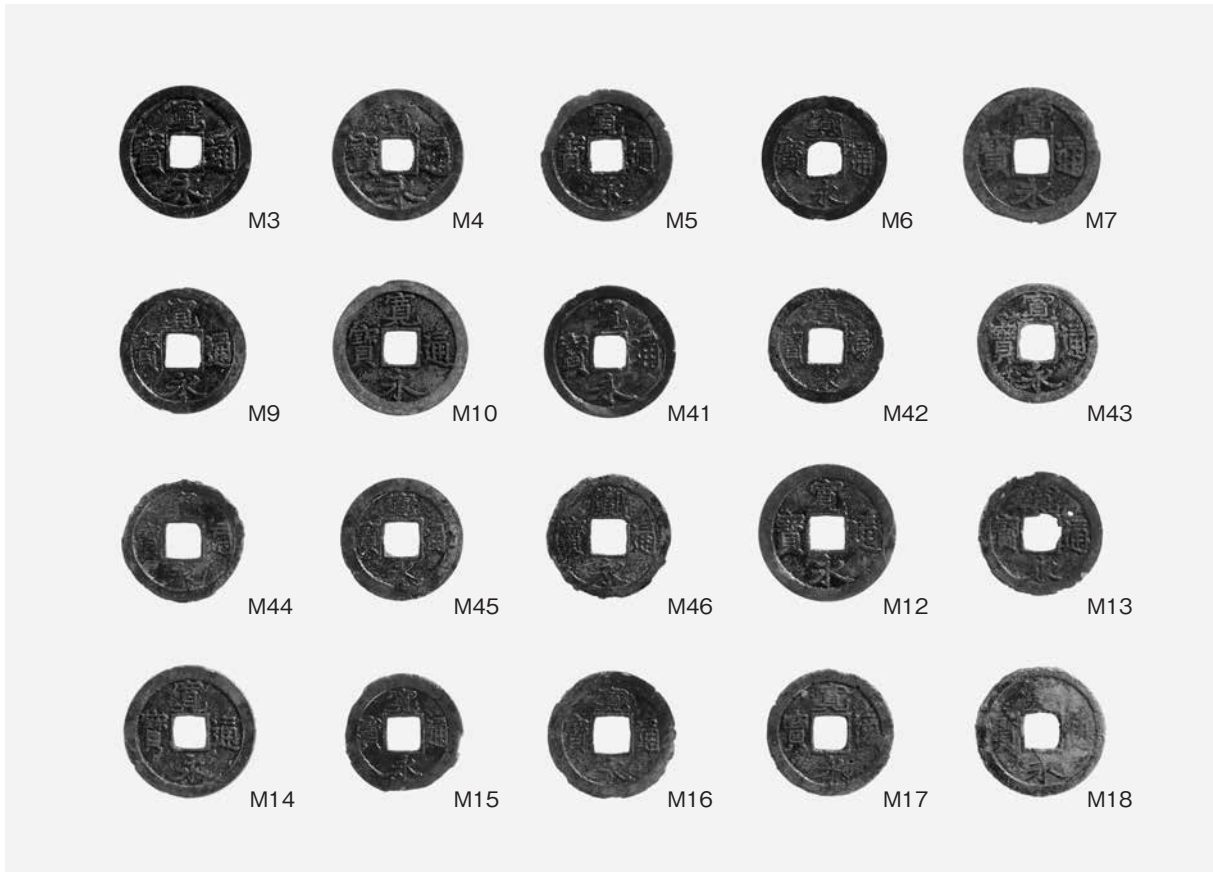
9



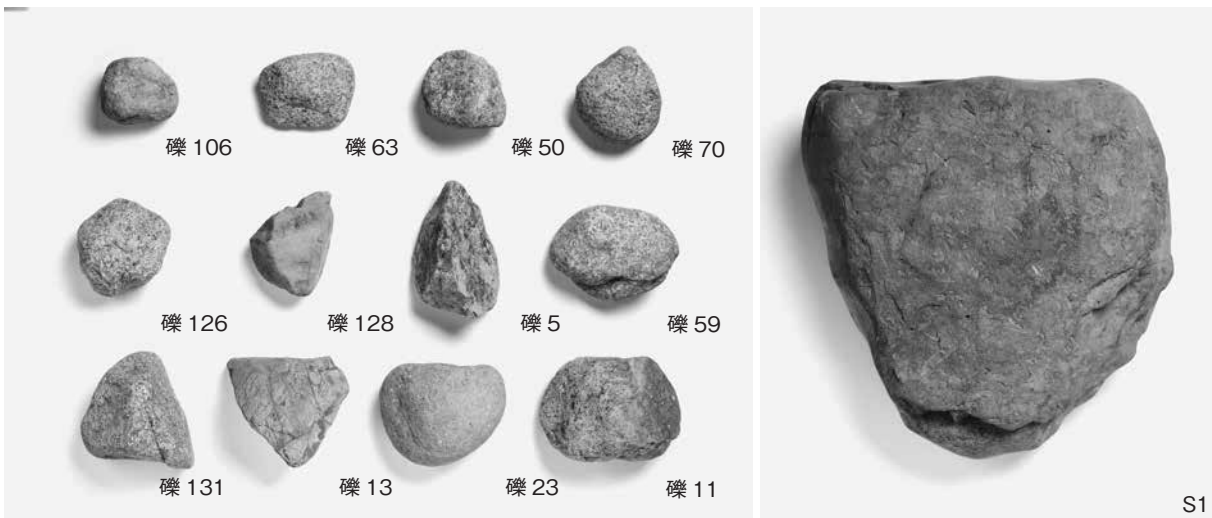
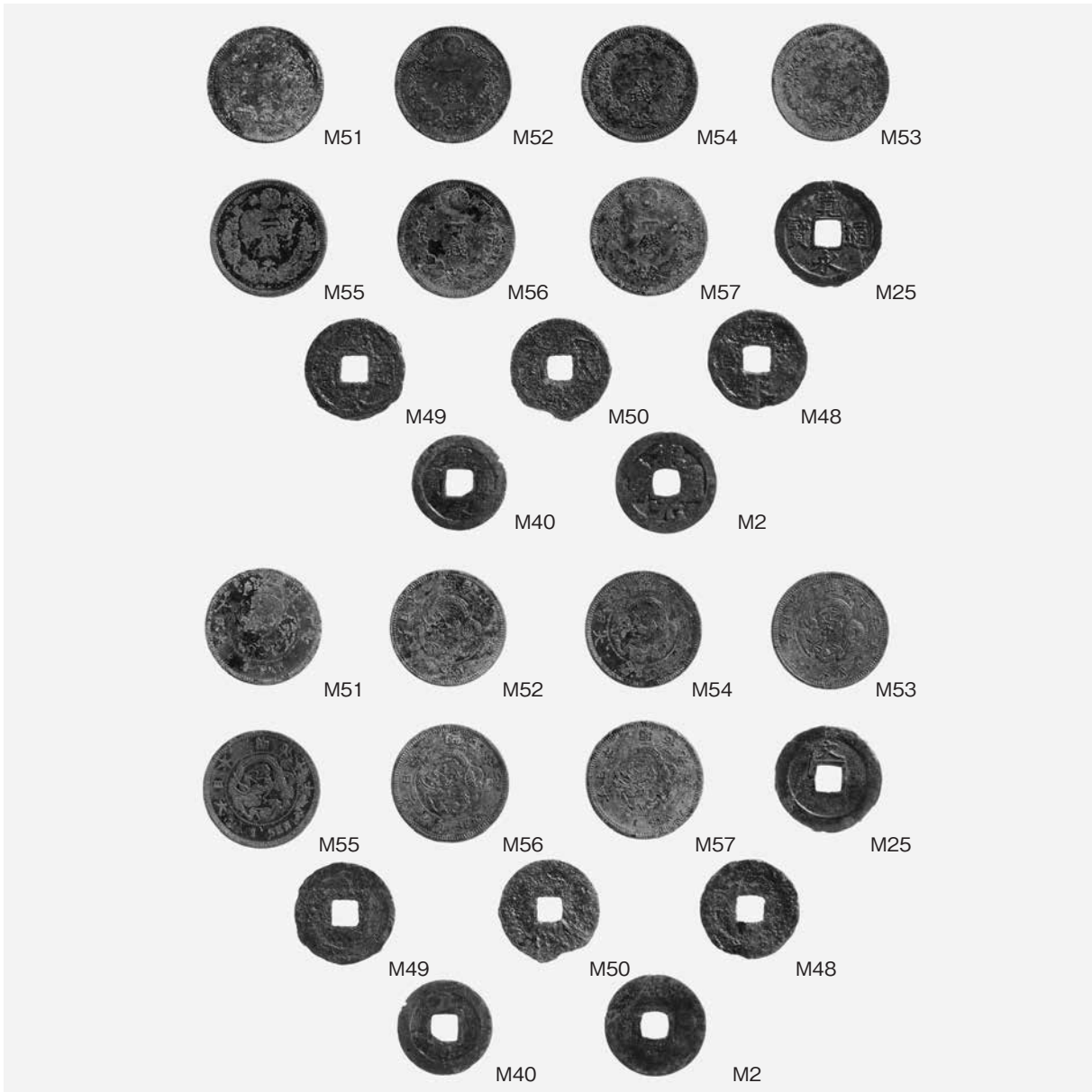
出土遺物 中世



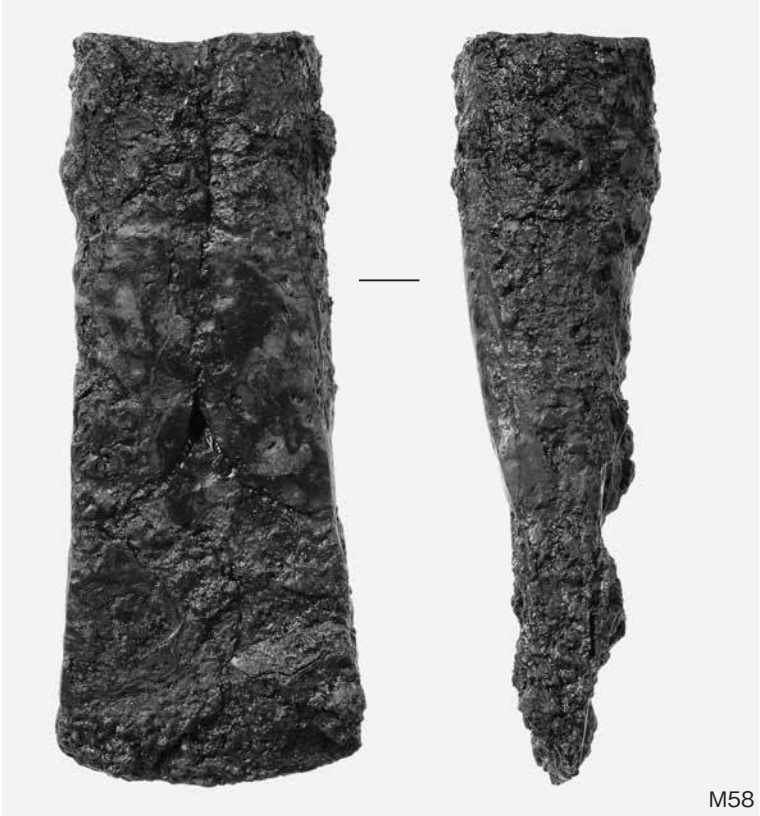
出土遺物 中世



出土遺物 錢貨



出土遺物 錢貨・石製品



M58



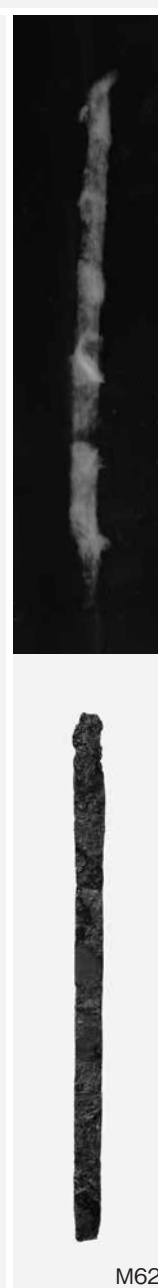
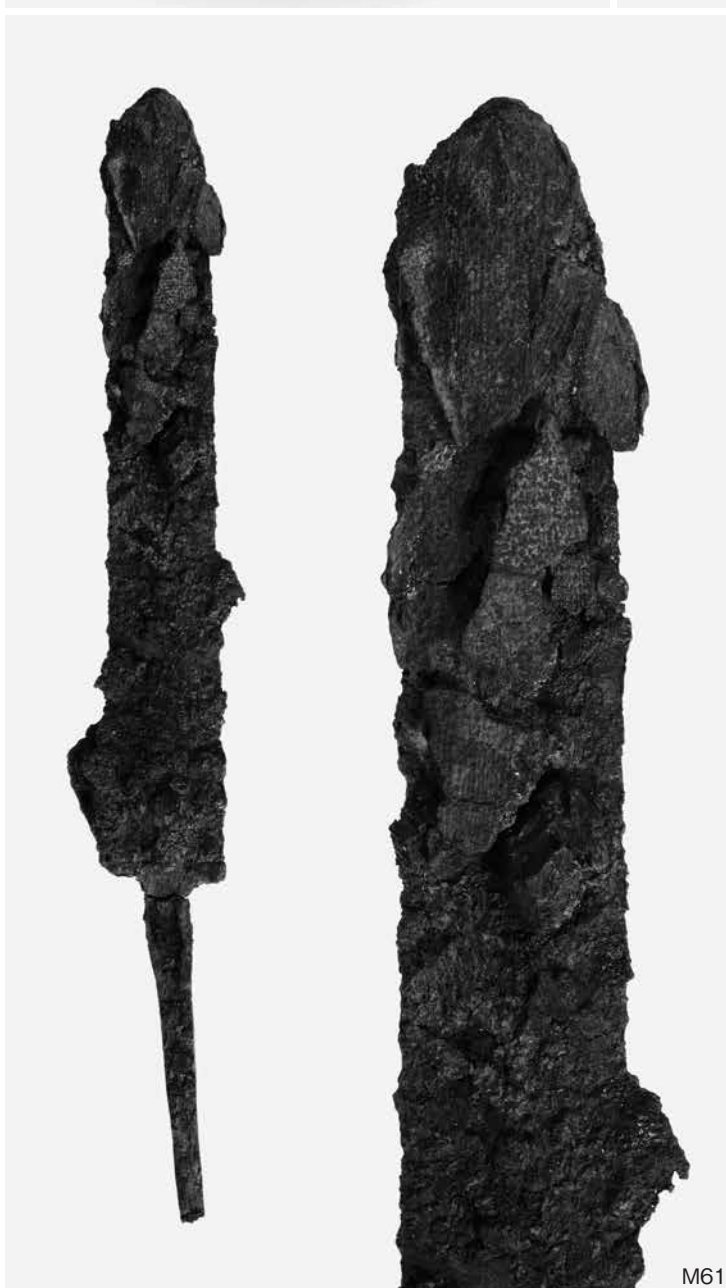
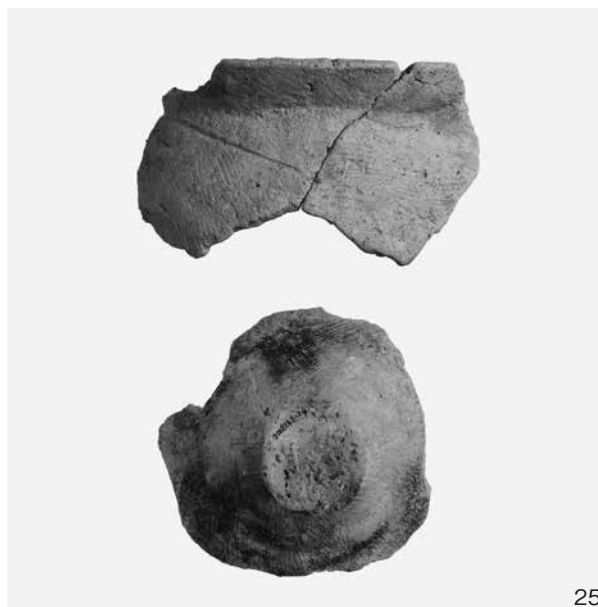
M59



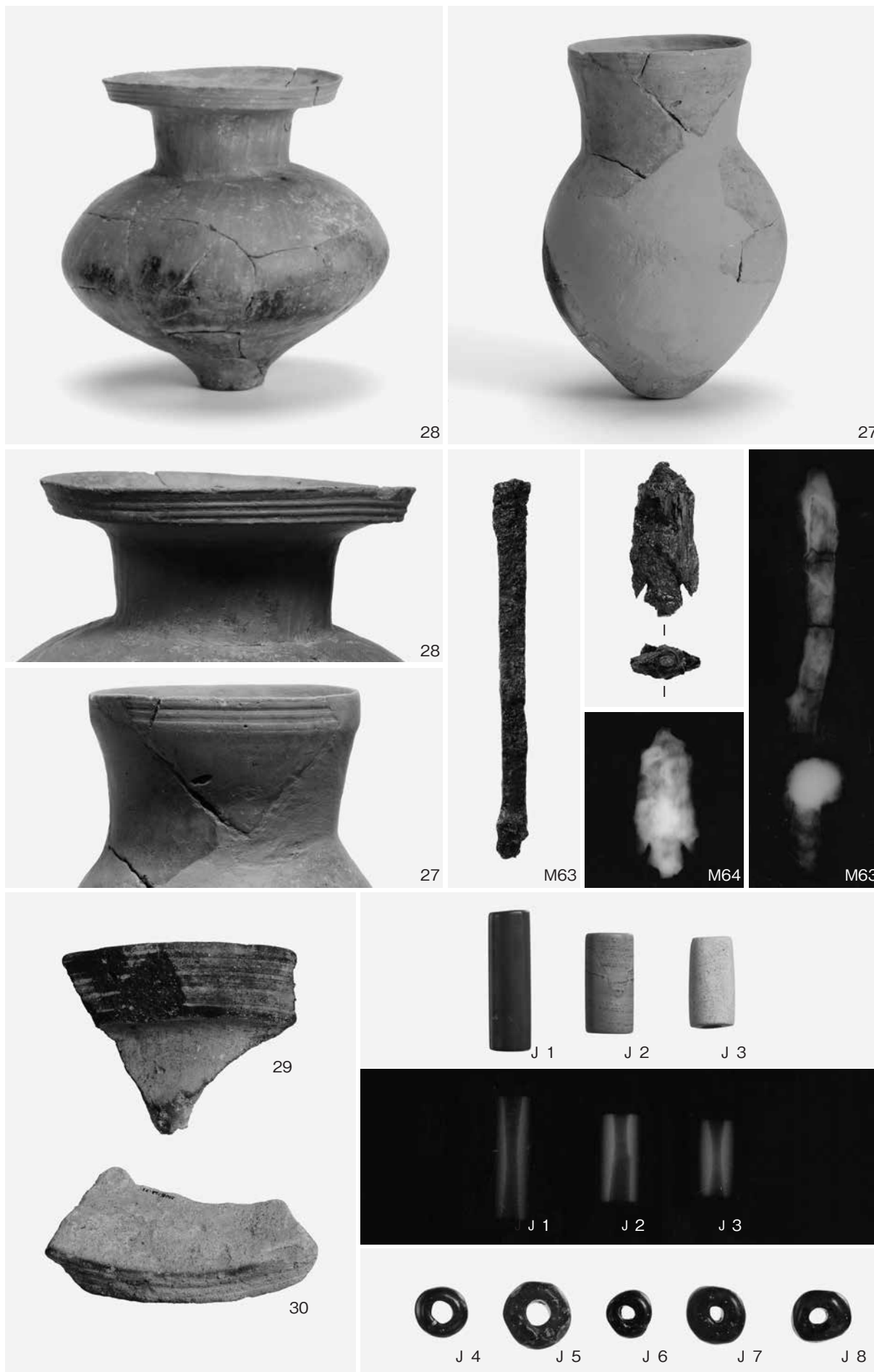
M60



M65



片山古墳 木棺墓 1 出土遺物



片山古墳 木棺墓2・3ほか出土遺物



31

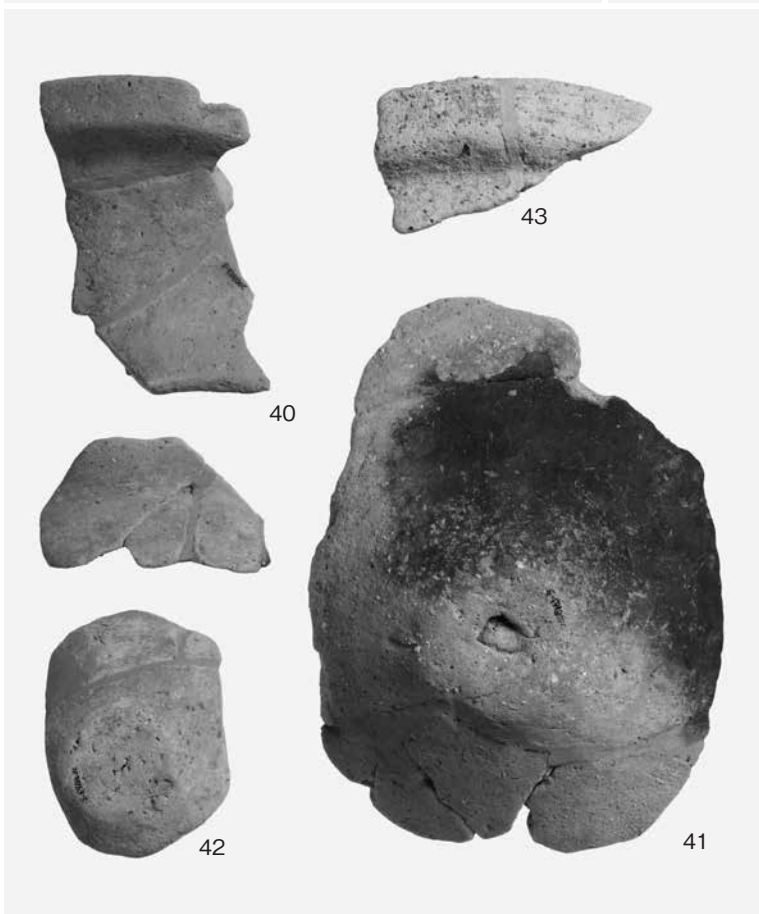


33



32

片山古墳 土器棺・小平坦地 1 出土遺物



片山古墳 小平坦地 2・3 出土遺物



片山古墳 小平坦地 3・4 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いがきじょうあと・かたやまこふん・でんおおつぼはちまんじんじゃいせき							
書名	井垣城跡・片山古墳・伝大坪八幡神社遺跡							
副書名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第458冊							
編著者名	山上雅弘・篠宮 正							
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内） TEL 079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL 078-362-3784							
発行年月日	平成26（2014）年3月26日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL 079-437-5589							
(ふりがな) 所収遺跡名	(ふりがな) 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
いがきじょうあと 井垣城跡	やぶしおおつぼ 養父市大坪	28222	690354	35度 21分 24秒	134度 45分 43秒	20081030 ～ 20090310 (2008162)	842㎡	記録保存調査
かたやまこふん 片山古墳	やぶしあぎの 養父市浅野		690435	35度 21分 24秒	134度 45分 43秒	20081030 ～ 20090310 (2008163)	274㎡	
でんおおつぼはちまん じんじゃいせき 伝大坪八幡 神社遺跡					35度 21分 24秒	134度 45分 43秒	20081030 ～ 20090310 (2008164)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
井垣城跡	城跡	戦国時代	郭・帯曲輪		土師器皿・須恵器鉢・甕・青磁碗			
片山古墳	古墳	古墳時代	木棺直葬墳		土師器壺・甕・器台・剣・玉			
伝大坪八幡 神社遺跡	神社	近世～近代	礎石建物（長床など）		土師器皿・須恵器杯・瀬戸焼・染付・銭貨			
要約	戦国時代の山城跡の発掘調査で主郭を囲む、帯曲輪・小郭を検出した。片山古墳は木棺直葬墳で、庄内から布留期の古墳である。伝八幡神社遺跡は本殿が井垣城跡主郭に残されるが、今回調査を行った場所はこの神社の境内にあたり、祭礼などが行われた場所と考えられる。							

兵庫県文化財調査報告 第458冊

養父市

井垣城跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26(2014)年3月26日発行

編集 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 交友印刷株式会社

〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4番5号
